

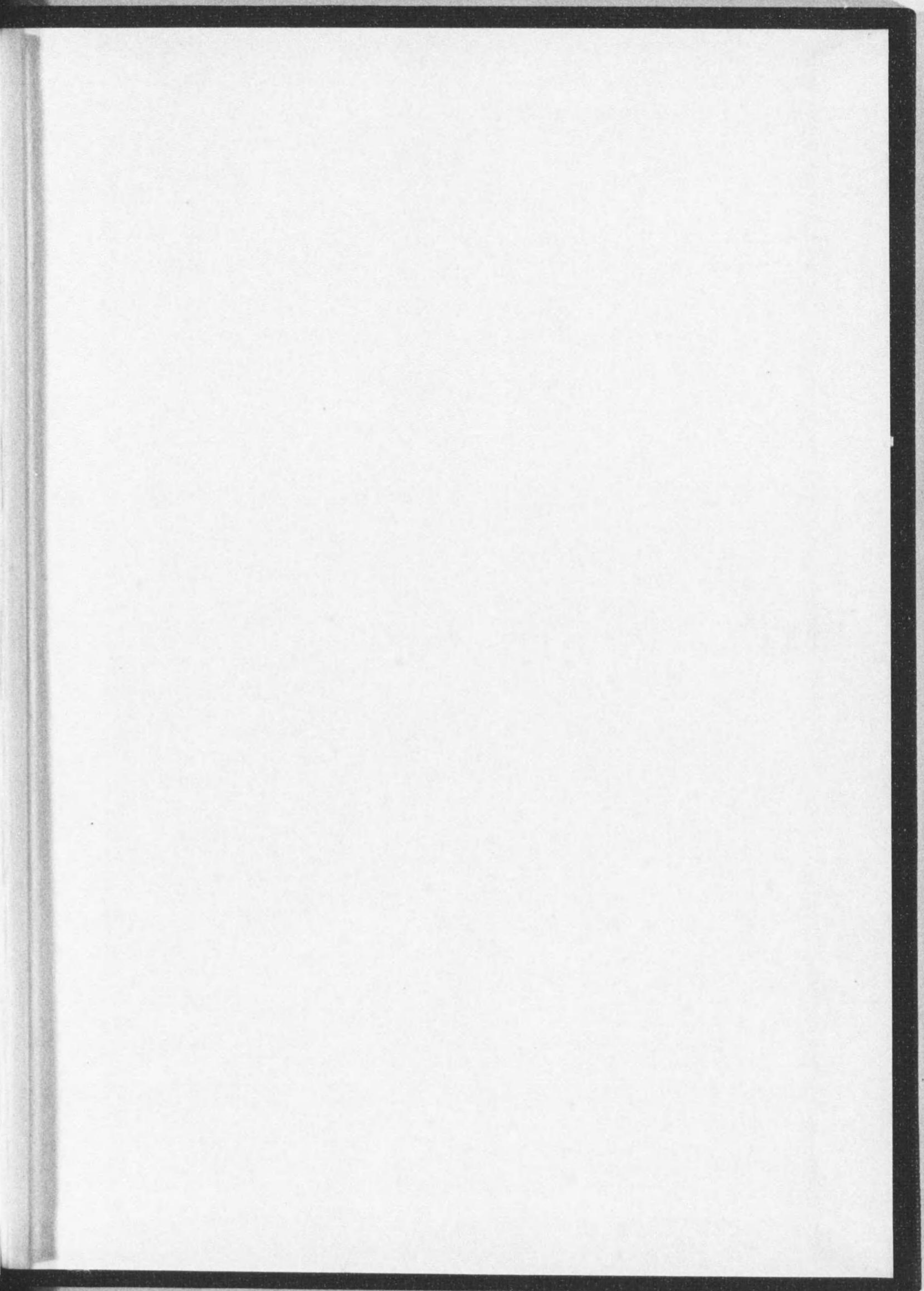
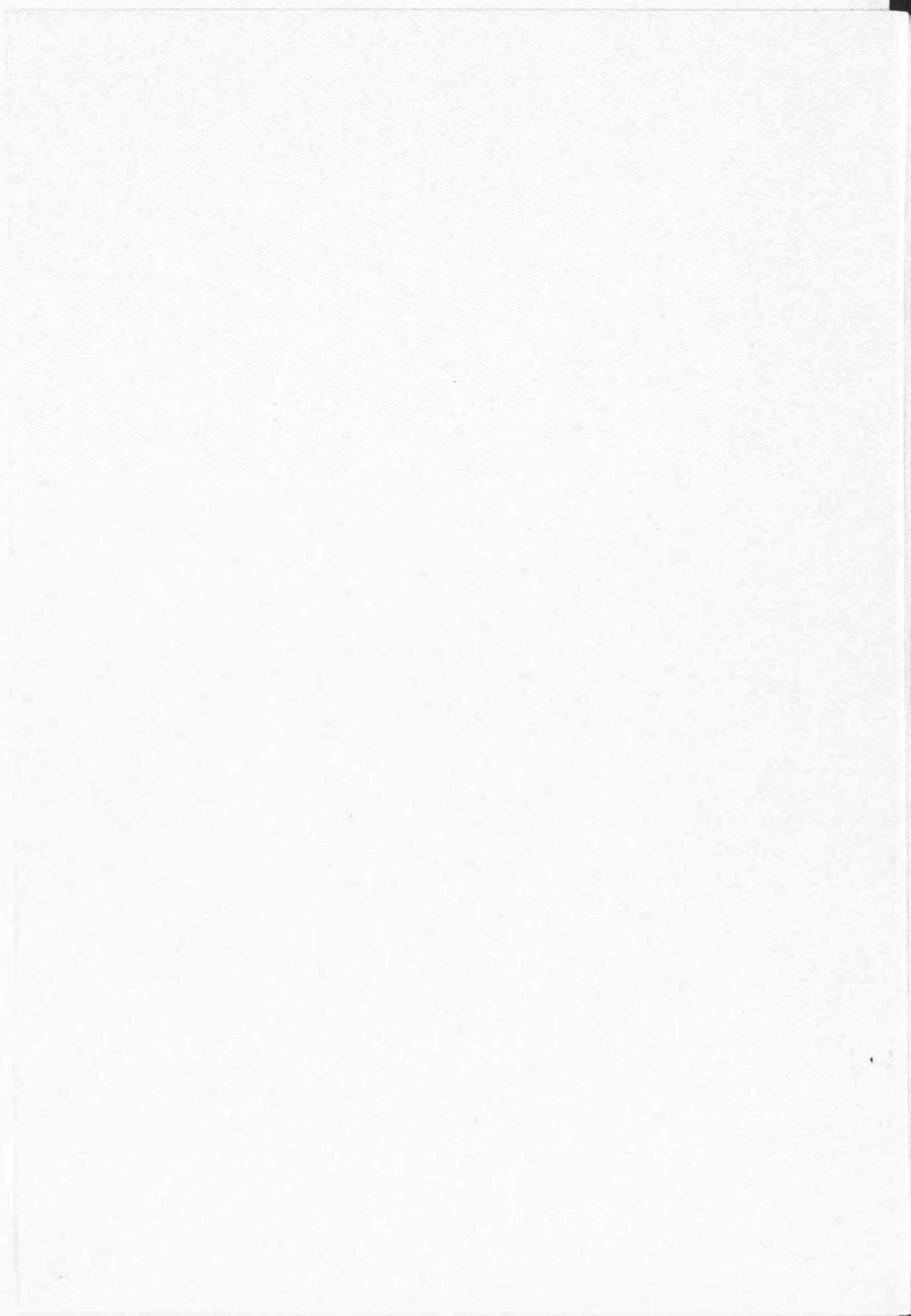
540

108



始





5F-76

文學博士 鳥居龍藏 著

先史及原史時代の上伊那

信濃教育會上伊那部會藏版

文學博士 鳥居龍藏著

先史及原史時代の上伊那



信濃教育會上伊那部會藏版

大正
15. 4. 19
内交

凡例

數年に涉つて従事して來た本郡に於ける先史原史兩時代の仕事も先づ目出度終結を告げ、茲に『先史及原史時代の上伊那』を兎に角出版することゝなつた。省みると是は長い間に涉つて出たから何だか御互に懐かしい様な氣がする。此仕事は大正九年五月に上伊那郡教育會會長原才三郎氏から同會でこれに着手して見たいとのこと、私が相談を受けた時から始まつたのであつて、この経過に就ては委員伊藤泰輔氏は昨年十一月の同總集會で左の報告をせられた。後の參考として、茲にその大意を記して置きたい。

本郡教育會が斯道の權威鳥居博士に依頼して上伊那郡の先史及び原史時代の調査に着手したのは大正八年であつた。時恰も諏訪郡の調査の爲めに御出張中の博士は本郡教育會の乞ひを容れて其の指導を承諾された。爾來教育會は諸般の準備を整へて博士の來郡を待つた。

越えて大正九年の五月博士は諏訪及び北安地方の調査を終へられて來郡されたが始めての事でもあり十分の御指導を仰ぐことを得ず、唯僅かに朝日村の遺物の一部を調査されて歸京された。

同年九月博士は更に三日間の豫定を以て第一回の實地指導の爲め來郡された。美騫・高遠・河南・赤穂・飯島・中箕輪・東箕輪・伊那富・朝日の遺跡地を概觀された。こゝに於て、本調査は其の緒に附いたのである。然るに此の調査を終へて間もなく委員中の北村氏は前年本會にて出版せる上伊那郡史編纂のため松本及び東京へ出張せられた。爲めに本調査は一大打撃を受けた。

大正十年八月、鳥居博士は徹底的に調査指導を行はれるために來郡。九日間にわたつて西春近・宮田・東春近・富縣・河南・高遠・手真・箕輪・東箕輪・朝日・小野・伊那富・中箕輪・南箕輪・伊那町・伊那村・中澤・赤穂・飯島・七久保・上片

桐・片桐の順序によつて實地踏査を行はれて、下伊那郡へ向はれた。伊那富村北大出神明神社境内の遺跡地がアイヌ式竪穴なることを発見されたのは此の時である。

第一・第二回の實地踏査によつて博士は本郡の大部分の調査を終へられた。併し入の谷地方が交通不便のために博士の御踏査を乞ふことを得なかつたのは遺憾である。博士は同地方の調査を委員に一任して歸へられた。

大正十一年を迎へて間もなく委員の橋本氏は一身上の都合により教育界を去つて東京へ出られ、小口氏は諏訪郡へ轉任せられた爲め本調査は父々一頓挫を來した。併し北村氏が上伊那郡史編纂を終へられて歸郷されたのは幸であつた。

同年七月には鳥居博士は前年調査残りの地方の調査を行はれるために三たび來郡された。而して片桐南向・河南の調査を終へられた。茲に博士の實地指導は一段落を告げられた。よつて博士に乞うて以上の調査を基として有史以前及原史時代と云ふ演題について御講演を願つた。其の後大正十三年の半頃まで約二年間は少數の委員が僅の餘暇を利用して各地へ出張調査に勉めたのみであつて事業の進行は思はしくなかつた。

然るに大正十三年の夏本會に於て本調査出版の議起り、委員は今迄て蒐集した材料の全部を携へて上京し鳥居博士の檢閲を乞ひ且つ出版についての御依頼をした。其の結果尙材料に不足があり、且つ出版するとしては尙精細なる調査を要すると云ふので委員は歸郷して其の準備を整へた。

同年十一月下旬より十二月初旬にかけて小松八幡兩氏が約十三日間にわたつて郡内各地を踏査した。此の踏査の際には富縣村貝沼宮ノ花の原史時代竪穴遺跡を發見した。

其の後は材料を整理して大正十四年六月上京して博士の御執筆を乞うた。同年七月には更に特殊遺跡の調査のため八幡氏の來郡を乞うて宮田村中越・飯島村上山・七久保村北村・美薨村芦澤・東箕輪村上ノ平・伊那富村北大出の調査を行ひ八日間を費した。尙ほ此の時には西箕輪村の調査及び唐澤貞治郎氏の所藏品の調査をも合せ行つた。次いで十月二十六・七日には小松氏の來郡を乞ひ松島王墓及び小野村の再調査を行つた。

茲に於て此の調査を終へたので之れが總括的調査を行ふために更に鳥居博士の來郡を乞ひ十一月九日松島王墓・伊那町山寺今泉の踏査及び本郡の地勢等の概観をして頂いた。

此仕事をする最初に、先づ本郡各小學校から各々これの調査係を擧げ、これ等各位の同一步調に依つて調査せんが爲めに、先づ先史・原史兩時代の考古學と、その實地に調査する方法に就て私は聊か講演をなし、終て第一回の實踐を試みるに至つたのである。此結果として始めから終までこれ等各位が同一步調で規則正しく調査事業の材料蒐集、その提供の勞を取られたのは何より喜ばしいことである。此仕事に對して、本郡の地形等は八木貞助氏の手を煩はし、私は先史・原史兩時代の調査の主となつてゐるが、先史時代のそれは八幡一郎氏、原史時代は小松眞一氏が専らこれに従事せられたのであつて、從つて本書の起稿を煩はしたことも頗る多い。尙ほ調査補助としてその委員たる會長の原才三郎氏は固より、伊藤泰輔、北村勝雄及び橋本福松、小口珍彦諸氏の補助せられたことは最も多い。藤田龍雄、大槻幹氏等はこれに助力せられ、丸山清人氏は王墓の見取圖をせられ、矢島忠三郎氏は専ら寫眞のことに従事せられた、更に神明神社、白杵神社、矢彦神社、小野神社を始め各小學校各寺院、その他各村有志家より受けた便宜と盡力とは忘れることは出来ない。殊に武井覺太郎氏は本書出版に際し多大なる經濟上の援助をせられたのは茲に明記して置きたい。以上の各位は何づれも今回の仕事の上に多大なる盡力補助をせられたのであるから、私は心からこれに向て頗る厚い感謝を表したい。今や本書の出版を見るに至つたのは全くこれ等各位の熱心なる仕事の結晶であると云はねばならぬ。

唐澤貞治郎、後藤守一、和田千吉、上田三平、榊原幸雄の諸氏は調査上の資料その他に就て、澤俊一氏

は朝鮮新羅佛の撮影をせられたことに就て、佐藤醇吉氏は圖畫のことに就て、補助せられたことは深く感謝する所である。尙ほ東京帝室博物館歴史課東京帝國大學理學部人類學教室が便宜を與へられたことに就ても茲に謝意を表する。

本書は、一地方の一小教育會の出版に屬するものであるが、這は『府史』『縣史』以上で、實に『大學紀要』『大學報告書』と匹敵すべきものである。これ等は先きの『諏訪史』と云ひ、『下伊那郡の先史及原史時代』と云ひ、共に頗る誇るべきものである。一地方の一小教育會が已に既によく斯くの如き純粹學術の地方的論文を出版せられたるは我が國の學術が今や官學たる大學の手のみならず、これが離れて民間にも移つて行く過渡期である氣がする。これが爲めに南信——本郡がこれの先驅者たるを得たるは最も御互に嬉しく感ずるのである。少なくとも本郡は此點に於て先史原史人類學、先史原史考古學等の研究上、一エポックを劃したものと謂てよからう。

更に此一小地方史、殊に頗るかたよつた地方的先史原史の兩時代が、その出版の部數二千冊以上に達したと云ふのは、また近頃の一佳話として傳ふべきものであつて、これに就て本郡の各位が此仕事に對して多大なる同情と義侠とを與へられた結果と云はねばならぬ。私は本郡の各位が共に熱心に一致し此事業を助けられたことに就て心から感謝の念を禁ずることが出來ない。

私は固より不充分、不完全なることは明かであるが、兎にも角にも、本郡の先史原史兩時代に就て小松八幡の兩氏と共に各位の補助盡力を得た本書を出版した。これに據て本郡の兩時代が何程にても知ることが出來たならば誠に幸福である。そして這は是非とも諏訪下伊那のそれと比較精讀あらんことを望む。斯くして南信の兩時代の神祕疑問は徐々として消散して行くのである。

私は茲に本書の出版に際し一言して、各位と共に相喜び、更に上伊那郡の爲めに祝福したい。

大正十五年三月三日

彌生の節句、桃の花の傍にて

鳥居龍藏

先史及原史時代の上伊那 目次

緒言

第一部 上伊那の地形と自然界

第一章 上伊那の地形

一 地形概観	九
二 伊那盆地	二
一 北部地域	三
二 中部地域	三
三 南部地域	一四
三 三峰川溪谷	一六
四 小野盆地	一七
五 川島溪谷	一八
六 木曾山塊	一九
七 大城山塊	二〇
八 赤石山塊	二〇
九 伊那山塊	二三
一〇 天龍川	二三

第二章 伊那盆地の自然界

一 森林	二五
二 動物	二六

三 泉.....二七

第三章 本地方の交通.....二九

第四章 本地方氣象の概況.....三一

一 氣温.....三一

二 平均最高氣温.....三一

三 平均最低氣温.....三一

四 最高最低氣温の平均較差.....三一

五 最高最低平均氣温.....三一

六 降水量.....三一

七 濕度.....三一

八 風.....三一

第二部 先史時代.....三五

甲 先史時代(アイヌ人).....三七

第一編 遺跡.....三七

一 遺跡の意義.....三七

二 遺跡の平面的分布.....三七

三 遺跡の垂直的分布.....三七

四 遺跡分布と現在聚落分布.....三七

五 遺跡と清水湧出地との關係.....三七

六 伊那富村北大出の竪穴跡.....三七

七 伊那町今泉附近遺跡.....四七

八 宮田村中越遺跡.....四八

九 飯島村高尾遺跡.....四八

一〇 七久保村高遠原遺跡.....四八

一一 南向村日曾利遺跡.....四八

一二 河南村金井遺跡.....四八

一三 美鷲村芦澤遺跡.....四八

一四 朝日村山ノ神遺物埋没地.....四八

第二編 遺物.....五五

第一章 緒論.....五五

第二章 各論.....五七

第一 石器.....五七

一 石鏃.....五七

二 石錐.....五七

三 石匙.....五七

四 石錘.....五七

五 凹石.....五七

六 打製石斧.....五七

七 磨製石斧.....五七

八 獨鈷石(兩頭石斧)附兩頭石鏡.....五七

九 環石.....五七

一〇	石棒	八六
一一	石劍	九四
一二	石臼	九六
一三	石皿	一〇一
一四	石鉢	一〇四
一五	石鏡	一〇九
一六	石冠	一〇三
一七	珠玉	一一一
一八	其他の石器	一一四
第二 土器		
一	形態	一一六
	口縁	一一三
	胴部	一一四
	底部	一一四
二	厚さ	一一五
三	色調(及土質)	一一六
四	紋様の研究	一一六
	紋様の研究	一一六
	紋様の野	一一六
	紋様の表現法	一一六
	紋様の成立	一一六
	紋様の素材	一一六
	紋様の様式	一一六

五	土器の進化	一〇
六	土器型の分類	一一
	第一型	一一
	第二型	一一
	第三型	一一
	第四型	一一
	第五型	一一
	第六型	一一
	第七型	一一
	第八型	一一
	第九型	一一
	第十型	一一
	第十一型	一一
	第十二型	一一
	第十三型	一一
	第十四型	一一
第三	土偶	一一
第四	其他の土製品	一一

乙 先史時代(吾人祖先の先驅者—固有日本人)……………一六一

緒言……………一六一

第一編 遺跡……………一六三

第一章 遺跡の地理的分布……………一六三

第二章 主要なる遺跡……………一六五

一 伊那町南箕輪村の遺跡群……………一六五

二 西春近村諏訪形安岡城遺跡……………一六五

三 宮田村遺跡……………一六五

四 飯島片桐兩村の遺跡……………一六五

五 伊那村東春近富縣河南四村の遺跡……………一六六

六 手真美鷲兩村の遺跡……………一六六

七 東箕輪村の遺跡……………一六六

第二編 遺物……………一六九

第一 土器……………一六九

一 器形の種類……………一六九

第一類 埴形土器……………一七〇

第二類 甕形土器……………一七一

第三類 高坏……………一七一

二 口縁部の形態と其裝飾……………一七二

三 器體の裝飾紋様……………一七三

四 土器底部及其紋様……………一七三

五 把手……………一七八

六 土器製作法……………一七八

七 其他の土製品—廢物利用土製品……………一八〇

八 摺鉢型土器……………一八二

第二 石器……………一八三

一 石斧……………一八三

二 磨製及打製石庖丁類……………一八四

磨製石庖丁……………一八四

打製及半打製石庖丁類……………一八四

三 磨製石鏃……………一八七

四 其他の石器類及裝飾品……………一八八

第三部 原史時代……………一九一

第一編 遺跡(概説)……………一九三

緒言……………一九三

第一章 遺跡の種類……………一九四

第二章 遺跡の地理的分布と其集團……………一九五

第三章 聚落遺跡と其型式……………一九七

第四章 古墳と其諸型式……………二〇〇

一 上片桐村鶴部塚屋古墳……………二〇一

二 西春近村白澤古墳……………二〇一

三 中箕輪村木ノ下古墳……………二〇一

四 東春近村田原宮ノ上古墳……………二〇一

五 東箕輪村長岡古墳……………二〇二

第二編 主要なる遺跡……………

一 中箕輪村松島の王墓古墳……………104
 墳丘の外型及び規模……………104
 王墓古墳發見埴輪祝部埴登……………104
 埴輪圓筒破片……………110
 埴輪土偶破片……………110
 埴輪靱破片……………111
 埴輪土馬破片……………111
 其他の埴輪破片……………111
 埴登祝部土器類……………111
 王墓古墳の陪塚……………111
 王墓古墳に關する文献……………111
 王墓近傍の古墳……………112
 二 伊那町の聚落遺跡……………112
 三 西春近村白澤古墳……………112
 自餘の古墳と聚落遺跡……………112
 四 赤穂村美女ヶ森と附近の遺跡……………112
 富縣村の古墳群と聚落遺跡……………110
 一 古墳群……………110
 一 如來堂古墳……………111
 二 葛蒲平古墳……………111
 三 根木屋の古墳……………111
 二 聚落遺跡……………110

六 東春近村小學校上の運動場遺跡と群集古墳……………115
 一 小學校上の運動場遺物發見遺跡……………115
 二 群集古墳……………115
 一 田原入垣外古墳……………115
 二 田原宮ノ上の古墳……………115
 七 伊那村の遺跡……………116
 八 東箕輪村の聚落遺跡と古墳……………116
 九 美薨村笠原天神山の山城堡塞遺跡と古墳……………110
 一〇 朝日村の諸古墳……………111
 一 御陵塚古墳……………111
 二 御社宮司の古墳……………111
 一一 自餘の遺跡……………111
 一 小野村の遺跡……………111
 二 伊那富村の遺跡……………111
 三 南向村の遺跡……………111
 四 河南村の遺跡……………111
 五 美和村の遺跡……………111
 六 長藤村の遺跡……………111

第三編 遺跡から發見したる遺物……………

第一章 聚落遺跡發見の遺物……………117
 第一 祝部土器(陶器)……………117

第二章 墳墓土器

- 一 埴
- 二 埴形體の細長いもの
- 三 埴
- 一 手頁村清水洞小字日向畑發見
- 二 伊那村發見
- 三 東春近村發見
- 四 赤穂村發見
- 五 伊那町東箕輪村其他發見
- 六 東箕輪村長岡新田發見
- 四 高埴

第二章 古墳發見遺物

- 一 容器類
- 一 祝部土器
- 二 埴墓土器
- 一 埴
- 二 高埴
- 三 埴
- 二 武器利器類及び其他の鐵器類
- 一 直刀、劍、小刀子
- 二 鐵
- 三 甲札板
- 四 斧、鎌

- 五 釘、鏡
- 三 馬具類
- 一 轡
- 二 雲珠
- 三 尾錠金具、鎖、座金
- 四 玉類金銀環
- 五 石製模造品
- 六 埴輪類

第三章 其他の發見遺物

- 一 子持勾玉
- 二 單獨發見玉類

結論

- 一 先史時代
- 甲 アイヌ人の先史時代
- 乙 吾人祖先の先史時代
- 二 原史時代

附錄

- 第一 西春近村下牧の經塚

第二 東箕輪村上ノ平發見金銅佛……………三六〇

第三 窖……………二六三

附言……………二六六

圖版目次

第一圖 遺跡分布略圖……………	四	第二十三圖 各種石皿……………	一〇四
第二圖 聚落分布圖……………	四	第二十四圖 石鉢……………	一〇六
第三圖 湧泉分布圖……………	四	第二十五圖 石鏡……………	一〇八
第四圖 北大山附近地形圖……………	四	第二十六圖 カリホルニヤ發見石器……………	一〇九
第五圖 北大出堅穴發掘圖……………	四	第二十七圖 石冠……………	一一〇
第六圖 伊那町今泉近傍の遺跡……………	四	第二十八圖 珠玉……………	一一一
第七圖 高尾堅穴類似遺跡……………	四	第二十九圖 各種石器類……………	一一六
第八圖 自然石を伴ふ土器……………	四	第三十圖 紋襷の素材……………	一二九
第九圖 日曾利及吉瀬附近地形圖……………	五	第三十一圖 土器進化の例……………	一三三
第十圖 金井附近地形圖……………	五	第三十二圖 第二型土器口縁推移假想圖……………	一三五
第十一圖 各種石匙……………	五	第三十三圖 第三型土器紋様拓影……………	一三九
第十二圖 南箕輪村南殿宮ノ上發見石匙……………	五	第三十四圖 穂坂村顔面取手……………	一四〇
第十三圖 磨製石斧……………	七	第三十五圖 第七型土器……………	一四一
第十四圖 磨製石斧……………	七	第三十六圖 第九型土器……………	一四三
第十五圖 磨製石斧……………	七	第三十七圖 土器拓影……………	一四四
第十六圖 環石……………	七	第三十八圖 土器鈎手……………	一四七
第十七圖 石棒の圖……………	七	第三十九圖 第十二型土器……………	一四八
第十八圖 各種石鈎……………	六	第四十圖 土器拓影……………	一四九
第十九圖 白杵神社……………	九	第四十一圖 第十三型把手……………	一五〇
第二十圖 白杵神社の石臼と石棒……………	九	第四十二圖 第十四型土器……………	一五一
第二十一圖 伊那富村石白原出土石皿……………	一〇	第四十三圖 土器紋様拓影……………	一五三
		第四十四圖 堤窪發見土偶臀部の紋様……………	一五五
		第四十五圖 南箕輪村天白發見土偶……………	一五七
		第四十六圖 土偶破片……………	一五八

第四十七圖 口縁部の諸型式を示す(其一)……………一七三

第四十八圖 口縁部の諸型式を示す(其二)……………一七三

第四十九圖 彌生式土器紋様(其一)……………一七四

第五十圖 彌生式土器紋様(其二)……………一七四

第五十一圖 彌生式土器紋様(其三)……………一七五

第五十二圖 彌生式土器紋様(其四)……………一七五

第五十三圖 富縣村貝沼、原發見彌生式土器……………一七六

第五十四圖 近畿地方の彌生式土器紋様……………一七六

第五十五圖 彌生式土器底部紋様……………一七七

第五十六圖 把手の各種型式……………一七八

第五十七圖 繼目の離れた埴……………一七八

第五十八圖 土器の製作法を示す實例……………一七九

第五十九圖 廢物利用土製品……………一八〇

第六十圖 土製鉢……………一八〇

第六十一圖 川島村門前發見摺鉢型土器……………一八一

第六十二圖 磨製石斧……………一八二

第六十三圖 打製石庖丁類……………一八五

第六十四圖 磨製石鏃……………一八七

第六十五圖 手冓村發見銛型石製品……………一八八

第六十六圖 陸前宮戸島發見骨鏃……………一八九

第六十七圖 西春近村白澤古墳(東塚)實測圖……………一九〇

第六十八圖 中箕輪村木下古墳……………一九〇

第六十九圖 西春近村白澤古墳(西塚)實測圖……………一九三

第七十圖 東春近村宮ノ上古墳……………一九四

第七十一圖 中箕輪村松島王墓の位置……………一九四

第七十二圖 王墓古墳前方部後圓部各縦斷面圖……………一九〇

第七十三圖 王墓古墳實測圖……………一九〇

第七十四圖 王墓見取圖……………一九〇

第七十五圖 王墓發見埴輪土偶破片……………一九一

第七十六圖 美豆良を示した土偶……………一九一

第七十七圖 王墓發見祝部土器……………一九二

第七十八圖 伊那町發見祝部破片……………一九二

第七十九圖 伊那町發見埴……………一九三

第八十圖 白澤古墳發見遺物……………一九三

第八十一圖 白澤古墳發見玉類……………一九三

第八十二圖 赤穂村小鍛冶上の古墳群……………一九四

第八十三圖 テマテの古墳……………一九四

第八十四圖 東春近村古墳分布を示す……………一九五

第八十五圖 南小河内外記屋敷及長岡新田發見遺物……………一九六

第八十六圖 天神山蓋古墳發見遺物……………一九六

第八十七圖 御陵塚實測圖……………一九七

第八十八圖 南向村發見祝部……………一九七

第八十九圖 長藤、河南、美和各村發見祝部……………一九八

第九十圖 西箕輪村上戸溝發見祝部破片……………一九八

第九十一圖 南向村大草及手冓村發見祝部坏……………一九九

第九十二圖 直刀・劍身・小刀子聚成圖……………一九九

第九十三圖 富縣村發見鐵鏃(如來堂古墳)……………二〇〇

第九十四圖 七久保村發見石製模造品……………二〇九

第九十五圖 東箕輪村上ノ平發見金銅佛實測圖……………二〇九

第九十六圖 遠江國發見金銅製誕生佛……………二〇九

第九十七圖 西箕輪村中條の窖……………二一〇

第九十八圖 東春近村田原の窖……………二一〇

第九十九圖 美郷村笠原の窖……………二一〇

第一百圖 東春近村の窖から發見の土器片……………二一〇

第一百一圖 東春近村發見の陶器……………二一〇

第一百二圖 尾張國正眼寺所藏金銅佛……………二一〇

別圖版目次

- 圖版第一 (上)川島村門前遺跡地
(下)天龍川筋より川島溪谷同上遺跡地への入口
- 圖版第二 (上)伊那町御園宮ノ前遺跡地より天龍川を隔て、對岸の遺跡地を望む
(下右)伊那富村北大出堅穴
(下左)伊那町御園宮ノ前遺跡地
- 圖版第三 (右)朝日村山ノ神の埋没遺物露出地
(左)伊那富村北大出堅穴の發掘狀況
- 圖版第四 (上)伊那町山寺今泉遺跡地
(下)西春近村小出遺跡地
- 圖版第五 (上)宮田村中越遺跡地
(下)飯島村本郷堤ヶ窪遺跡地
- 圖版第六 (上)南向日遺跡地遠望(對岸より)
(下)伊那村上ノ原遺跡地遠望(伊那村小學校より)
- 圖版第七 (上)河南・美郷兩村地方遺跡地遠望(高遠より)
(下)東箕輪村上ノ平遺跡地
- 圖版第八 (上)伊那里村中尾遺跡地(本郡最高遺跡地)
(下)長藤村板山附近遺跡地
- 圖版第九 (上)河南村金井及下山田發見石鏃類
(下)河南村下山田竹垣外發見石鏃、石鏃、石匙類
- 圖版第十 (右)郡内諸地方發見石匙類
(左)郡内諸地方發見石匙、石鏃、石鏃類

- 圖版第十一 (上)富縣、手良、西春近、美郷諸村發見打製石斧、石匙類
(下)赤穂村内各所發見打製石斧
- 圖版第十二 (上)七久保村内各所發見打製石斧
(下右)飯島村内各所發見磨製石斧、打製石斧
(下左)宮田村駒ヶ原發見石斧
(下左)東箕輪村長岡發見磨製石斧
- 圖版第十三 美郷、南箕輪、東箕輪諸村發見磨製石斧
- 圖版第十四 (上)伊那富、片桐、朝日諸村發見石器
(下)東箕輪村發見三頭石斧
- 圖版第十五 (上)河南、宮田、手良諸村發見環石
(中右)宮田村發見石器
(中左)富縣村發見石鏃
(下右)郡内各地發見四石
(下左)西春近村發見石鏃ノ巢石
- 圖版第十六 (上)上片桐村發見石鏃、石鏃、石匙
(中、下)南向日遺跡地發見石鏃
- 圖版第十七 郡内各地發見石棒、石劍類
- 圖版第十八 (上)片桐、小野、河南、伊那富諸村發見石劍
(下)中箕輪村白杵神社の石白
- 圖版第十九 藤澤、伊那村、東春近、富縣、伊那町各町村發見各種石皿
- 圖版第二十 (上)東春近、西春近兩村發見石鏃
(下右)發見地不詳石鏃
(下左)宮田村發見敲石
- 圖版第二十一 (上)箕輪、手良、伊那、中箕輪、東春近、富縣各町村發

見砂玉

- (中)手良、美郷、富縣諸村發見石器
- (下)河南、手良、富縣、伊那各町村發見石器
- 圖版第二十二 河南、手良、富縣、伊那各町村發見石器
- 圖版第二十三 富縣、伊那富、南箕輪、西箕輪、伊那各町村發見石器
- 圖版第二十四 川島、東春近、伊那富、河南各村發見石器及石皿
- 圖版第二十五 片桐、富縣、伊那富、宮田各村發見石器
- 圖版第二十六 西箕輪、伊那町、河南、西春近各町村發見石器
- 圖版第二十七 伊那町、飯島、手良、東箕輪、富縣各町村發見石器土製品
- 圖版第二十八 宮田村發見顔面把手附著土器
- 圖版第二十九 片桐、中箕輪、富縣各村發見顔面把手
- 圖版第三十 (上)飯島村發見顔面把手
(中下)河南、中箕輪、西春近、南箕輪、宮田各村發見各種把手類
- 圖版第三十一 手良、南箕輪、中箕輪、片桐各村發見土偶
- 圖版第三十二 東箕輪、飯島兩村發見土偶
- 圖版第三十三 (上)中箕輪村發見土偶
(中右)朝日村發見石器
(中左)伊那富村堅穴發見石器
(下)中箕輪村發見把手
- 圖版第三十四 (上)西春近村諏訪形安岡城遺跡地全景
(下)河南村金井原遺跡地
- 圖版第三十五 各地發見彌生式土器一固有日本人遺物(其一)
- 圖版第三十六 各地發見彌生式土器(其二)

- 圖版第三十七 各地發見彌生式土器(其三)
- 圖版第三十八 各地發見彌生式土器(其四・日緣部)
- 圖版第三十九 各地發見彌生式土器(其五)(底部・把手・高坏脚)
- 圖版第四十 磨製石庖丁一固有日本人遺物
- 圖版第四十一 磨製石鏃・石製品・玉類一固有日本人遺物
- 圖版第四十二 中箕輪村松島王墓遠望
- 圖版第四十三 (上)王墓發見埴輪破片
(中)上野國發見埴輪
- 圖版第四十四 中箕輪村松島王墓發見埴輪圓筒・土偶・土馬破片
(下)王墓發見埴輪土器
- 圖版第四十五 (上)西春近村小出字白澤鎮護塚遠望
(中)東塚全景
(下)西塚全景
- 圖版第四十六 (上)西春近村白澤鎮護塚(東塚)石室
(下)同上(西塚)石室
- 圖版第四十七 (上)上片桐村龜部塚屋古墳石室入口
(中)同古墳全景
(下)片桐村田島六萬部古墳
- 圖版第四十八 (上)赤穂村赤須美女ヶ森遺跡地全景
(中)大田切川原
(下)宮田村三ツ塚
- 圖版第四十九 (上)伊那村發見埴輪土器
(中)富縣・中箕輪兩村發見祝部土器
(下)富縣村櫻井大塚古墳

圖版第五十 (上)富縣村南福地及北福地古墳群

(中下)富縣村南福地如來堂古墳發見遺物

圖版第五十一 (上)富縣村北福地三津木發見祝部及埴登土器

(中)北福地根木屋古墳及北福地荒井の田發見遺物

(下)南福地葛蒲平古墳遺物

圖版第五十二 富縣村貝沼宮ノ花の聚落遺跡

圖版第五十三 (上)美鷲村笠原天神山築築と麓下の古墳

(中右)手良村發見石製模造小刀子

(中左)手良村發見原始型勾玉

(下右)手良村發見手持勾玉

(下左)手良村清水洞發見埴登土器

圖版第五十四 (上)東春近村小學校上の運動場遺跡

(中上)同遺跡發見埴登土器破片

(中下)東春近村田原宮ノ上古墳附近發見埴登破片

(下)同村田原御塚附近發見埴登破片

圖版第五十五 (上)東春近村田原宮ノ上古墳石室

(中)同上古墳發見埴登土器

(下)同村田原入垣外發見埴登埴と高坏

圖版第五十六 (上)東箕輪村長岡角道の古墳露出石室

(下)東箕輪・南箕輪兩村聚落遺跡發見埴登土器

圖版第五十七 (上)朝日村古墳群全景

(下)同村御陵塚

圖版第五十八 (上)朝日村御社宮司古墳發掘址

(下)同古墳發見遺物

圖版第五十九 西春近村下牧經塚發見遺物

圖版第六十 (上)東箕輪村南小河内上ノ平發見小佛像

(中下)朝鮮新羅誕生佛

圖版第六十一 上伊那郡先史時代アイヌ派遺跡分布圖

圖版第六十二 上伊那郡先史時代固有日本人遺跡分布圖

圖版第六十三 上伊那郡原史時代遺跡分布圖

緒言

人類學及び考古學の上から觀察して、最も面白く感ずるのは山國たる信州である。抑も信州の位置たる海岸線や低地を遠く離れてゐて、これ等の地方と比較して最も高い山上に存在する。これが爲めに信州は自然や人事に於て他と大に相違する所がある。此結果として避遠極地の位置にある信州の文化は低地日本のそれと對照して最も後れ、否なこれに觸れること最も少なく、爲めに遺跡遺物の如きも存在するもの極めて稀れてあらうとは、これまで一般學者の云へる所であつた。

然るに這は斯學研究の結果に據て見事に裏切られ、從來の假定學說と反對なる事實を見るに至つたのである。そは先史時代原史時代に於て殊に最もその事實を認めらるゝ所である。これ等は今日信州各郡に於けるその遺跡遺物の豊富なるを以て推知することが出来るであらう。此事に就ては編者は既にこれを種々のものに於て發表した所であるけれども、更に茲にそれに就て聊か記して見よう。

最新の歴史時代の立場から觀察すると、信州の位置が極遠にあつて、交通不便な山地にあるが故に、自然に更に古い太古に溯つて見れば、一層極遠不便の感をひき起すは誠に無理ならぬことである。けれども這は實際の状態に疎き學者の觀察であつて、これを深くたち入つて研究して見ると、その當時の事情は大いにこれと相違して居るのである。先づ茲に先史時代の當時に溯つて述べ

て見たい。同時代の民衆の生活やその生活する舞臺は山國信州は最もそれに適應してゐたのであつて、これに就て何等の不足はなかつたのである。即ち彼等がその時代に於て生きんが爲めに要求する野獸や鳥類はこれに満足するだけに存在し、草根・果實はまたその需用を補充することが出来る。美しい森があり、清い水があり、土地は廣く點々移住するにも何の不足もない。山國とて平地もあり住地としては適當な所は此處彼處にある。當時の生活様式の物件はすべて具備して居る。これ等の要求にはいづれも都合のよい所で、よい物は無盡藏に存在する。殊に彼等の必要物品たる石器の原料の如きはまた此地方に豊富である。これ等は彼等民衆を驅つて此處に移住なし來らしめ、さては永遠に信州各地に住居せしむるに至つたのである。

信州は實に先史時代に於ける生活地としては最も適當な位置にあるのである。這はその當時の遺跡・遺物の事實がよくこれの暗示を與へてゐるのである。即ちその遺跡の夥多しいことや、その遺物又豊富で、石器は多く存在し、次に土器の如きもその形狀は頗る巨大で、意匠・裝飾に最も發達し、彼等生活のいかに全盛で餘裕綽々であるかを知ることが出来る。これ等の事實はこれを平地日本のそれと比較して決して劣るものにあらずして、寧ろこれよりも大いに發達してゐたことを推知せらるゝのである。

信州でも、就中、天龍川上流地帯の先史時代の如きは、他の信州各郡と比較して、當時に於て頗る極盛をしてゐたのである。このことに就ては編者はすでにこれを『諏訪郡史』『下伊那郡史』の中に於て説明した所である。今此事實を等しき天龍川の下流及び河口地方の低地・遠州のものと比較すると、遠州の遺跡・遺物は實に少量・極小のものであつて、到底上流地方のものと同じに論ずるこ

とは出来ない。これ等は即ち當時にあつてその下流地方よりも、今日避遠にして交通不便であることと云ふ上流地方——山國が最も先史時代の文化の高かつたことを示すものではないか。這は當時に於ける生活様式とその地方の富源とが共に相待つてゐたからである。

編者は今や上伊那郡のそれを記述することとなつた。本書は即ちそれであつて、當時の彼等の活動・静止の状態は此内に記述してあるのである。本郡は實に先史時代の遺跡・遺物に富める地方であつて、蓋し恐らくは先史時代の極盛な信州、否な天龍川上流地帯としても、その第一位にゐるのである。這は本書の各章を通過して讀まれば知る事が出来る。

原史時代に這入つては如何と云ふに、這は固より先史時代と比較すべきほどのものではないが、それにしても王墓の如き立派なる前方後圓の古墳や、埴輪などがあつて大いに研究すべきものである。尙、同時代の小古墳や聚落の跡等もあつて、これに諸種の遺物を存在し、これに據て當時の文化・生活の様式を優に暗示するものである。これ等はその上の諏訪郡下の下伊那郡のそれ等と比較對照研究すべきものであつて、その総合したる結論は這は原史時代に於ける天龍川流域の僞はらざる史實・文化生活である。

殊に伊那谷の中心たる上伊那郡は Terrace 式文化を形成するものであつて、實に一種の特色ある地方である。これ等は先史時代とともに最も注意するに價するのである。これをその時代の民衆の生活と比較するならば極めて興味あるものである。

伊那谷は當時の關西關東の公式の通路たる下伊那と美濃とに跨れる神の御坂峠があつて、原史

時代に於ては盛んに此處を往來したものである。此往來通路として伊那谷がある。斯くの如き意味から見れば本郡は山國であるとは云へ、立派なるその時代の天下の公道である。編者はその立場より本郡の原史時代の遺跡・遺物を觀察してゐるのである。そして原史時代の事實は又以て日本の他の同時代の事實と對照し參考となるべきものである。彼の同時代の古墳の多き上つ毛野^{かみの}上野^{かみの}下つ毛野^{かみの}下野^{かみの}等の文化はいづれも關西より伊那谷を通過して行つたものが頗る多いのであるから此點に於ても大いに注意せねばならぬ。

六

編者は上伊那教育會の依頼を受け、本郡の先史時代・原史時代の研究調査をすること茲に數年、その間、數度本郡を實地に調査したのである。本書はその結果であつて、編を設け、章を別ちこれ等を以下記述することとする。

第一部 上伊那の地形と自然界

第一章 上伊那の地形

一 地形概観

日本の脊梁を以て目されて居る我信濃國は其南西の半面に於ては殊に高峻雄大な山嶺の列峙するを見るのであるが、此等の山嶺は何れも西南日本の地帯に屬するので内外の兩帶に區分されて居る。即ち信飛越の國境に聳えて居る南北廿餘里に亘つた槍穂高白馬等幾多の山嶺は之を總括して信飛山塊と云ふ。之に稍々平行し南に偏つて國の中央から美濃の國境に蜿蜒と連亘して居る駒南駒惠那山等を木曾山塊と呼び、更に之に對して甲駿遠諸國との境界をなす所の東駒仙丈荒川赤石等の連嶺を赤石山塊と云つて居る。信飛木曾の兩山塊は南日本内帯に屬し、赤石山塊は其外帯をなして居るのである。此等の山嶺は何れも三千米内外の高距を有し幾萬星霜風雨氷雪の削剝の結果、今將に起伏の最も大きい滿壯年の彫刻を受けて其頂には特色ある高山地貌をも現出して居る。近時登山氣風の作興と共に此等の山塊は「日本アルプス」の名によつて其偉觀が世に喧傳されて、登山の士が帽影參差として四時鐘を接して來集するの狀景を現出するに至つた。實に此木曾赤石兩山塊の中間に展開して居る天龍川沿岸の平地は古來伊那谷と呼ばれた處であつて、現在行政上の區劃として上下伊那の兩郡に分轄されて居るが、地形上では全く同一單元と見るべきものである。

次に上伊那郡の位置を表記すれば

伊那町

〔東經一三七、五七
北緯三五、五〇〕

郡の極所	東端 東駒ヶ岳	東經一三八、一四
	四端 南駒ヶ岳	同 一三七、四八
	南端 木谷山	北緯 三五、三二
	北端 霧訪山	同 三六、〇四

海拔標高	伊那町	六五〇米
	伊那里村	八七〇米
	上片桐村	五六四米
	小野村	八〇〇米

從來本郡の廣袤は東西九里、南北十四里に及び其面積は八十八方里餘と記されて居るが、今回陸地測量部五萬分の一地形圖を用ひ求積器によつて計算した處では八十八方里五七に達して居る。此内で専ら人類の生活した平坦地(洪積層及沖積層)は約二十方里であつて全面積の約四分の一強に當り、他の四分の三弱は山岳地に屬して居る。本郡の山岳盆地、河川等の配列竝に其垂直的肢節や侵蝕の程度等に就て之を觀察すれば、大小幾つかの地塊(Blocks)から成立つて居つて其或ものは隆起し又或ものは陥没して、恰も一個の寄木細工を造つて居ることを知るであらう。此地塊運動を起した地裂線には南北性のものと東西性のものとあるが、南北性のものが優勢で幾つか相平行して居るが、東西性のものは一般に前者よりは劣勢で後期のもので端から端まで貫通して居るものは少ない。従つて地塊の多くは略南北に伸びた短冊形をなして居る。而して其各地塊中にも更に又縦横の小地裂線があつて、幾つかの塊片に分れて居る。

之を要するに本地方の山塊の位置、盆地の配列及格子狀をなして居る水系の分布、交通網或は聚落の發達、人類文化の交渉等に就て考究すれば、愈此特色ある地塊構造の顯著な事を知るであらう。依つて本郡は地形上更に次の七つの地形區に分つて記述するを便利とする。然し人類の生活に縁遠い山地の記載や、地質學上の議論などは、本編には必要でないから可成これを省略して置く。

- 一、伊那盆地
- 二、三峯川溪谷
- 三、小野盆地
- 四、川島溪谷
- 五、木曾山塊
- 六、大城山塊
- 七、赤石山塊
- 八、伊那山塊
- 九、天龍川

二 伊那盆地

此盆地は本郡辰野から下伊那郡飯田の南方下條村に至る間に擴がつた山間盆地 (Inter-mountain Land)で、長さ十八里幅は一里内外から廣い所では三里餘に達し、北々東から南々西に向つた短冊形の地域であつて、一般に伊那谷と稱し、本郡に屬する部分は南北約十一里に達して居る。此盆地は地質學上第四紀の始めに於て地溝 (Graben) 狀の陥没によつて作られた凹窪地に周圍の高所から急斜面を奔下する河流の運搬した砂礫粘土と、當時他地方から火山活動によつて間歇的に噴出した多量の火山灰、輕石とが風に吹送られて交互に堆積して埋立てたので、其厚さは盆地底から二、三百米の厚さに達したであらう。處が其後天龍川及其支流の回春に伴つて侵蝕が行はれて現地形を

招來したのである。即ち茲に最も地形上特色とする幾級かの段丘(Terrace)と扇狀地(Alluvial fan)の解析とが行はれて「田切」を作るに至つた。實に此地方の段丘に比すべきものは本邦にも極めて稀であつて越後國中魚沼郡十日町附近の信濃川の段丘が稍々之に比較すべきであるが其規模が大きくて井然として居ることに於ても又駒ヶ岳や仙丈岳の様な高峻雄大な背景を有する點に於ても到底此比儔てはないのである。伊那谷の文化は實に此段丘的文化とも云へよう。そこで伊那盆地の本郡に於ける部分は又之を北中南の三部に區分けして考察するを便宜と信ずる。

一、北部地域 辰野から伊那町に至る地域を云ふので東西北の三方は山地で限られ南部は三峯川・小黒川によつて中部地域に接して居る南北四里東西最大三里に達する略二等邊三角形の盆地で天龍川は其中軸より著しく東に偏倚して流れて居るが、西側の支流の壓迫によつて斯様になつたのであらう、西方に聳ゆる經ヶ岳(二二九六米)山塊の東邊は斷層崖(Fault scarp)で、其山麓線は西南から東北に向つて頗る單調に明瞭な境をなして居る。又東方には小式部山(一一二〇米)不動峯(一二〇〇米)等があつて其西側も斷層による急斜面を以て本盆地に臨んで居る。小式部山の西側には數個の三角崖(Terrace Facet)此地方ではかかる地形の處を三角林と云ふ(が見事に列んで居る。朝日村の荒神山は天龍川畔に起伏して其平調を破つて居るが、こは東方の第三紀層に續いて居る地體から盆地の陥没に際して沈み残された一つの附屬地塊(Subsidiary block)である。本地域は天龍川の若返り(Rejuvenation)によつて凡二級小なるものを加へれば三四級となる處もある)の段丘を作つて居る。地質學上段丘下の天龍川沿岸の平地を沖積層(Alluvium)と稱し、段丘上の高地を洪積層(Diluvium)と稱するが、以下も之に同じい。一般に伊那盆地の段丘の表面を被ふものは大體厚く「ロ」

ム層即ち赤土で、火山灰の風化したもので所々に所謂味噌土なる輕石層を夾有して居る。此味噌土は酸性土で植物の根の發育に障害を及ぼして居るので一般に土地は餘り肥沃とは云へぬ、殊に水利の便も宜しくないが天龍川の河床附近の沖積層は砂礫泥等の堆積で水利の便も宜しく土質は極めて肥えて居る。即ち郡内では辰野朝日宮木附近・澤松島及び木の下驛附近・三日町伊那町附近及三峯川縁の美篔殿島天龍川沿岸の澤渡附近・宮田の大久保赤穂の下平片桐村田島等の部落は此沖積層に屬して居つて比較的開闢の町村が多い。北部天龍川の右岸段丘上の高原は標高七〇〇乃至九〇〇米で、凡東南に向つて平均二十五乃至三十分の一の傾斜を示して居る。三本木原中の原・大芝原等の平坦地もあつて、大部分は近來の植林にかゝる赤松林で、他は桑畑が多く水田は極めて少ない。目今其一部は西天龍組合の耕地整理事業によつて水田が開發されやうとして居る。左岸には六道原の平坦地があつて平均傾斜は六十分の一に及んで居り、其東端には天神山の火山圓頂丘(Tholoid)があつて此地方に火山活動の標本を示して居る。右岸の臺地は北から横河川・神澤・北澤・桑澤川・深澤川・帶無川・大泉川・小澤川・小黒川などの連合扇狀地(Compound fan)であつて、今日此等の河流は幼年のに此臺地を切開して居るが、帶無川や大泉川などは山地を出てからは其河水の大部分は扇狀地に浸透してしまつて、地表を流れるものは極めて少ない。又東部段丘は澤底川・田無川及野底川等の連合扇狀地であつて、東方の山が低くて深くないだけに其貨物も亦少ない、此地域の一部には嘗て洪水したことがあるので、之は箕輪村南部及六道原の地中から水蘚や水草等から出來た泥炭を産出することによつて證明されて居る。

二、中部地域 中部地域は所謂春富地方を指すので、西は權現(一七四九米)山塊と東は高鳥谷(一三

三一米山塊とに夾まれて、南は大田切川で南部地域に接して居る。西側の臺地は標高は六〇〇乃至七〇〇米で、小戸澤・犬田切川・藤澤川・大田切川等の連合堆積物で段丘は下島澤渡附近は一段であるが南部では二段に分れて居る。表面は東に向つて十八分の一と云ふ比較的急な傾斜を示して居る。現在、幼年谷に切開されて地表は幾つかの小さい耕地に分断されて居る。宮田の小田切川は嘗つては大田切川の流路であつたことがあるらしい。宮田村北の城では基底の片麻岩が天龍川に侵蝕されて小天龍峽を作つて居る。東春近村の側に於ては三峯川及天龍川の營力による二乃至三段の段丘が存在するが北面三峯川に向つては四十米内外の斷崖を作つて居る。其段丘の表面は三峯川の灌漑によつて比較的水田が多く開發され又山林よりは桑畑の方が多し。

三、南部地域 大田切川以南郡境までを總稱して南部地域と名づける。此地域では彼の壯麗な駒ヶ岳の連峯が三三〇〇米の直上に聳えて威壓するが如き威を與へて居る。天龍川西側の臺地は南北四里以上巾一里半内外の長方形のもので、大田切中田切・與田切・前澤・小松川等の連合扇狀地であつて、標高六〇〇乃至八〇〇米を保ち東々南に平均二十六分の一位の傾斜を示して居る。東側は新宮川に沿へる中澤・小澁川に沿へる南向の臺地が楔狀に深く山體に切込で山麓線の單調を破つて居り、西側の赤穂・飯島・片桐・七久保・上片桐等の村落は前記の諸川によつて基盤狀に區劃された臺地上に置かれて居る。此等の支流は山麓の扇狀地を落下するに當つて屢々其河道を換へたことは大田切に於ける小田切中田切に於ける辻澤及田切川・與田切の本郷臺地に於ける舊河道を殘して居るによつても知られる。又此等の河流の間にはより小さい原傾河(Consequent river)があつて地表を彫刻して居るから北部地域の様に單調ではない。此地域に於ける天龍川段丘發達の狀

を見るに左右兩岸のものが著しく非對稱なるが注目を牽くのであつて、其級數が河岸の彎入せる個所に於て少く、突出せる個所に多く彼の片桐村では最大のもの一級で小さいもの二三級を有するに過ぎないが、對岸南向村では雛段の様なものに七級の多きに及んで居る。勿論之には小澁川との交渉も加はつて居るが此地方で最も著しい段丘群である。尙此地域では大田切中田切・與田切川などが嘗て自己の作つた扇狀地を更に解析して深く廣い田切即ち喇叭狀の洞を作り、三州街道附近では幅が五六百米にも達し、山の入口でも二三百米の峽谷を作つて、兩岸は四五十米の斷崖をなし、大きな白色の花崗岩の圓礫を含んだ様は行人の注意を牽くことが著しい。大田切川は天龍川に會する地點下平の北部に於ては河原の中に更に再設扇狀地(Reconstructed fan)を建設して居る。地形が斯の如くであるから三州街道でも伊那電車の線路でも、此等の諸流に會する毎に先づ何れも峻坂を下つて河床に出で、川を渡つてから再び坂を登つて臺地上に出なければならぬ。即ち道路はU字或はS字狀に屈曲して居り電車の如きも急斜と屈曲とに惱まされることが多い。斯様に田切は交通上には不便を與へて居るが他面には河流が田切に局限されて居るから、扇狀地上を自由に亂流する荒川に比して極めて安全である。即ち扇狀地上の耕地等は水害を蒙る憂ひがないことは、大正十二年片桐の水害によつても知られる。これ古來此地方の住民の高臺地を選んで居を定めた所以の一つであらう。然して此臺地面を灌漑する爲めに導水路の開鑿等は比較的よく行はれて居る。前澤川・小松川等も田切をなして居るが、兩岸が餘り高くないから、交通上の障害は割合に少ない。下伊那に入れば扇狀地の傾斜に沿つて生じた川流の解析が著しく進んで、更に無數の支小谷をも生じて扇狀地面の地貌を一層複雑ならしめて居る。要するに此等は侵蝕

の行程が南部から始つて北部に漸進するのを物語つて居る。續いて其内部構造を見るに北部中部などでは段丘中の礫は秩父古生層の砂岩粘板岩などの碎片であつて、多少の角稜を有して比較的に小さいが砂礫粘土層・ローム層等が割合によく成層して居り、段丘の断面には規則正しく泉の湧出するのを見るが、南部では礫は殆ど圓い花崗岩の大塊で、極めて不規則に堆積して居るから、成層状態も亦不完全で従つて泉の湧出の如きも極めて不規則である。これ南部では西方駒ヶ岳の連嶺から二〇〇〇米内外の急斜面を一氣に落下して來つて、急速に大量の堆積作用を行つたもので、爲に此附近で一時天龍川の堰塞を行ひ、以て北部地域の一部に湛水を見たのではなからうか。又之を今日人文上から見ると北中部地域は松本地方殊に諏訪の影響を受ける事が多いが、南部地方では下伊那即ち飯田方面の支配を受ける事が著しく、其兩勢力の接觸點は赤穂附近であらうか。

三 三峯川溪谷

上伊那郡の東部山中を縦断して居る直線狀の谷の延長は、伊那山塊の鹿鹽片麻岩と赤石山塊の結晶片岩とを境するもので、更に大きく云へば南日本の内外兩帶の境をなして居る處の地質構造線であつて、夙に學者が論議を重ね赤石構造線(Akashi-tectonic line)と呼んで居るのである。此構造線は北は杖突峠に始まり、藤澤川三峯川粟澤川を経て分杭峠を越え下伊那に入り、北入川小澁川青木川など後次河(Subsequent river)の谷列をなし、更に地藏峠の南では上村川遠山川となり、青崩峠から遠三州を経て四國九州にまで延長して居る。此地動は伊那山塊の地體が赤石山塊に向つて衝上斷層を行つたので、谷列はその結果比較的薄弱な斷層面に沿つて發達した所の斷層線谷(Faultline valley)である。此谷の地形上の特色は西方即ち伊那山塊の山側は急傾斜であるが、東方赤石山塊の側は比較的緩斜面をなして居る。三峯川谷の南部即ち本流に沿つた美和三義伊那里等を古來「入の谷郷」と稱し、北方藤澤川に沿つた藤澤・長藤洞と區別して居る。入の谷では二級の段丘を見るが第一級のもものは現河床から一〇〇米位高く中尾和泉原の部落があり、高遠城址の堆積層にも連絡し、第二級のは同じく四〇乃至五〇米の處にあつて溝口・非持等の部落から高遠市街河南の平地に連絡して居る。高遠市街は三峯川の兩岸に水の營力で削り取られた岩段丘(Felstrata)上に展開されたのであつて、該地盤の黒雲母片麻岩や花崗岩上には薄い砂礫等の堆積物があるが、崖に近い處では直接岩盤上に家屋が建てられて居るのを見る。随つて古來地震を感じることも非常に微弱であることは土地の人々も自覺して居る。山室川・藤澤川は諏訪盆地の陥没の影響を受けた明瞭な截頭谷(Behaded valley)であつて、後者では殊に現在の河流の營力で説明し兼ねる様に堆積物があつて、谷幅も廣く耕地も多く、比較的不規則な一級の段丘もあつて、杖突峠に近づいても尙平坦地を見る程で、此谷が古來上伊那と諏訪方面とを結ぶ重要な交通路であつた理由も亦首肯されやう。

四 小野盆地

中央線小野驛附近の三角形の斷層角窪地(Fault angle Basin)標高八〇〇米乃至八八〇米に達する。盆地は横河川の支流で南北に流れて居る小野川線を東邊として長さ約一里に達し、西北は霧訪山の山裾を南西牛頸峠から東北善知鳥峠に向つた斷層線により、南は飯沼川線によつて斷れた不平等邊三角形の陥没地域であつて、中には飯沼川と駒澤川とに挟まれ東西に伸びた小地壘を埋殘して

居る。盆地の東方勝^{かつ}弦^{せん}峠から鹽尻峠に續いた山地は火山岩層で被はれて居るが^七楡澤^{やなぎさわ}相吉澤入田川は何れも諏訪盆地陥没の爲又小野川は善知鳥峠で松本盆地の陥没の爲に截頭谷となつて居る。鐵道線路の兩側には一級宛の段丘を残して居るが地形輪廻 (Topographical cycle) が伊那盆地程には進んで居らぬ。停車場附近の地層中から泥炭を出すを以て見ると、或時代には此盆地に湛水したことが慥かである。飯沼川は牛頭峠では谷分水によりて奈良井川の谷に臨んで居る。小野の南方小野川の左岸雨澤附近には高さ四五間宛の二級の段丘を見る。要するに小野盆地は地形上恰も海中に於ける島の如くに四圍の地域と隔離されて居るから、古來自然及人文上の遺跡習慣等もよく保存されて居て他の地域に比して一層古典的の感を起さしめるものがある。

五 川島溪谷

經ヶ岳山塊の東北部は掌から分れた指の様に三個の山塊が竝行的に東北に走つて居る。これは小横川と横河川と飯沼川との三地裂線によつて山體が切斷されて桑澤山(一五三六米)長畑山(一六四一米)坊主山(一九六〇米)等の尾根に分れて居るので各々谷は小横川と川島の部落とを抱いて居るが、兩谷とも弓狀に彎曲して居るのを特徴とする。川島の谷は谷幅は三四町に達して比較的廣く上下二段の段丘を有して居る。谷の奥部は鬱蒼たる針葉樹の御料林に被はれ、溪谷は僅かに東方に出入口を有するのみで、全く袋狀をなして居り他との交通も少なく恰も武陵桃源の趣がある。

六 木曾山塊

大きな輪廓を云へば天龍川と木曾川との間に聳立した山地を總稱して木曾山塊と名づける。木曾山塊の東西兩面は幾つかの階段斷層 (Step fault) によつて打切られて居るから頂上に登るには急峻な斜面を登つては平坦な處に出ることを再三繰返さねばならぬ。従て瀑布も各所に懸かり明かな地壘 (Hors) 構造をなして居るので赤石山塊に竝行した縦地壘である。南は惠那山(二九五六米)附近から幅四里内外長さ十五里の擴がりを以て北々東に走つて居り、南駒ヶ岳駒ヶ岳などは三〇〇〇米に垂んとし、北方の經ヶ岳に連亘して居て日本で最大な地壘であると云はれて居る。此山塊を構成して居る岩石は大部分花崗岩であつて、秩父古生層から接觸變質の結果片麻岩化したものも東斜面には殘存して居る。權現山や北部經ヶ岳方面は全く古生層の砂岩粘板岩が互層して居る木曾山塊は更に東西方向の構造線によつて幾つかの山塊に横斷されて居る。即南から烏帽子岳(二二九〇米)南駒ヶ岳(二八四二米)駒ヶ岳(二九五〇米)南澤山(一八九五米)經ヶ岳(二二九六米)等の山塊は其主なものに殊に駒ヶ岳の茶臼山以北は著しく高さを減じ權兵衛峠では一五〇〇米に下つて居る。經ヶ岳は東面は伊那盆地に面する斷層崖で、西面も亦奈良井川によつて切斷せられて居るから是亦明かな地壘である。この山塊の北部川島小野附近には幾つかの斷層群があつて地形が複雑なことは前述の如くであるが、霧訪山から順次高さを減じて松本平原の堆積層中に没して居る。駒ヶ岳南駒等の連嶺は既に精巧な彫刻を受けた大起伏の滿壯年の山として頂上附近では高山相を呈し、殊に駒ヶ岳では寶劍岳の直下にある「千疊敷カール」(千疊敷)南駒では「播鉢窪」の

ル等も見事なもので高山地貌として平地から仰望されるので珍らしい。又南駒の「百間薙も花崗岩の岩壁の直立して居るのが著しく見える。此附近の山の褶襞即ち谷と尾根との分布は經ヶ岳や伊那山塊などよりは粗大で角張つて豪壯な感じを與へる。又岩石は其節理に従つて崩壊したり地被を剝離したりし易いから大正十二年七月の豪雨に際しては山崩が烏帽子岳の東側數十個所に起つて前澤川に沿つた片桐村の耕地を岩塊で埋没した様な慘狀を演じた。古來此地方ではかゝる作用が屢々繰返されたことは山地の各所に在る崩壊の痕を見、段丘中の堆積物の狀況に察し、又古來此種の崩壊に對して「山津波或は蛇拔じゅうはく」なる名稱の存在して、住民のかゝる事變に對して甚だしく恐怖の念を有することに徴しても推定される。

七 大城山塊

辰野の北方に當つて大城山(二〇三五米)から北に伸びて鹽尻峠に達する山塊があつて、東は天龍川西は横河川の斷層によつて切斷されて楔狀を呈して居る、此の地壘を假に大城山塊と命名する。小野の北部善知鳥峠の南口から檜澤附近まで東南方向線を境として南西は古生層で、北東は火山岩層に被はれて居る。一般に本山塊は東側諏訪に而しては殊に急な傾斜を示し、西面は緩傾斜であることなどによつて傾斜地塊(Tilted block)をなすものと考へられる。

八 赤石山塊

前述の赤石構造谷の東部に聳えて居る山地は一般に赤石山脈と呼ばれて居つたが、普通の褶曲

山脈ではなくて地質構造上から見て其原構造に於ては褶曲作用を受けて居るが現在の地形を作つたのは實に斷層作用で、縦横の地裂線によつて幾つかの塊片に切斷されて居るが此等を赤石山塊と總稱して置く。夫等に關する記述は茲に省くとして本郡に屬する部分だけを見ると、地形上から三峯川の支流黒川を境として東駒仙丈山塊と其北部に連つて居る處の釜無山塊との二つに分つことが出来る。後者は横岳峠から白岩山(二二八七米釜無山(二一一五米)御所平峠(一八〇〇米)金澤峠(一三一一五米杖突峠(一二四七米)と次第に北にすゝむに従つて高さを減じて伊那山塊に接續して居る。釜無山塊は一般に山容が温順性で角張らず、山頂は波狀をなして起伏に乏しく、準平原(Peneplain)狀をなして居るが、偶々白岩山や釜無山や笠山附近の圓頂狀を呈するものがあるがこは殘丘(Monadnock)狀のものである。蓋此地塊の表面は準平原狀に蝕磨された後、大城山塊と共に傾斜地塊として隆起して第二次の地形輪廻に入つたものである。次に東駒仙丈山塊は本郡の最高地であつて、仙丈岳(三〇八二米)は野呂川の溪谷を隔て、白峰の北岳(三一八九米)と呼應の間にある。共に古生層の砂岩粘板岩の互層から成立つて居るが、其西側伊那里村に面して數個の階段をなして低下して居る。東駒ヶ岳(二九六五米)は北澤峠の鞍部を以て仙丈と接して居るが、黒雲母花崗岩から成立ち、ピラミッド形で鋭く尖つて白崩岳の異名のある如く半腹以上は岩石が裸出して居るのが著しい。早春の候伊那町附近の高臺から之を望めば仙丈の根張りも廣く堂々たる雄姿は、アルプスの「ユングフラウ」の如く相隣する東駒ヶ岳と共に夕日に輝く雪の美觀は眞に莊嚴の極みである駒ヶ岳の六合目附近からは古生層地域となつて鋸岳の鋸齒狀の奇峯に續き、之を過ぐれば釜無山塊となる。一般に南日本の外帯は山岳重疊して人跡未到の個所が多く、肥後の五ヶ庄、阿波の

祖谷などは知られて居るが我が赤石山中でも伊那里村の浦美和村戸台等は何れにも劣らぬ深山幽谷の地と云へやう。

九 伊那山塊

西は天龍川に限られ、東は赤石構造谷によつて赤石山塊と接する處の標高一〇〇〇米から一六〇〇米に達して居り、南は下伊那から本地方に連続して、北は諏訪湖の西邊に及び、天龍の上流で切られて居る處の地塊を伊那山塊と云ふて居る。地質は三峯川以南は片麻岩や花崗岩等で構成されて居るが、三峯川以北では片麻岩、花崗岩、古生層等で成立し、北部朝日村以北では第三紀層の地盤の上に厚い火山岩層を被つて居る。守屋山は普通の火山では無く、兩輝石小紋岩が岩脈状に侵入したものである。本地塊は更に南北の方向に延長せる四徳川、中山川、新山川、棚澤川、一の澤川の上流等を通ずる構造線によつて中央部を縦断され、又小澁川、新宮川、三峯川、一の澤川等の構造線によつて東西の方向にも切断されて、高森、戸倉、三谷、高鳥谷、陣場、形、高雄、不動峯、守屋、小式部等の小地塊に分断されて居る。そして其低處には四徳、桑原、中澤、新山、後山等の山間の聚落を作つて居る。伊那山塊は全體に赤石山塊の前山をなして居つて、彼は地形上から滿壯年の彫刻されて居るが、これは褶皺なども角張らずに山容輪廓等が何れも圓味を帯んだ温順性のもので、地形輪廻も前者よりは一層進展して居る。守屋山以北の山地は傾斜地塊の構造が明かて、火山岩層の表面が崩壊して惡地(Badland)状を呈して居るのが著しい。朝日村の澤底川や上野川等も截頭谷をなして居つて、湖南村、後山、豊田村、上野等の聚落が有賀峠、真志野峠等の分水嶺を越えて、諏訪郡から入來つて居る。

此等に依つても如何に諏訪の勢力が本郡に浸入して居るかを知らることが出来る。

一〇 天龍川

海拔七五九米の諏訪湖に發源し、蜿蜒五十七里を南走して、遠州掛塚に於て太平洋に朝宗する天龍川は、實に伊那盆地の大動脈と云ふべく、大小幾多の支流は又夫々の動脈にも比すべきものであらう。天龍川が本盆地の堆積及解析の大動力であつたことは勿論で、古來灌漑に漁撈舟航に流筏に交通運搬等民人の生業發達に利害關係の密接であつたことは絮説するまでもないが、今後に於ても尙流路に従つて道路を開鑿したり、鐵道を布設したり、揚水して灌漑用に供したり、又有力な地點を見立て、水力電氣を起すなど、誠に本地方の文化の發達上密接不離な關係を有して居るのである。岡谷の排水口を辭した天龍川は辰野に至る間大城山塊の東邊の斷層線に沿ふて流下し、辰野に於て西北から來る二子川狀の横河川を合流させて居る。元來截頭谷である處の横河川の支流小野川は諏訪松本盆地陥没前には現在天龍川によつて運ばれる若干の水及鹽尻方面の水をも收容したものではなからうか、即ち興味ある河の爭奪(River Piracy)があつて現在の天龍川と主従の位置を轉倒して居りはせぬか。天龍川が辰野以北に於て特に指摘する程の段丘が無いのに横河川方面には明かに三級の段丘を有して、過去に於ける河の營力の甚しく優勢であつたことを示して居る。一體天龍川の流域はその地體の塊狀構造の支配を受けて、支流の配列等が格子狀を呈して居つて、流域全體が長方形であるから他の大河の如くに廣い樹枝狀の支流を持たずに肋骨狀に配列されて居る。中でも大支流たる小黑川と三峯川、大田切川と新宮川、小松川と小澁川とは各對

稱的位置をなして居るがこれも東西の地裂線に由来するのである。辰野を離れた天龍川は荒神山に會して右に彎曲して居るが現在荒神山の頂に二條の舊河床が存在するから推すと嘗ては同山上を流れたのでせう。夫から伊那町に至るまでは西側支流の壓迫によつて東山側を流れるが、伊那町では三峯川の壓迫を受けて西に曲つて居る。又岡谷から辰野に至る間は諏訪湖で砂礫の沈積を行つて居るから河床は溝渠の様に整つて居つて砂礫の堆積を見ないが横河川を會し更に三峯川を合すると遽に氾濫原を作つて河は網目狀に亂流して居る。然し猿岩と北の城との間では岩石の支配を受けて左右に振動することが出来ず遂に下刻作用が著しくなり兩岸に急壁を残して小峽谷を作つて居る。更に進んで下平中澤の間では兩岸に高さ五六十米の弧狀の段丘を残して居るが吉瀬赤須以下に於ては再び岩石間に侵入して大草に及ぶまで峽流を作つて夫以南に於ても岩石の露出に會せる部奈鶴部間、瀧川臺城間に於ては段丘は尖頭(Crest)を作り孤狀をなして居る。天龍川の流路は一般に平衡(Grind)を得たもので比較的急湍等も少なく諏訪湖から掛塚の河口に至るまで平均三百分の一の落差を有しその内湖口から辰野までは平均二百四十分の一で以下飯田附近までは百八十分の一乃至二百六十分の一で平均二百二十分の一となり飯田以南遠州二俣までの峽谷は二百分の一内外から漸次五百分の一内外に減じ其平均三百分の一の勾配を示して居る。流量は諏訪湖排水口に於て平均約六〇〇個を算するも飯島に至れば平均二〇〇個に激増し小澁川を合せて二五〇〇個、二俣に於ては約六〇〇個に達して居る伊那町以南に於ては近年まで舟航等を稼業とせるも近時電車の開通に伴つて廢するに至つた。

第二章 伊那盆地の自然界

一 森 林

現在伊那盆地の低所である天龍川及其支流の沖積層に屬して居る地域は土地肥え水利の便を得て多くは水田として開拓されて居る。河畔には赤楊、楊柳などが立並んで河邊に特殊の景觀を作つて居る。段丘の側面清泉の湧出する處には必ず若干の聚落が發達して居り、山葵や杉等が植栽されて居るが乾いた所では樺、栗、檜、櫟等の落葉樹が多い。又解析された扇狀地即ち洪積層の臺地では聚落は山の手に片寄つて居つて、中央部には近年に至つて商工地或は交通上の要路として開けた處が多い。從來此臺地上が如何様の状態であつたかは考證すべき材料に乏しいが、元來水利の便が悪しく、此地方の氣象の一斑から見ても比較的降水量に乏しく、土地が乾燥し易く、火山灰から出來た赤土即ちローム層は土壤としては割合に肥えては居らず、味噌土の様な不良の土壤も雜つて居る程であるから一面に森林が鬱蒼として茂つたとは考へられぬ。勿論不毛の原野ではなくて、大部分は所謂菅の荒野として荆棘雜草等の繁茂に委せられて居つたではなからうか。勿論當時でも各所に樹叢は存在して居つたであらうが、此等の樹種は四邊の山岳の林相から推して樺、梅、榎、唐檜、杜松等の針葉樹と白樺、水榿、櫟、栗、冬青、山櫻、山梨、雲葉、榛等の闊葉樹を混じて居つたと考へられる。近年は頻りに地區の整理を行つて、赤松や落葉松を主として檜、樺等をも植栽して立派な森林が出來つゝあるが、この状況を以て古昔を推定することは困難であらうか。小野盆地に於ける矢彦、小野兩神社の社叢の如きは當時の殘存森林として貴重なものである。又松島の白

杵木下の南宮伊那町山寺伊那村栗林神社等は樺の社叢として著しい。赤穂の光前寺も杉樅檜等の樹林が古昔の面影を傳へて居る。要するに平地には森林は少なかつたので、夙に伊那山塊釜無山塊や權現山、經ヶ岳駒ヶ岳南駒ヶ岳烏帽子岳方面をも各部落の入會山として伐採されたこと、思はれる。木曾山塊や赤石山塊等の高地には今も尙針葉樹林に被はれて居ることが著しい。

二 動物

次に原住民の食料としての動物は如何と云ふに、先づ天龍川の魚族を挙げねばならぬ。最近養殖によつて種類を加へて居るが之を除外すれば鮎、鯉、鰻、鮑、モロコ、鯰、鮎、河小魚、鯉、魚、鱈、赤魚など廿種を算し尙少量の蝦、ドブ貝、蛸、貝、沼田には田螺等を産する。然し湖沼或は海岸近くの河流と異なつて季節に従つて饒多に魚族を見る様なことは困難で、殊に太平洋傾斜面では鮭、鱈などは産しないから秋季に於ける鮎、鰻などを以て第一の産物としなければならぬ。又鳥類は木曾山塊の西邊木曾谷から飛驒山地に亘つては、候鳥の去來多く殊に晩秋の「渡り」に於ては花鷄、全翅雀、鶉、文啄等の霞網によつて獵せらるゝものが多いけれども、本郡に於ては小野飯沼川、雨澤、權兵衛峠等に、若干の鳥屋場が存在するのみであるから古來此方面の産額も著しいものではなく、稀に花鷄の大群、雁、椋鳥等が去來するのを見るが天龍川には割合に水禽などが少ない。又平地に近い山地には雉、山鳥、鳩等も少くはない。野獸としては山地には熊、羚、羊、猪、山犬、鹿、兎、貉、貉、貂、鼯鼠等普通のもの産したが、近年猪、山犬、鹿の如きは全く絶滅した様で熊の如きも稀に獵せられるに過ぎない。然し猪、兎、山犬、鹿などが多く來つて農作物家畜等に甚しく害を及ぼしたことは、飯島村岩間附近に残存して居

る「猪」堤、西箕輪村中條、羽廣附近に存在せし「猪」除堀等によつても證することが出来るが殊に猪、兎の被害による免租地のあつたことも記録に明かであるから、古代の住民が狩獵の目的物として、又農耕時代に入つても彼等野獸と生存上の惡戰苦闘をなしたことが想像される。又此地方が海岸に遠く且交通不便の爲に、古來殊に動物性食料の供給に不充分であつたことは、早春天龍川の「ザムシ」と稱する水棲昆蟲を食し、夏秋の候に於ては地蜂、其他蜂類の蛹を食し、尙他地方にて容易に食せざる食料をも調味鹽梅して、副食物となすことの傳習せられた事によつても推考する事が出来る。

三 泉

古來住民の生活上直接必要であつたものは飲料水である。幸に伊那盆地では山麓の地は勿論段丘の側面には必ず多少の湧水を見ると云ふ有様で、聚落は必ず此等の泉を中心として發達して居る。今日でも水利の不便な部落は決して人口が増加して居らぬ。井戸と云へば大抵堅に深く地中に掘入つて居るが、伊那地方では横井戸なるものが多くて、然も深いのは百間も二百間も隧道を作つて集水して來るので、他地方にはかやうな例は少ない。然して最も泉の豊富な良質な處を舉げて見れば、

小野村 崖下

伊那富村 堀上清水、徳本水

中箕輪村 松島及木下の西の崖下、大出の崖下

伊那町 御園の今泉、宮ノ前

- 同 山寺の福澤洞及小澤川・小黑川の兩岸
- 西春近村 下島及澤渡附近
- 飯島村 本郷堤ヶ窪
- 片桐村 小和田及田島附近

段丘下の泉は一般に天龍の西側殊に中北部地域に多くて南部及天龍の東側には少い。是東側は地表水を浸透せしむべき平面積が狭く、南部では地層の状態が滯水層を作るに不便があるから、中北部では上面が広く且鑽井板の構造が都合よく出来て居るからである。又此地方では草場と稱し古來上記の如く泉の湧出する濕地に禾本科植物を植栽して冬期比較的溫度の高い泉水を灌溉して生長を促進せしめて夏季に至つて綠肥として利用することが行はれて居る。又泉には地塊の斷裂に伴ふ岩石の裂罅から湧出するものも少くない。

- 火山峠 北中腹の清水 同 南火山の平清水
- 朝日村 上野辨天の清水及上平出井出の清水、藤の森清水
- 高遠町 権現澤の清水 同 社宮司澤の清水

第三章 本地方の交通

本地方の東西兩側は赤石・木曾等の大連嶮によつて外圍との交通を遮斷されて居るが故に、此方面には僅に數個所の通路を有するのみである。即ち西方では美濃方面と下伊那との間に御坂峠、木曾と下伊那との間に大平峠、清内路峠があるのみで、上伊那では權兵衛峠が唯一の木曾に通ずる交通路である。東部赤石山塊では、黒川の上流から仙丈・東駒の鞍部を甲州野呂川に越えて甲府に出る路等有るが、何れも獵夫や登山家が辛うじて跋涉する程度のもので、一般に利用される様なものではない。釜無山塊の北部では、佛平御所平、杖突、眞志野、有賀勝弦峠などがあつて、諏訪との交通路に當つて居るが、就中杖突峠は最も重要路として古昔から其往來が頻繁であつた。東西方面は上記の様に比較的少ないが、南北の方面には天龍川の兩岸に沿ふて昔から比較的立派な交通路が開けて居つた。現在三州街道・龍東線等は其主なものである。平地に於ける古代の道路は辰野邊から西の山麓を通つたらしいが、春日淡路守によつて開かれたりと傳ふる春日街道の如きも、天龍川の支流の所謂田切を出來得る丈避けて、現在の三州街道よりは西方を通過した。其後に現三州街道が東方に開かれ、伊那電車線路に至つては更らに東に下つて居る。其他朝日村から天龍川に沿ふて諏訪に通ずる街道や、善知鳥峠から鹽尻に通ずる街道なども、交通上重要なもので、地體構造線と關係して居る。尚赤石構造谷は縦貫通路の裏道として古來顯著なものであつたことは、小澁谷に於ける宗良親王の御事蹟、伊那里村に於ける平家隱遁の傳説、三義・藤澤の谷にのみ峠を越えて壓倒的に甲州から日蓮宗が傳來せるなど、諸種の事柄によつて察することが出来る。又小盆地

間には構造線の弱所を通ずる溪谷の鞍部に峠路があつてこれ亦交通上の捷徑をなして居る。

火山峠 富縣から伊那村に通ずる。

新山峠 新山から中澤に通ずる。

折草峠 中澤村から四徳に通ずる。

鹿鹽峠 中澤村から鹿鹽に通ずる。

女澤峠 中澤村から三峯川に通ずる。

木曾殿越 駒ヶ岳と南駒との鞍部で古昔木曾義仲が通行したとの傳説がある。

交通路は何れも格子状をなして放射状に發達しないのは地形上當然と考へられる。然して現在辰野伊那町高遠赤穂等の市街地を作つて居る處は何れも是等交通路の交叉點であることも面白く思はれる。

第四章 本地方氣象の概況

其地の氣象上の諸要素が人文發達上至大の關係を有することは絮説するまでもない事であるが、今長野縣氣象年報等に據つて、此地方の平年の氣象の概略を述べて見やう。

一 氣 溫

一、平均最高氣溫 本地方の一月二月の最高氣溫は攝氏五、一度及五、八度であつて、何れも諏訪よりは一、五度、松本よりは二度、木曾福島よりは一月に於て約二度二月に於いて約一度高い。

七月の最高氣溫は約二七、五度であつて諏訪より約〇、五度低く福島松本と殆ど相等しい。八月の最高氣溫は約二九度であつて諏訪と殆ど相等しく、福島より約二、五度松本より約一度高い。

二、平均最低氣溫 一月二月の最低氣溫は諏訪福島に比較すれば約一度乃至二度高く、松本よりは一度弱高い。

七、八月の最低氣溫は諏訪松本に比較すれば一度弱低く、福島より一度弱高い。

三、最高低氣溫の平均較差 全年平均較差は伊那町及伊那里は一、八度、赤穂は一、五度、朝日は一、三度であつて、福島の一、三、〇度に比すれば小さいが、長野の一、〇、〇度、松本の一、〇、九度に比較すれば稍々大きい。

伊那町で平均氣溫較差の最大なのは四、五兩月の一三、五度及一三、六度であつて最小のは九月の一〇、七度である。

四、最高低平均気温 一月及二月の平均気温は皆氷點下である即ち、伊那里の二月の氷點下二、一度が最も寒冷であつて、之に次ぐのは朝日の一月氷點下一、三度なのである。諏訪松本木曾各地方に比すれば寒氣が強くない。然し下伊那郡飯田地方の氷點以上なのに比すれば寒冷である。八月が最高であつて二十三、四度となり諏訪と大差なく、福島松本よりやゝ高い。

二 降水量

一、降水量年平均

伊那町	一四七五、一耗	赤穂村	一五五二、五耗
朝日村	一三八五、七耗	伊那里村	一七一九、一耗

何れも諏訪松本長野等の北部各地及甲府よりは多いけれども、西及南方の福島大桑飯田清内路、濱松等よりは少ない。

二、夏期には降水量多く冬期に少ない、六七月は梅雨の現象が著しく六月の降水量は二〇九、八耗に達し多くて七月の一九五、九耗九月の一八二、五耗等は之に次ぐのである。

イ、降水日数平均

伊那町	一二〇日	赤穂村	一二三日
朝日村	一三五日	伊那里村	一二八日

右の如くて概ね四近の各地よりは少なく新潟の一八〇日に比して著しく少なく濱松の一三三日よりも一般に少ない。

ロ、長野(一〇〇〇耗大正十二年)松本(一五三七耗大正十二年)等は降水量が比較的少いに拘はらず降水日数は長野は一四〇日松本は一四九日で割合に多いが、本地方は之とは反對に降水量が多くて降水日数は反つて減少して居る。

ハ、降水日数の一年内の變化を見るに梅雨期が最大であつて、六七月に十四五日宛を數へ冬期は毎月七日であつて最も少ない。

ニ、降雪 飯田に於けるものは降水日数年平均一六二、三日中降雪日数は三五、六日である。降水日数及降雪日数各月左項の如くである。

	一月	二月	三月	四月	十一月	十二月
降水日	一一、六	一〇、八	一四、〇	一三、〇	一一、七	一一、八
降雪日	一〇、九	一〇、〇	六、〇	〇、五	一一、一	七、二
降雪日ノ降水日ニ對スル百分比	九四	九三	四三	四	九	六一

又積雪最深は大正元年十二月二十九日の一尺四寸九分 あるが上伊那に於ては二尺内外に達した。

初霜は例年十月中旬であつて終霜は五月十日前後である。

初雪は例年十一月下旬終雪は三月下旬と見る事が出来るので根雪となつて地表を被つて居る。期間は一年を通じて平地では十日位に過ぎない。又洪積層のローム質臺地は気温及土性の關係上冬期霜柱の現象が著しく、殊に雪に被はれない日蔭地の斜面は日中も尙融解することなく、次第に上方に伸長して間々六七寸の長に達し、表土を扛起崩壊し、幼植物の根を露出せしめ、又簡単な營

造物に對して之を破損せしめることが著しい。

三 濕 度

一、當地方に於ける濕度は年平均七七で松本と同様であつて長野よりは一多い。甲府、濱松、名古屋よりは二又は三だけ多いが何れとも差して懸隔はなく、概して余り多くはない。

二、濕度の年内の變化は夏期七九及秋期八二に多くて冬期七五に少く、春期は最も少なくて平均七二となり更に三月及四月に於ては七一となる。

三、松本は飯田と殆ど變化なく、長野は冬期八〇、秋期七八に多い春期最小なること亦飯田と同じ

四 風

一、風向概して南風であつて一二月は北風が多い、六、九兩月は南西の風が殊に卓越して居る。

二、飯田に於ける風速は年平均二米であつて松本の三、三米長野の二、七米に比して甚しく小さい。

三、飯田に於ける強風烈風の日數も松本の七八日長野の九四日に比して約二分の一にあたる三八日のみであるが伊那町に於ては風速概ね二乃至三米強いので宮田及赤穂の一部に於ては十一月、十二月の候には往々駒ヶ岳から吹下す烈風の爲に家屋に著しい被害を及ぼすことがある。

第二部 先史時代

甲 先史時代（アイヌ人）

第一編 遺跡

一 遺跡の意義

石器時代の遺跡とは石器時代住民の生活に關係ありしと思惟される場所を指し、其多くは彼等の住居した跡に當る。而して遺跡は地上又は地下に於ける當時の遺物の散布・埋藏或は竪穴・焚火跡等特殊な残存物の存在によつて決せられる。遺跡は性質上幾通りかに分けられる。往々にして石器類が單獨に發見される場合があるが、之には故意偶然の遺失・廢棄もある可く、又祭祀等の目的にて安置・埋没せしもある可く、その發見地點が果して彼等の實際生活と密接な交渉があつたか否かは決する事極めて困難である。さればかゝる遺物單獨發見地は特殊な場合を除いては遺跡としての價值は尠い。又竪穴・焚火跡等は個々にても遺跡と稱する事が出来るが、之等は孤立して存する事は殆どない。されば遺跡は比較的廣汎な地域に互るを常とし、大抵當時の聚落の跡と見做されるのである。

二 遺跡の平面的分布

本郡の遺跡数は三百八十八に達し、遺物單獨發見地も含む大正六年出版の「日本石器時代人民遺物發見地名表」第四版所載の三十五に比すれば實に夥しい發見である。勿論今後とても調査を重ね、新開墾地が拓かれるに至れば更に其数は増すであらう。遺跡の豊富なる事約八十八方里の小區域にかく多数を算するに依ても察せられる。遺跡の平面的分布は次の如き状態を示す。

平面的分布は一言にして言へば、南北に一直線に流れる天龍川に沿ふ細長い分布帯である。而して此帯は木曾山脈と赤石山系の支脈伊那山脈との間に介在する山間盆地そのものである。北端は小野村北小野大出遺跡南端は上片桐村鶴部遺跡であつて其距離約十二里三十丁である。帯は中央に於て左右に開いてゐる。左端即ち東端は三義村山室遺跡右端即ち西端は西箕輪村與地遺跡であり、其距離は四里三十丁許である。これを説明の便宜上地理的に區劃し、最北西北西南東南最東東北の諸地方となす。

最北地方は横川川流域の地方で小野川島の兩村を含む。分布密度稀薄、小野驛附近の小盆地と横川川に沿ふ細谷に限られる。

西北地方は辰野より小黒川附近に至る間に、天龍川右岸なる伊那宮中箕輪南箕輪西箕輪伊那町の一町四ヶ村を含む地方である。遺跡數八十三、面積に比すれば分布が密でないが所在地には密集してゐる。天龍川に沿ふ遺跡列と、木曾山脈に屬する諸山の麓に沿ふ遺跡列との間に廣潤な平原を挟む。この平原内には殆ど遺跡を發見しないが、僅かに大泉小澤兩川の流域に存して兩遺跡列を連ねてゐる。

西南地方は小黒川以南の地で、天龍川右岸なる西春近宮田赤穂飯島七久保片桐上片桐の七村を

含む。殆んど一直線に天龍川に沿ふて密集し、密度濃厚である。此地方の遺跡分布が多くの田切と關係あることは興味深い。

東南地方は三峰川以南の地で、天龍川左岸なる南向中澤伊那東春近宮縣河南の六ヶ村を含む。其南半は山脚川に迫る爲、分布稀薄で、僅に中澤村高見附近及伊那村栗林附近に點々存在するを見るに過ぎぬ。北半は之に反して分布密度中等である。けれども三峰川と天龍川との會交點に當つて三角形をなす低地が形成されてゐるが、此上には殆んど分布を見ない。三貝山と高鳥谷山との間を北流する新山川(三峰川)の一流の流域にも多少分布してゐる。

最東地方は三峰川上流、及其二支流山室藤澤の兩川流域を含む山間溪谷の地で、高遠町伊那里美和三義長藤藤澤の諸村を包括する。その最南遺跡は伊那里村中尾、最北遺跡は藤澤村御堂垣外である。峽谷地なるにも係らず密度は稀薄でない。

東北地方は三峰川以北の地で、天龍川左岸なる美篛伊那町手良箕輪東箕輪朝日の一町五ヶ村を含む。東南地方なる三角形低地と相對して同様の地形の成立を見、其上には多少の分布を認める。多くは山脚に沿ふて一直線に密集し、密度極めて濃厚である。其北端は二分し、一は天龍川上流に沿つて諏訪湖口地方に連り、他は澤底上野兩川に沿つて山間に入り、諏訪湖西岸地方に隣接する。

三 遺跡の垂直的分布

吾人は曩に諏訪郡の遺跡に就て諏訪湖面標高を基準として垂直分布表を作製した。本郡には基準とすべきものがない。假に天龍川河面に據るとするも、河面標高は上流朝日村上平出附近に

ては七百米内外、下流上片桐村附近にては五百米内外を示し、其差實に二百米に達する爲非常に不便である。又天龍川流域に發達してゐる河成段丘の第一段第二段と云ふように各段丘に於ける分布を検するは最も興味ある問題であるが、段丘夫自身が或は斷絶し或は消滅し或は複合して、全郡に渡つて一樣でない爲、段丘の配合は地形學者の決定を俟つ要があるから、今日の所此試みは不可能である。よつて單に標高によつて分布を見る事とする。最高遺跡は約一千里の伊那里村中尾最低遺跡は約五百二十米の片桐村中村である。此間に如何なる状態にて垂直的分布を示してゐるか。是を見る爲、多少河面標高を考慮に入れて次の如き表を作製して見た。

					河面標高
					940
					920
					900
					880
					860
					840
					820
					800
					780
					760
					740
					720
					700
					680
					660
					640
					620
					600
					580
					560
					540
					520

に連れて遺跡標高も下降することを知る。而して全般としては七八〇—六八〇米の間に最も濃厚に分布してゐる。

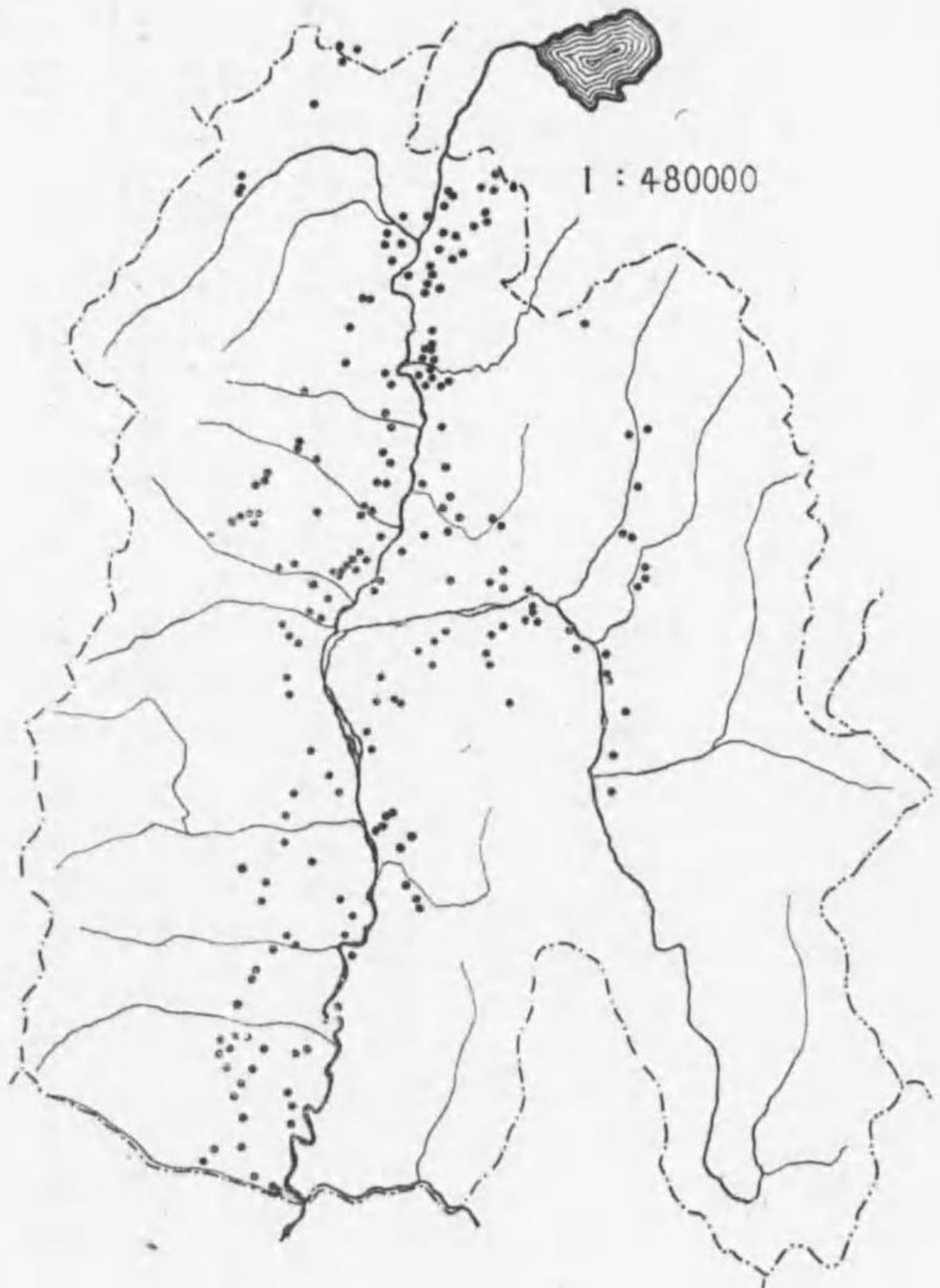
即上列の數字は河面標高、右側の數字は遺跡標高である。採擇した遺跡は全部ではなく、各河面標高附近に幅二千米の帯を東西の方向に劃し、その内に含まるゝ遺跡のみに就て見たのである。七〇〇米は辰野附近、六五〇米は福與附近、六〇〇米は伊那町附近、五五〇米は赤穂附近、五〇〇米は本郷附近を夫々中心とした。かくして作つた表を見ると河面標高が低くなる

四 遺跡分布と現在聚落分布

遺跡の分布と今日の聚落の分布とを比較するに略々合致するを見る。是は偶然の暗合にあらざして、時を隔て、文化に高低があつても人類生活は常に共通した條件に支配されてゐる事を暗示するものである。第一圖は遺跡分布略圖、第二圖は現在聚落の分布圖である。彼此對照すれば容易に其大勢の相似る事が首肯される。

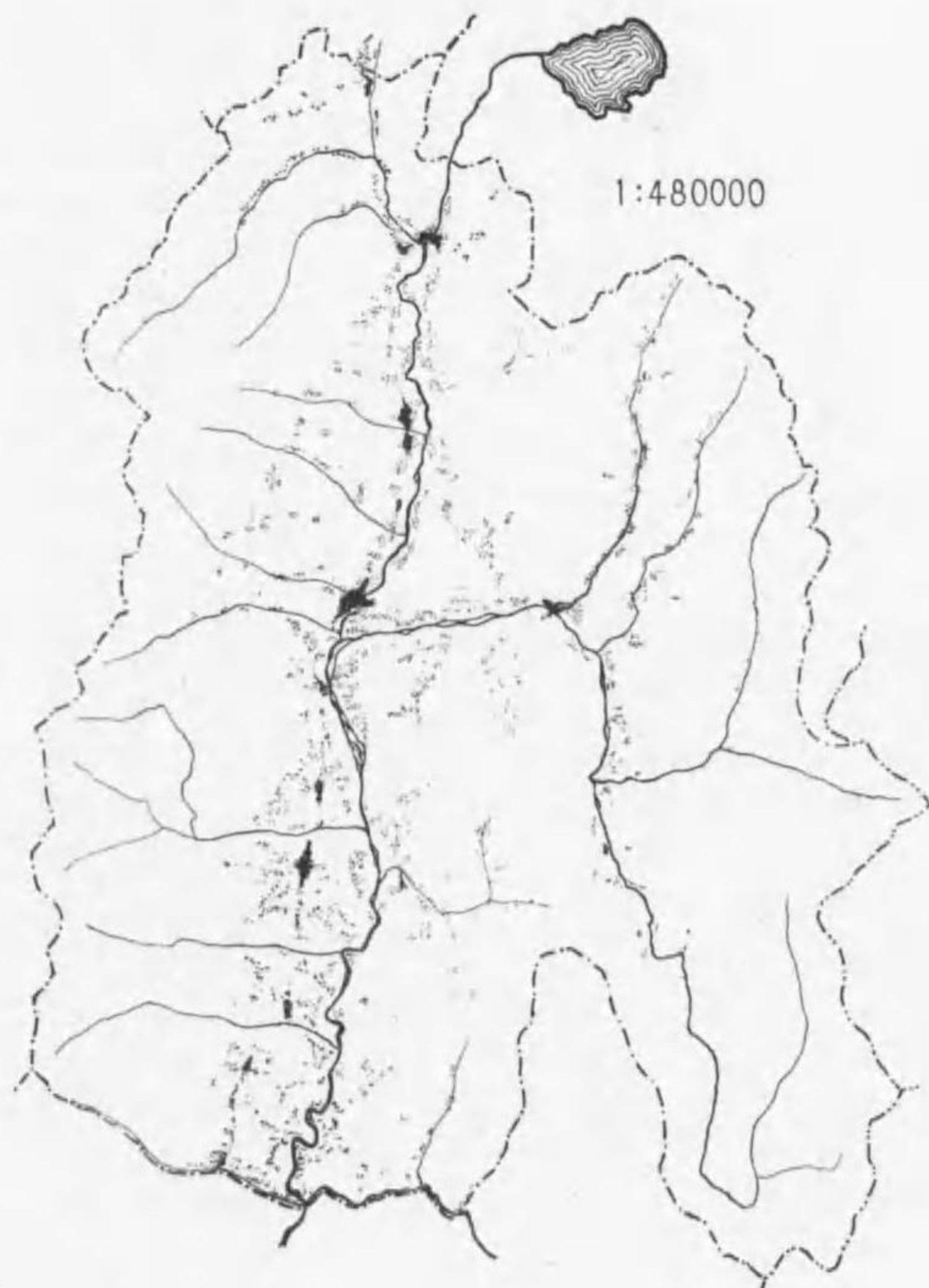
遺跡中には其地域廣汎にして發見遺物の種類數量の特に豊富なるがある。是は勿論長年月の居住又は大聚落の存在に基づく結果であるから、其地方の中心地と假定する事が出来る。是を大遺跡と名け、左に顯著な地を掲げる。

- 伊那富村北大出南箕輪村
- 南殿伊那町御園同町山寺



第一圖 遺跡分布略圖

同町下小澤月見松西春近村南小出同村木裏ヶ原宮田村中越同村駒ヶ原赤穂村北原同村赤須飯
 島村高尾同村岩間同村本郷堤窪七久保村北村同村高遠原片桐村牧ヶ原南向村日曾利中澤村吉
 瀬伊那村上ノ原富縣村南福地同村北福地河南村金井同村三軒屋美篤村芦澤手良村下手良東箕
 輪村長岡朝日村荒神山同村平出同村上平出



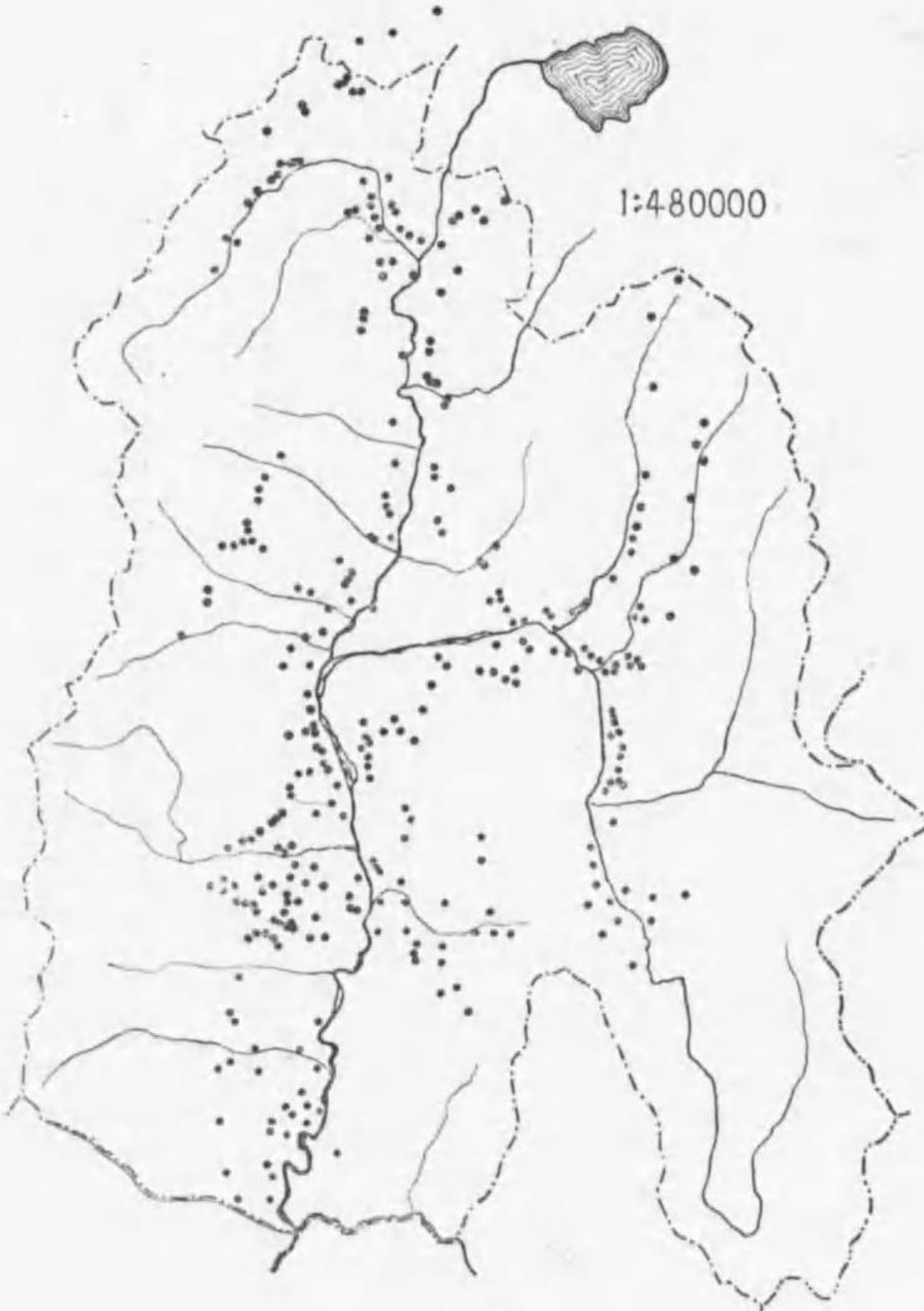
圖二第 聚落分布圖

三州街道並びに伊那電氣軌道による近代的交通路の要衝に當る關係である。

現今に於ける大聚落は、
 伊那富村宮木中箕輪村松
 島同村木の下南箕輪村北
 殿伊那町西春近村澤渡宮
 田村宮田赤穂村赤穂飯島
 村飯島七久保村海道上片
 桐村片桐中澤村下割高遠
 町朝日村平出
 の諸地である。兩者を對照
 して見ると、大體は相似た分
 布を示してゐるが、前者が散
 布的なるに、後者は天龍川西
 岸に沿ふて特に著しいのは

五 遺跡と清水湧出地との關係

遺跡の多くが水域に密集する事は卷末遺跡分布圖に徴して明かである。水が人類の生活條件
 中の一要目たるは今こゝに喩々するを要せぬ。飲料に、炊事に、洗滌に、漁獲に、交通にその必要なる
 事項は頗る多い。而して前三者は池泉後二者は河川に據る事の便利なるは常識的にも考へられ



圖三第 湧泉分布圖

る。従つて住居との關係密
 接なる可き前三者に必要な
 る池泉と遺跡との關係は深
 くなくてはならぬ。事實郡
 内の清水湧出地の分布と遺
 跡の分布とは全く合致し、又
 個々遺跡に就て見るもその
 近傍には必ず湧出地若くは
 その名残が存するのである。
 今日樹木が伐採され、灌漑
 工事が普及した爲め之等天
 然の源泉は涸渇に瀕しつゝ、
 ある。昔時石器時代の當時

は水量豊富に水質清純であつたであらうから人々の集ひ住まつたことは最も自然と云ふ可く、その遺跡は泉湧れんとする今日もなほ遺つてゐるのである。第三圖は清水湧出地分布圖である。以上で遺跡の概述を終り、二三遺跡に就いて記す。

六 伊那富村北大出の堅穴跡

石器時代の家屋に就て知る唯一の手懸りは今日の所、堅穴跡だけである。郡内で発見された確然たる堅穴跡は伊那富村北大出及美篤村芦澤に於ける二例である。此外飯島村高尾町屋との境遺跡にても類似のものを認め得た。

伊那富村北大出の堅穴跡は村社神明神社境内に社地取擴げの爲切取工事を行つた際発見された。位置は北大出聚落の西標高八百二十米の丘上にあり、その南北兩側及東側は急傾斜をなし、西側のみは背後の山へ連なつてゐる。丘頂は稍平坦で、其處に神明神社が祀られてゐるのである。(第四圖地形)。地形の大體は諏訪郡金澤村木舟の堅穴跡の存する附近と似てゐる。

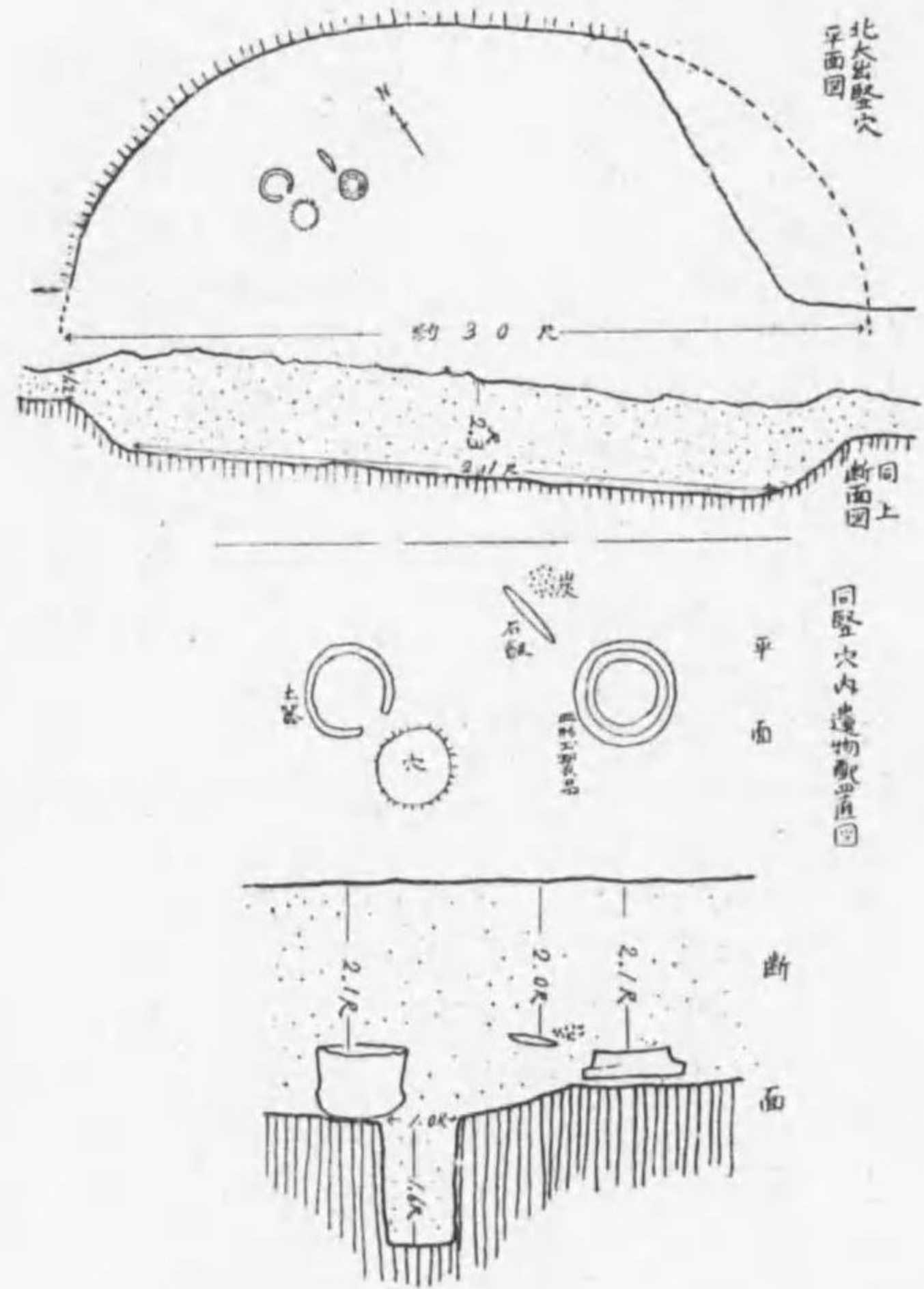
堅穴跡は神明神社本殿の北に接する切取面に現れ、黄褐色の基底地層中に黒色土が凹陷してゐる。大正十年の頃には長さ五間、深さ三尺五寸の凹陷が認め



第四圖 北大出附近地形圖

られたが(圖版第三)大正十四年七月には深さ中央にて二尺三寸、左側にて二尺九寸、下底長二十一尺、上縁長二十八尺内外となつてゐた。

大正十四年七月發掘を行つて此堅穴の大體を知る事を得た。切取面の黒色土を殘らず除いて



第五圖 北大出堅穴發掘圖

進む事八尺餘にして凹陷は全く盡きて附近一帶の厚さ一尺五寸内外の表土に没してしまつた。その盡きる線を辿つて全部の土を除いた結果凹陷は橢圓形の一部の如き形を呈した。前方切取つた部分が如何なる狀況であつたかは全く不明であるが一般堅穴の例より推して切取面の稍々前方にその中心點があつたものと想像される。即ち切取面より稍前方を略々中央とする橢圓形(長徑三十尺内外、短徑二十尺内外)の堅穴であつて、長軸は東西の方向にあつた。而して圖示せる如く堅穴底に徑一尺深さ一尺六寸の横断面圓き穴が造られ、その穴に接して上部を缺く土器(圖版第五の二)が直立、其土器より二尺程離れて小石劔と皿形の土製品とが水平に存した。圖版第三左は其の狀況である。穴の内部に

は土器の小破片数片と、黒曜石を含んだ黒土が詰まつてゐた。小石劔の附近には炭が夥しく散布してゐた。是等の穴及遺物配置の意義は不明である。是以外にも堅穴内隨處から多數の大土器片を出した。

此堅穴跡の存する丘頂にはなほ他にも堅穴が存するものゝようである。例へば此處から約二十間程北の幾分低くなつた處からも多數の土器を出し、試掘を行つた處深さ五尺に及ぶまで土器片が相重つて存する事を確め得た。さすれば丘頂各所に堅穴が作られたものと思はれる。地形は既に述べた通り要害であり、且つ背後に山を負うて風は遮られ日當りよく、住居を構へるには好適の地である。

七 伊那町山寺今泉附近遺跡

伊那町御子柴附近から南方小澤川に至る、伊那町市街西方一帯の段丘上は石器時代遺跡の密集地である。而して遺跡の存する場所は段丘の縁よりも寧ろ、段丘の切込の最奥所一帯の地である。此切込は湧出する泉の流れによつて略一直線に帯状に解析された洞である。されば其最奥所には今なほ泉の湧出を見る。清水と遺跡との關係を如實に見得る好典型の地である。伊那町小學校の北に接する福澤洞はその更に北なる山寺の洞と平行してゐる。前者の口部には小學校附近奥部には原垣外鳥居原等の諸遺跡が存する。後者の口部には寺屋敷及カンゼン奥部には今泉等の諸遺跡が存する(第六圖参照)。就中今泉は大遺跡地である。(圖上段) 今泉なる地名も泉に關係あるものと思はれる。第六圖に見る如く洞の最奥所は略々長方形を呈し、一般に低き其地には短い雜草

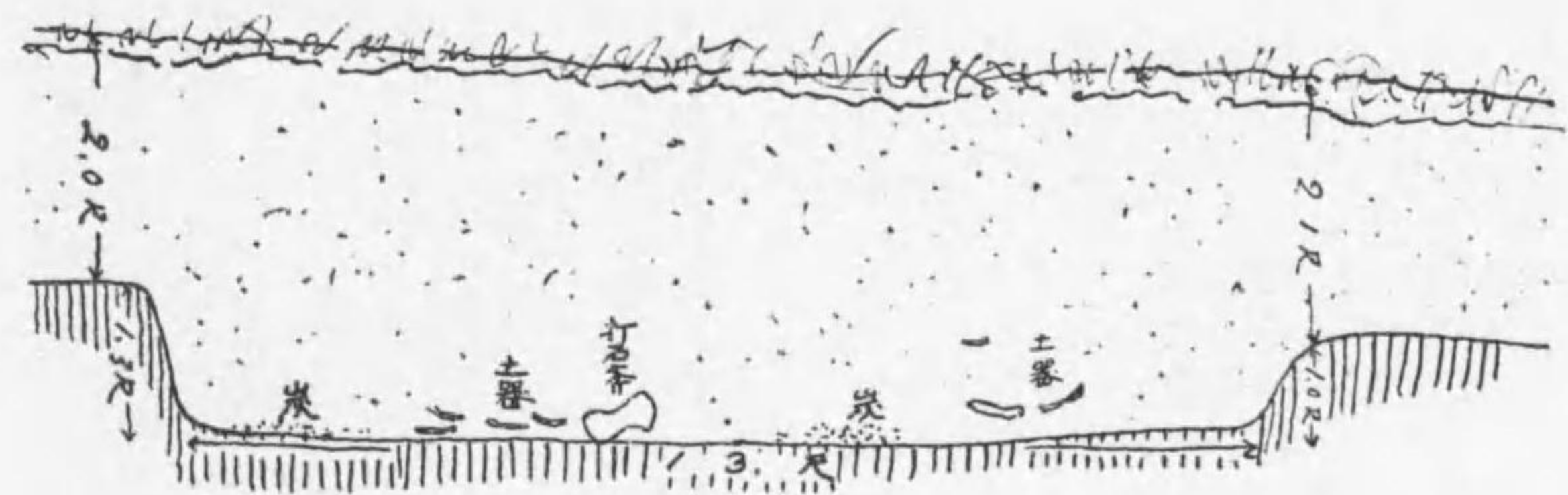


第六圖 伊那町今泉附近の遺跡

が蔓り清泉がその間のこゝかしこから滾々として湧いてゐる。周圍一帯の高地には夥しい遺物の散布を見る。その地域は非常に廣汎である。打製石斧及其の未製品、原石、石屑が多量に散亂してゐる事が殊に注意される。此地に於て打製石斧が盛んに製作された事は推して知る事が出来る。今泉から遠からざる御園宮ノ前の地も此に劣らぬ大遺跡で其地の眺望は絶佳である。(圖二版)

八 宮田村中越遺跡

伊那町を中心とする廣潤なる小盆地は宮田村(天龍川を距てる對岸は東春近村)附近で漸次狭まり、天龍川兩側の山脚は急勾配を以て川に迫り、再び開いて南部の小盆地となる。中越遺跡は兩小盆地の中間に位置し、交通の要衝に當つてゐる。遺跡は南部小盆地の北縁なる稍廣い緩傾斜面上に有るのであつて、地形が一般の遺跡と趣きを異にしてゐる。遺跡前面は直ちに天龍川に接してゐる。圖版第五上段はその全景である。遺物を發見する地域は頗る廣く、量も亦極めて豊富である。然も發見された遺物中には大石棒、大土器顔面把手、附着土器等貴重な資料がある。(圖版第五) 大正十四年七月中越の人家に近い一地點に試掘を行つた。深さ一尺五寸迄は黑色壤土で、以下は



跡遺似類穴堅尾高 圖七第

礫を交へた黄色無機層となる。遺物はすべて黒色壤土中に含まれ、其底に接して土器片、凹石等を出した。かゝる平坦に近い大緩傾斜地の中央に大遺跡の存する所以は恐らく上述の如く交通の要路に當つてゐたからであらう。

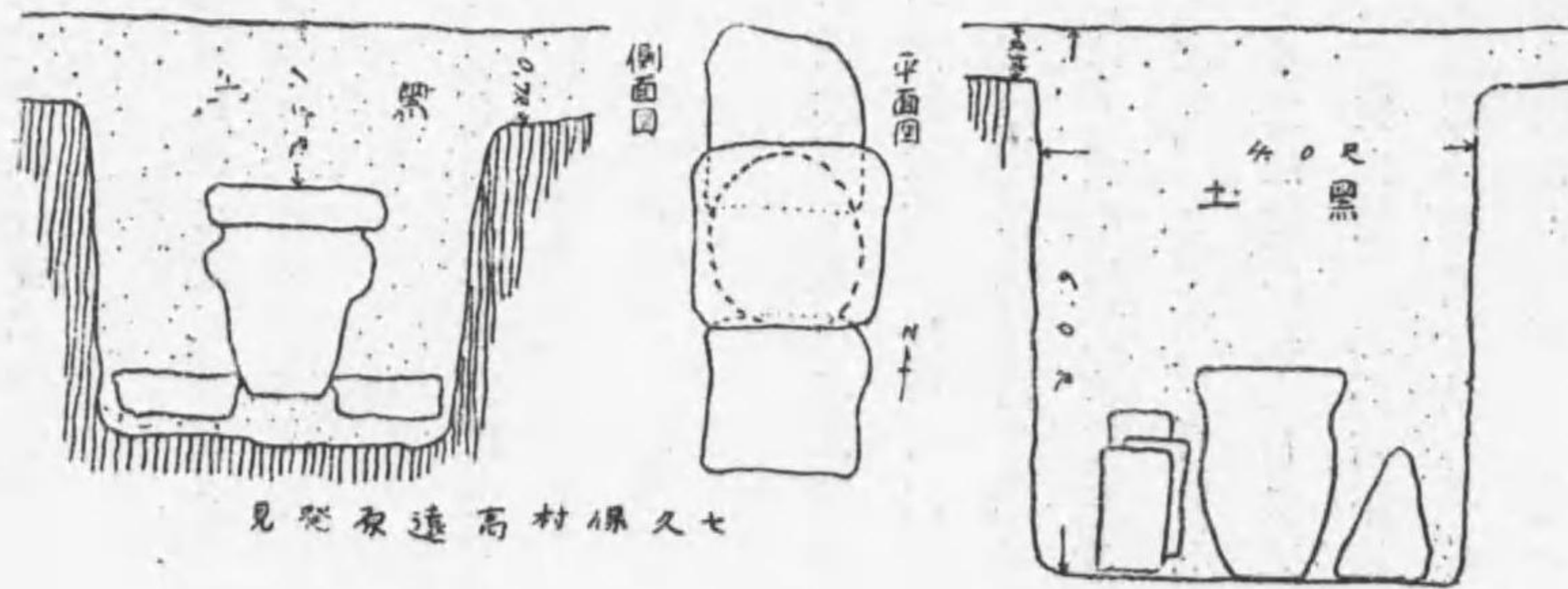
九 飯島村高尾遺跡

中田切川と與田切川との間に傘山の山脚が細長い丘陵地を作つて東へ走つてゐる。其鞍部に石器時代の遺跡がある。丁度高尾と町屋との境界附近である。附近の開墾で遺物の暴露される事が甚しい。かく細長い丘陵の鞍部に遺跡の存する例は本郡には地形上乏しいが、諏訪郡山浦地方の八ヶ嶽山麓には多く見る事が出来る。遺物の散布は單に鞍部上に限られずその兩側の低地にまで及んでゐる。圖版第三十の顔面把手は南側の低地に水田を作らんとして深さ一丈餘掘下げた時に出土したと云ふ。鞍部の一隅に第七圖の如き堅穴類似の遺物埋没地を發見した。其底部には打製石斧土器片炭層が層狀に露出してゐた。

一〇 七久保村高遠原遺跡

高遠原遺跡は天龍川の一支流前澤川の上流の地に當つて高臺の上を占め、地形的にはさしたる特徴を有てゐない。遺物の量が極めて豊富であつて本郡南西部に於ける有數の大遺跡地である。本遺跡に於て特記すべき一項がある。大正十四年四月の頃、同地中原にある三澤彌曾三氏畑地に於て、三澤氏が桑の植込みを行つた際、一土器を發見したが、其土器は第八圖の如く方形扁平の盤狀石二個の上に直立し、その口は同様の石を以つて覆つてあつたとの事である。然も是等の土器と盤狀石とは深さ四尺程掘込んだ穴の中に置かれてあつた。土器がかく石を伴ふの事實は先に『諏訪史』に多數の例を舉示した。土器は三澤氏が保存してゐたが、今は七久保小學校の所藏となり、石片も畑畔に放置してあつたのを小學校に運ばせた。

本郡内に於て土器が石片と伴出した著しき例は此外二遺跡にあつた。一は河南村金井出土の大土器が大石皿を蓋にして居り、他は飯島村田切中原の土器で石棒折三本と圓錐形の自然石とを伴つてゐた。田切の地は中田切川に沿ふ稍低濕の地であるが遺跡地となつてゐる。上記の土器は高遠原の場合と同様深さ六尺、徑四尺許の穴の中に石棒、自然石と竝立してあつた。



見發原遠高村保又七

見發切田村島飯

器土ふ伴を石然自 圖八第

(第八) 石棒折の内一個に就て見た所、輝石安山岩製と覺しく、現在長三寸五分、徑二寸九分内外を有す。他の二個も大同小異であつたと云ふ。

盤状石が種々なる用に供せられたらしい形跡は、諏訪に於ける事實に依て認められる所である。郡内諸遺跡にも勿論發見される事と思ふが、吾人は飯島村岩間上山のナツヤケ遺跡に於て見たに過ぎない。

高遠原の該土器發見地附近には、なほ此外に同様なる穴が往々に存し、炭灰が多量に含まれてゐると地人は語つてゐた。

一一 南向村日曾利遺跡



第九圖 日曾利及吉瀬附近地形圖

東南地方に遺跡の乏しい事は既記の如くであるが、その南端遺跡は此の南向村日曾利遺跡である。天龍川に急傾斜を以て迫る陣場山、裾には人類の居住に適するような場所が殆んどない。この中に日曾利及中澤村吉瀬の存する二地點が突出して天龍川を急折せしめ、其の突出地の上が稍平坦である所から、現在小聚落の發達を見る。石器時代人も亦この兩地點に依據して遺跡を止めて

ゐる。此の二地點は地形酷似するのみならず、發見遺物も互に通してゐる。圖版第六上段は對岸から日曾利遺跡を臨んだ寫眞である。日曾利及吉瀬兩遺跡に關して注意すべきは、石錘を多量に發見する事である。地形上隔離された然も、東方に山を負ふ此地に住居するには多少の理由が存しなくてはならない。漁撈に關係ありと思惟される石錘の發見は、此理由に答へて呉れるかと思ふ。即ち天龍川に於て漁を營む爲めに不便を忍んでかゝる地に來集したものであると。

一二 河南村金井遺跡

河南村上山田金井部落の存する附近一帯は、廣く平な丘陵地をなしてゐる。この丘陵地の北縁及西縁は急傾斜若しくは崖をなして三峰川沿岸の沖積地に屹立し、南は緩かなる傾斜を作つて高雄山に對してゐる。この臺地上一帯より夥しき土石器を發見し、この地方の一中心地たりし事を想像せしむるに充分である。かゝる大臺地遺跡は上記諸遺跡の何れにも見ない特殊地形である。この遺跡からは上述の如き石皿を蓋せ



第十圖 金井附近地形圖

る大土器を發見した。

一三 美篤村芦澤遺跡

高遠町を経て伊那町へ通ずる縣道杖突街道の工事の際、芦澤ゴウジラ垣外附近の開鑿で多くの土器類が発見された。位置は高遠町附近一帯にて三峰川北岸に迫る山が、漸く三峰川に遠ざかつて廣濶たる六道原の展開を見んとする場所にあたり、背後には山を負ひ、前面はかなりの傾斜を以て三峰川に臨んで居る。道路兩側の切取面には屢々堅穴跡が発見され、附近一帯の畑の一面には多量に土石器が散布してゐる。大正十四年七月道路北側の切取面に露出せる堅穴跡に就き調査を行つた。初め露出せる時は幅約十五尺、深さ中央にて三尺三寸の凹路を示してゐたが之を垂直に截つた所第十一圖の如くなつた。位置が道路に接する爲、堅穴全體の發掘は作業困難なるを以て露出面と直角に幅三尺許の溝を作つて掘進んだところ底面が次第に湖上する傾向あるを確めて中止した。發掘中採集した土器は多く厚手にして浮紋を有する。然るに此堅穴跡の西に接して民家のある場所にも曾て堅穴跡らしきもの現はれ、其處より採集せる土器類の今日保存されたるを見ると大部分前堅穴發見土器と趣きを異にしてゐる。かく相隣る二堅穴より夫々異りたる特徴を有する土器を出す事實は興味ある問題を提供するものである。



第一十圖 芦澤の堅穴跡見取圖

一四 朝日村山ノ神遺物埋没地

圖版第三右圖は朝日村山ノ神附近に露出せる遺物埋没地である。此地は上野川の谷の北壁、急傾斜地に生じたる崖地で到底住居址と考ふる事は出来ない。然も埋没状態には層序なく點々散在し、深度も一定しない。加之發見土器は殆んど小破片である。是等種々なる事情を綜合して考ふるに埋没地の上方に住居地があつたのが、天變地異に遭遇して下方に滑落したるか、流水の爲押流されて來て此地點に堆積したるか孰れか、兎に角自然の作用で遺跡が移動したものと推考される。

是と相似た遺跡は東箕輪村福澤にもあるが、此處では遺物の埋没が一定の層序をなして行はれ、發見遺物の狀況も他遺跡と大差ないのである。遺跡自身が大移動を行つたとも思はれない。以上諸遺跡は稍特異なる例のみを擇んだのであつて、之を以て全般を盡したのではない。遺跡の研究はなほ重ねる必要がある。

- 1 鳥居 『諏訪史第一卷』二七—三一頁。大正十三年
- 2 鳥居 『有史以前の跡を尋ねて』一四二頁。大正十四年
- 3 『諏訪史第一卷』所載の多くの例と他地方の諸例とを輯録して八幡が「遺跡にある自然石」と題し、人類學雜誌第四十卷第三、第四兩號に載せた。

第二編 遺物

第一章 緒論

考古學は古代人が製作使用玩弄した器物類の内今日迄て遺存して實視し得る物(遺物)を處理して演繹歸納を試み、體系を立て、一つの文化史を樹立する學である。即ち物を通じて古代人の生活の各側面を示現せんとするのである。殊に今茲に述べんとする先史時代に至つては一片の據るべき口碑傳説なく、又一葉の徵すべき文献も存しない。随つて遺物こそ唯一の資料である。

一つの文化史を樹立する學であると云ふ。然らば考古學は廣い意味の史學に包攝さるゝ事となる。けれども考古學は常に自然科學的方法を要求される。即ち殆んど無數とも云ふ可き多量の物(遺物)の間に法則を發見せんとする爲めには、虚心坦懷之が記述、分類を行はねばならないのである。かくして後初めて個々遺物の意義は闡明となり、之に對して研究者は初めて比較的適當な判斷を下し得るのである。若し此自然科學的方法による事なしに直ちに個々遺物に對して想像を逞うすれば、考古學は抽出せる特殊遺物を以つて補綴した一種の物語の範圍を出でない事となるであらう。『先づ汝の主觀を捨てよ』此言を考古學者は常に銘記すべきである。

吾人の研究の對象物は人工品である。自然物ではない。然らばその人工物に對して自然科學的研究法がどの程度迄て適用されるであらうか。果して此方法によつて自然界に於て認められる如き法則を人工品中に檢出し得るであらうか。吾人は其の可能なるを信ずるものである。

されば先づ第一に各種遺物を従来の分類法(形状用途を基とする)に據つて別ち、その各々に就いて能ふ限り明確精細なる記述を試みようとする。
かくて後初めて本郡先史時代遺物の大勢は明瞭となり、更に之を他地方のものと比較すれば本郡の考古學的位置は自づと決定される。是等諸種遺物に對する考察及文化史的意義に至つては後段結論の條下に詳述する所があらう。

第二章 各 論

第一 石 器

石鏃是最も普遍的な遺物で何處の遺跡でも發見出來、且つ數量も多い。此事實は石鏃が石器時代人の日常生活に密接な關係を持つてゐた事を暗々裡に示すものである。其全體の長さは次表に示す通りである。この表に用ひた材料は僅かに三百四十七個に過ぎずして、夥多なる本郡發見石鏃に比べるならば九牛の一毛にも及ばない。けれども之だけの材料で大勢は窺ひ得ることと思ふ。

石鏃全長表

順位	%	數量	長サ(寸)
	1	二	〇・二
	1	三	〇・三
V	8	二七	〇・四
III	16	五六	〇・五
II	17	六〇	〇・六
I	23	八一	〇・七
IV	16	五四	〇・八
VI	7	二四	〇・九
VII	5	一九	一・〇
	2	八	一・一
	1	五	一・二
	1	二	一・三
	1弱	一	一・四
	1	一	一・五
	1弱	一	一・六
	1弱	一	一・七
	1	二	一・八
	1弱	一	一・九
	1	一	二・〇
	1弱	一	二・一

即最小なるは二分に過ぎず、最大なるは二寸一分を超える。然して分量の最も多いのは七分内外の長さを有するもので全數の二十三パーセントを占め、六分五分八分と相繼ぎて多い。故に本郡發見の石鏃の通有の長さは五分より八分の間である。従つて四分以下は小形、九分以上は大形

のものとなし得べく、是等の範圍のものは製作使用する率が比較的少なかつた事が推察される。しかして後述の石鎗とは形状を同する爲めに大いさによつて截然とその分界を定める事は困難で、前表中の二寸一分のものなどは用途の上からは寧ろ石鎗に編入すべきものかとも考へられる。が弘く世界各地に出る石鏃に就いて見るならば其長さ二寸を超えるものは決して珍らしくない。さればとて六七分の長さを通例とする本郡の石鏃に於てかく飛び離れた大きさを有つものにはそこに何等か使用上の相違が潜在するのではないかと疑はれる。

形状は之を篋代のこを有せざるものと有するものとに二大別し、便宜上更に之を細別して九形式とした。次表は各形式を挙げ且つ各々の數量を示した。もとよりかゝる人工品を形状によつて分類せんとする時は必然的に或形式と他の形式との中間形も存するべく、又特異な形状を具へて何れにも屬させる事の出来ないものもあつて非常な困難に遭遇する。さればとてあらゆる形式を網羅せんとすれば分類は遂ひに不可能となる。又あらゆる形式を網羅したとてそこに何等の意義も存しない。そこで基本的形式を九つ設けて餘程特異な形を呈するものでも比較的親近な形式に隸屬せしめたのである。

石鏃形式分類表

計	%	數量	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	九形式
四三二	3	一三										五三〇
	6	三一										
	71	三七五										
	3	一三										
	一八	3										
	2	一一										
	5	二四										
	7	三八										
	1	三八										
八〇												

此表によつて見るとIIIの形式最も多く材料五三〇個の内三七五個は此形式に屬し百分率は實に七十一パーセントの高率を示す。次に篋代を缺く形式I・II・III・IV篋代を有する形式VI・VII・VIII・IX及び兩者の中間形とも見做し得べきVを夫々一括して比較して見るに第一者は四三二個、第二者は八〇個、第三者は一八個にて篋代を有せざるものが特に多い。

次に石鏃の石質に關しては統計的に表示する程度の研究を遂げてゐない。殆んど大部分が黒曜石であつて、之に少許の鐵硅石、硅石、砂岩等を混ざるに過ぎぬ。石鏃の如き用途に即して變化に乏しい石器に於ても多少地方的の相違が認められる場合がある。本郡發見品を諏訪若くは下伊那の地方と比較すれば大さ形状石質に於て何等の特質も認められぬ。殆んど全く共通した狀況を示してゐる。

二 石 鏃

本郡に於ける石鏃發見の量を略同一工程にて製作され得べき石鏃に比する時、餘りに僅少なるに驚かされる。これには多くの理由があるであらうが、石鏃の如く多數を要するものでなく、且つ一旦作ればかなり永く使用に堪えること、骨角牙製の鏃のあつたこと等が必ずしも多數製作する必要を招致しなかつた所以かと考へられる。骨質物の保存に適する貝塚がない本郡では骨角製の鏃などの發見を望むことは勿論不可能であるが、他地方の例よりして其の存在したことは推察し得る。

圖版第十五 4 の富縣村の諸例、同じく第九下段最下列の河南村竹垣外の諸例の如き著しいもの

である。第Vの石鏃(即ち所謂紡錘形の石鏃)中には多數代用品が存したであらう。石質は殆んど黒曜石とフリントに限られてゐる。

石鏃を形式で二大別すると上端の摘みの有無によつて有頭と無頭とになる。穿孔すべきものが石材である場合は無頭品は勿論の事、有頭品でさえも柄を附けなければ穿孔が困難である。若し木材獸皮類の如く比較的柔軟なものに穿孔しようとすれば有頭品では摘みを拇指と食指とで握れば事足りる。例へば圖版第十五4上列の三個は何れも摘みが大きく、握つて使用したものと考へられ、就中その兩側のは針部が曲がつてゐて決して柄を附して使用し得られない。

針部の長さは使用效果に關係を有つ。有頭石鏃にては摘部下端より尖端までを、無頭石鏃にては側縁の曲りから下方を各々針部の長さとして定めると、長さは大抵五分位である。石器に施された穿孔を見ると必ず兩側よりして中央で通じさせてゐる。この事に關しては『諏訪史』に稍詳述した。石器の孔の壁面に螺旋狀の擦痕があり或ひは鏡面の如く研磨されてゐるのは、摩擦能因に砂を利用したのによるのではないか。

1 摩擦能因に砂を利用することは亞米利加¹はHolmesが"Handbook of Aboriginal American Antiquities"に説いてゐる。

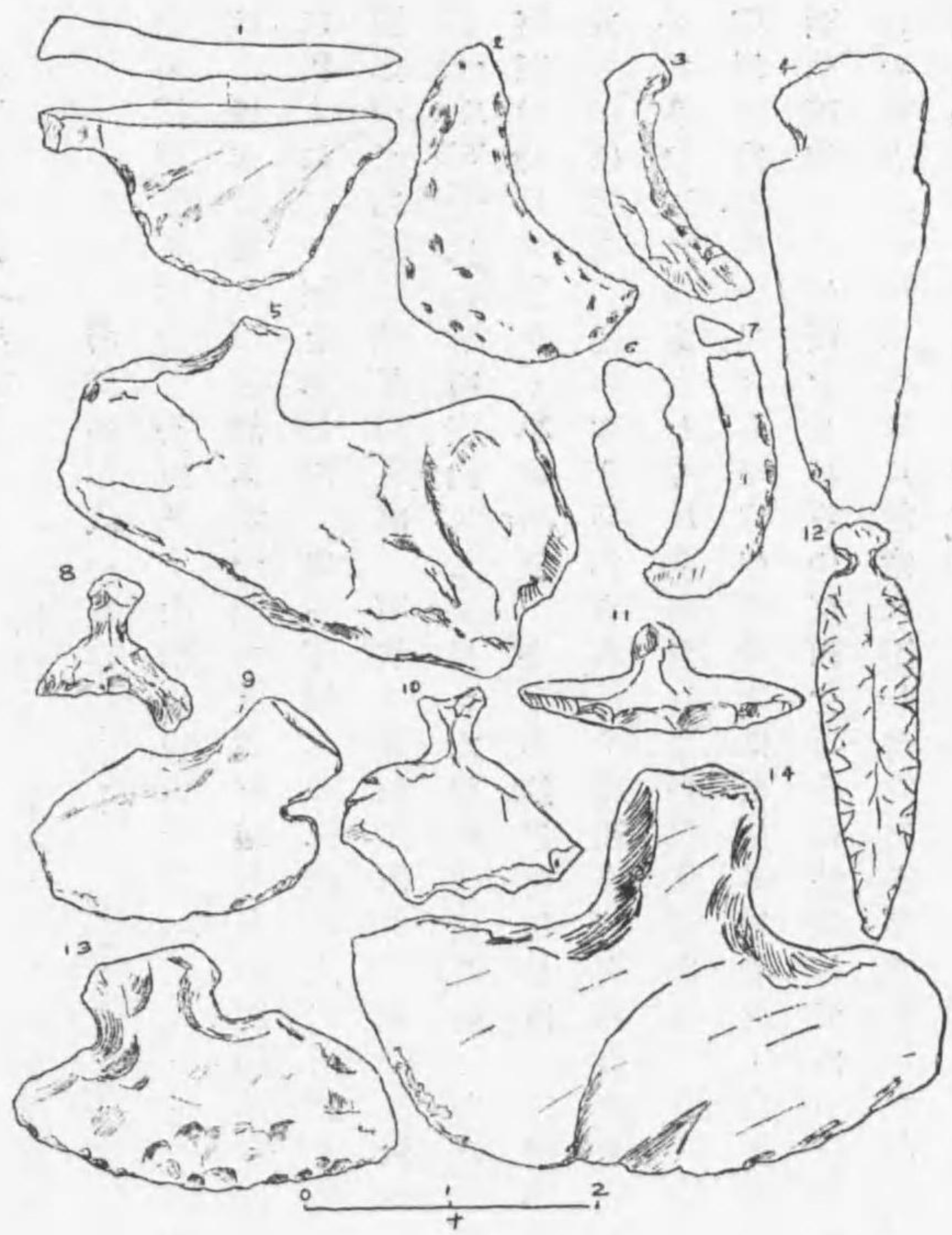
三 石 匙

石匙も相當に發見されてゐる。是等を撮部の有無によつて二大別し、更に撮部の有るものを所謂縦型と横型とに分つ。圖版第十右圖下より二列左側は撮部を缺く一例、同圖中央は縦型、爾餘は

横型に屬するものである。今蒐集してある郡内發見石匙の資料に就いて各形式を數量によつて對比させるならば次の通りである。

撮部無きもの	……………	三個
撮部有るもの	……………	二十二個
縦型	……………	二十二個
横型	……………	五十四個
特殊の形式のもの	……………	八個

即ち横型最も多量で全數八十七個中の六十二パーセントを占めてゐる。撮部を作出さないものはなほ多くある事と思ふが、一般の注意を逸し易い關係から採集された數が尠いのである。第十二圖1に其一例を示した。即ち半圓形の刃面の上部兩側を挺出せしめて把握若くは附柄の便を圖かつてある。發見地不詳。石質は燧石である。數例に就いていさゝか説明を試みる。同圖2(及圖版第十左圖最下段)は伊那町横山にて發見した黒曜石製石匙である。撮部の分化が顯著でない。同3は富縣村發見で等しく黒曜石製。全形が鎌形を呈し僅かに撮部を認め得る。撮部が明かに分岐したものは第十三圖の如き品がある。7は同上形式の上端を缺くもので同村發見である。3及7の如きは、東北地方若しくは北海道に多い形式である。4及6は所謂豎形に屬し、前者は飯島村本郷堤ヶ窪の出土品にして片岩質後者は七久保村北村天白より出て石英製である。堤ヶ窪のは片面は礫塊の自然面を止め、その反面を巧みに缺裂してある。8は横型の小さなもので黒曜石を用ひ特徴とする所は刃部に故意に附した突出の存する事である。發見地は東春近村。このような突出部は圖版第九の下段左寫真では倒さに置かれてゐるに示す河南村下山田、或は南箕輪村宮ノ



第 二十 圖 各 種 石 匙 (約二分の一)

出たものに刃の端から端までの距離四寸二分に達するのがある(同上圖14)かゝる大形のものには多く硬砂岩を用ひて作り、撮部は次第に増大して形式的には遂に後述打製石斧と聯絡して仕舞ふ。9は撮部が後退して傾くもの(飯島村小學校農場發見砂岩製)、11は撮部中央位に挺出し、刃部端正な

上南向村大草の諸遺跡發見の石匙に於ても認められるから畸形品と見るより使用の効果を助長する必要によつたものと考ふ可きであらう。5に示すは大形で刃部の長さ三寸五分を算する。而して圖に於て右側の肩部の隆起が著しい。この傾向は本郡發見の石匙中横型に屬するものには屢々認められる所て、一特徴に數へられる。なほ大形のものはいくつかが東春近村から

る精巧品(富縣村發見)である。

原料とする岩石は略々一定し硬砂岩、砂岩、黒曜石を主とする。然して形の大小によつて多少原料の選擇が行はれたらしく、大形のものには硬砂岩、中形のものには砂岩、小形のものには黒曜石、鐵矽石を用ひたようである。この觀察は當つてゐるかと思ふ。岩石選擇はその材料獲得の可能不



第 三十 圖 南 箕 輪 村 南 宮 殿 上 發 見 石 匙

可能と、工作法の相異に起因するものと思はれる。

本郡發見石匙を下伊那郡のものと比較して見る。下伊那發見石匙の形狀は矢張撮部有る横型最も多く七十八個中七十八パーセントを占め之に次ぐ縦型は僅かに十八パーセントに過ぎぬ。この點は本郡と相似る。然らば天龍川を溯りてその水源地なる諏訪盆地地方は如何。これ又相似た狀況にあるのである。比較の爲め數量にて示して見る。即ち七十三個に就いて調べたる結果撮部ある類中の横型最も多く全數の六十四パーセントを占め同じ縦型之に次ぎて二十七パーセントを占め略々上下伊那兩郡の割合と一致する。石質も吾人の觀察の限りでは略々共通した傾向を認め得た。今試みに天龍川を下つて遠江地方に入るならば石匙の發見數が俄かに減ずる事を知る。勿論該地方の調査の不充分なる事は明白であつて上流地方なる三郡の精細なるとは比較にならないのであるが、其數量の少なきことは之を言ひ得る。吾人の知れる範圍では天龍川が信遠國境を出て間もなく左方より合する一支流氣田川の流域なる遠江國周智郡氣多村氣田中森及び右方より合する津具川流

域の三河國設樂郡上津具村鞍舟並びに振草川流域の同郡下川村の諸遺跡より發見して中流山地帯に稍濃厚なる分布を認めるが更に下つて遠州の海岸平野に入れば殆んどその分布を見るなく僅かに河口に近き遠江國磐田郡西貝村貝塚發見の一個あるに過ぎない⁽³⁾。遠州の海岸平野に連なる東方駿河西方三河尾張に於ても亦寡少である。

近時中谷治宇二郎氏が全國の石匙に就いて綜合研究を試みて發表した所に隨ふと⁽⁴⁾石匙は北海道に特異なる地方色を見せ陸奥出羽が極度に發達した地方としなければならぬ。(中略)陸前信濃が數量種類の之に次ぐのも面白い……と云ふ。信濃が數量種類に富むのは同氏も云ふ如く比較的蒐集が普及してゐる結果とも考へ得る。けれどもその數量が事實に於て多いことは諏訪上下伊那三郡に於ける數年間の材料蒐集に於て業に百五十個採録してゐることも明かである。

1 鳥居龍藏『下伊那の先史及原史時代(圖版)』第二十四圖版及第二十五圖版

2 鳥居龍藏『諏訪史第一卷』

3 氣多村發見石匙は東京人類學雜誌九〇に土屋彦六氏の報告がある。撮部を有する横型に屬する。鞍舟遺跡に於ては多數發見あるものゝ如く夏目一平氏が考古學雜誌第十四卷第一號に報告する所に據ると十數個を發見し横型及縦型共に存し石質は蛋白石、サメカイト、珪石、玄武岩等よりなると云ふ。下川村發見品に關しては夏目一平、窪田五郎兩氏が同上誌第十五卷第一號に本郷村宇櫻平遺跡を報告してゐる中に記してゐる。西貝村貝塚より出た事は清野謙次博士の著『日本原人の研究(一五三頁)』に見える。

4 中谷治宇二郎『石匙に對する二三の考察』人類學雜誌第四十卷第四號

四 石 錘

本郡發見の石器中最も簡單に作られたものはこの石錘である。即ち礫に散亂する扁平にして楕圓形の礫石(大部分硬砂岩)を採つてその長い方の兩端を無雜作に打缺いて糸懸を作れば最早立派な石器となるのである。其大いさは略一定し、長徑二寸前後、短徑一寸五分前後、厚さ五分のものを普通とする⁽¹⁾。大きいものになると長徑三寸二分に達するものがあり、小さいものでは長徑一寸二分位のものがあるが是等は極く少數である。そして長徑の長短如何に拘らずその短徑が常に一寸五分前後、極く稀には二寸位のものがある⁽²⁾であり、厚さ五分平均であることは斯種石錘の特徴とする處である。

此形式の石錘にも多少の變化があつて、單に兩端を缺く丈でなく三隅^(河南村山)或は四隅^(南村其五例、上片桐村有平)を缺いたものもある。更に技巧を一步を進めたものには兩端を缺く代りに磨切つたものもある。^(河南村竹垣外二例、中澤村吉瀬一例)

茲に注目せねばならぬことは本郡に於ける此形式の石錘の分布である。發見地を一瞥するならば、先づ天龍川西にあつては赤穂村富士山上片桐村有平同原畑片桐村西原七久保村飯島村本郷同高尾同田切字町屋南箕輪村南殿宮ノ上の各遺跡、天龍東にあつては南向村日曾利中澤村吉瀬伊那村上ノ原東春近村駒形河南村小原同山田原同下山田竹垣外美和村黒河内和泉の各遺跡である。地理的に言へば南箕輪村宮ノ上を北局限として郡の南部地方に分布することが明かであり、地勢上から考へると上片桐片桐七久保飯島南箕輪南向中澤東春近の諸村は天龍川本流々域に屬し、東

春近の一部、河南美和の諸村は三峰川流域に屬する事を知る。此分布状態は本郡の南箕輪村以北によし二三の發見があつたとしても大勢を定めるものである。

此不分布地帯を過ぎつゝ天龍川を溯つて郡境の峡谷を過ぎ其の源なる諏訪湖沿岸に入れば石鍾は全く別型式に變換し、上伊那郡に於て見るが如き形式は非常に減少する。然もその大いさも上伊那の如く大きくなく且つ一般に細長くなつて來る。⁽³⁾ 然るに逆に天龍川を降つて下伊那郡に入ればこゝは上伊那南部の連續とも見るべき同形式の潤澤なる分布を見るのである。この分布帯は更に天龍川に沿ふて南下して三河北設樂郡本郷町字櫻平⁽⁴⁾、遠江磐田郡二俣町と飛々に、海岸平野殊に濱名湖沿岸なる濃厚分布地に連絡し、右折して三河國渥美半島の貝塚群を包容してゐる。⁽⁵⁾

最後に用途に關する二三の考説を掲げる。前述の如く本郡發見の石鍾と諏訪郡の夫とは別形式に屬するが、同性質の石器なる事は明白である。何が故に同性質の石器が一峡谷を境してかく形式的に相違を來したか、この問題は考古學的に興味ある問題である。今其の原因を三つに分つて考へて見る。其一は諏訪郡には適當な楕圓扁平な石に乏かつたのではないかと云ふ石材の關係からの考へてある。其二は各々の形式を使用した民衆の文化時間的或は空間的見地からの相違或は種族の系統の異なつてゐたからではないかと云ふ用途の關係からの考へてある。最後の第三は使用法に相異があつたのではないかと云ふ用途の關係からの考へてある。第一の考へは恐らく成立しない。と言ふのはかゝる礫石は諏訪湖に注ぐ上川、砥川、横河川に無盡の堆積を見るのである。第二の考へは随分考慮すべき餘地を残してゐるが一石鍾に對して直ちに使用者の文化の相違又は種族の相違を結び着けるには周到なる用意戒心を要すると思ふから可成避くべ

きである。第三の考へは比較的妥當穩健で、この見方を進めつゝ、他の遺物と併行させて研究するならば、或ひは第二の見解を確實に決定するに至るかも知れないのである。諏訪郡では石鍾は諏訪湖沿岸と上川流域に比較的多く隨つて石器時代當時の原始的漁獵は諏訪湖上川に於て行はれたと推考される。⁽⁶⁾ 本郡に於ては天龍川に主として行はれ三峰川に於ても幾分行はれたらしいことは既述分布の狀況から推察される。この兩地方の漁區を比較して見るに前者は湖沼小澤であり、後者は可成の大河である。従つて漁法並びに漁網に幾分の相違ありしこと想像に難くなく、勢ひ石鍾の上にも形式重量の相違を招くことを考ふるも無理ではない。只こゝにその漁法漁網に就いて何等知る可き證憑のないのを遺憾とする。兎に角使用上の相違に歸する一證左を挙げたのである。

此の形式の石鍾の短徑及厚さが略一定してゐることは既に述べた通りである。この點は石鍾は漁網の鍾として使用せしものなりと云ふ比較土俗學に立脚した吾人の考を更に明確にして呉れる。と云ふのは網の裾にこの石器を聯ね附けた時若し各々の石がその高さ或場合には短徑の距離或場合には厚みを異にしたならば網の裾に高低を生じ鍾としての使命を失ふが、その高さが一定して居れば網の裾はよく水平に河底に接し得るからである。又此石器は一つ一つ使つたものでなかつたと云ふ傍證として、遺跡によつては百以上も散布して居る事を挙げなければならぬ。例へば保科虎三郎氏が南向村日曾利、中澤村吉瀬から數十の石鍾を採集したる如き清野謙次博士が三河の渥美半島なる川地貝塚に於て三百餘個を得たるが如きよく遮個の説明となりはすまいか。分布上南箕輪村以北に之を見ないのはそこに何等かの理由が存するであらう。然し今

夫を説明する何等の手懸りもない。

- 1 K. Kishimune "Prehistoric Fishing in Japan" 1911. p. 356頁に Notched stone-sinkers の記録がある。それによると「此種の鏝は凡幅二〇―九〇ミリメートル、長さ三〇―一三〇ミリメートル、重量四―三二〇グラムある。」
- 2 鳥居 『諏訪史第一卷』大正十三年、一六四―二六六頁「石鏝と土鏝」の項参照。
- 3 前掲夏目實田兩氏報告
- 4 東大理学部植物學教室の渡邊清彦氏が採集された大井川流域なる榛原郡初倉村鎌塚の石鏝二十餘個もすべてこの形式のもので大きくも上伊那のものと大體一致する。
- 5 此地方に豊富なことは『日本石器時代人民遺物發見地名表』(參照(第四版)又は清野謙次氏「日本原人の研究」大正十四年)によつても窺はれる

五 凹 石

凹石は最も普通な石器として殆んど到處の石器時代遺跡地に發見することが出来る。多く楕圓形の礮石などをその儘用ゐてゐるが、往々その周縁を磨つて形を整へたのがある。故に形から分類すれば

- 不整形(主として自然石利用品)―多く細長い楕圓形又は卵圓形であるが正圓に近いものもある。
 - 整形(主として人為的加工品)―多く正圓形楕圓形石輪形等整つた形のものを含む。
- となる。圖版第十五の下列は前者の例で、上列は後者の例である。
- 次に窩によつて分つて見れば左の六種類になる。
- 大なる窩のもの(正圓形の石の片面に徑も深さも大きい窩がある)……………1



これを性質的用途を顧慮した意味の(1)に考へて右表下方に並べた各數字に屬する六類とした。

1は他の五類とは明かに區別する事の出来るもので窩の大きさから乳棒様のもので撞撃する際鐵敷の如く臺として用ひたと考へられる。(圖版第十五) 2・3・5・6は恐らく數の多少に關係なく同一用途に充てられたものなるべく、曩に『諏訪史』に於て發火用具ならんと斷じたが、夫と同時に今日石工が用ひる打鏝の如くにも用ひられたであらうと推測される。特に不整形の細長い形のものに於て其感が強い。この考説を確めるのに最も適當した事實をリディング氏が擧げてゐる。氏に據ると北米オレゴン州のクラウド河地方のウイントゥーン族の石器製作に際して凹石に似た有窩石器にて黒曜石を打缺くことがある、即ち左手掌面に黒曜石塊を載せ、其手の食指と中指の間に鹿角製の打棒を挟んでその打棒の先端は黒曜石の縁邊にあて右手に握る一ポンド程の河石を以つて打棒の他端を撃つて次第に石器とするのである。4に屬する凹石の大部分は多分この仲

間に入るであらうが中には松村瞭博士が云はれる槌石に當るものもあつて周縁が打撃の爲めに粗面部を現はした例が東箕輪村福澤から出てゐる。

若し此河石を幾回か同一目的に用ひるならば比較的力の大きく働く點に窩が生ずるのである。窩が多數存するのは毫もこの説明に抵觸せずむしろ持馴れた石を幾回かに渡つて使用することは自然である。而して多數窩の存する場合でも散在する事は全くない。一面では常に石の長軸上に一直線に竝列する。兩面の場合でも同様であつて一面の窩列は常に他面窩列と併行し、同一縦斷面上にある。之は恐らく石の重力との關係から自然に生じた現象であらう。

1 『諏訪史第一卷』一三八—一三三頁參照。

2 B. B. Redding, How Our Ancestors in the Stone age made their Implements, American nation, vol XIII, no. 11, 1879.

3 松村瞭 『琉球葦堂貝塚』大正九年一七一—二四頁石槌の項に詳し。

六 打製石斧

本郡内に於て發見される石器中、石鏃に次いで量の多いのは蓋し打製石斧であらう。かく量の多いのには三つの原因が考へられる。此石器が石器時代の當時一般的に普及し且つ種々なる用途に當てられたと思惟される事其原因の一である。此意味に於て研究者すらも動もすれば忽諸に附する礫片に等しき打製石斧は石器時代民衆の日常生活に不可離の關係を有してゐたのである。原料たるべき礫塊が天龍川或は其諸支流の積に集積してゐたから之を採取して加工製作するに多大の便宜を有してゐた事が原因の二である。且加工製作が比較的容易簡單で多數に生産

し得た事が原因の三である。第一の場合の一般的に普及してゐたと云ふことは殆んど凡ての遺跡に夥しく散亂する事によつて明かである。種々なる用途に當てられたであらうと云ふ想像は當時の生活状態に對する我々の概念により常識的にも起るけれども、その形状の多様であることが其間の消息を傳へる。今試みに蒐集した資料により形式分類を試み序でにその數量的關係を明示する爲め百分率を示す。

打製石斧形式分類表

形式	形式番號	數量	%
	I	四五	14
	II	六五	21
	III	八〇	26
	IV	二〇	6
	V	三〇	10
	VI	一八	6
	VII	四二	13
	VIII	一二	4

即形式をIよりVIIIまでの八型に分かつた。Iは圖版第十一1同下圖上列最左に示す如く大體長方形

を呈する。IIはIの不整形と見做すべく同上圖版7又は下圖下段最右の如き適例である。IIIはI或はIIの下方が幾分開いた物を一括し例へば同上圖版下圖下段右より二番目若くは圖版第十二上圖上段右の物の如きを屬さしめる。IVは下方刃部が圓き輪廓を描き恰も匙の如き形を呈するもので圖版第十一9に示すは一例である。Vは下方刃部が外側へ反り開き今日の斧に近い形である。VIはIV或はVに頭部を作出した圖版第十二上段下右の如きを指す。VIIは其頭部が極度に發達して刃部と同じ形を取るに至り一種の兩頭石斧となり、從來島田齋に似る所から島田型などと呼ばれた。圖版第十二の如きは典型的形態を具へたものである。VIIIは恰も石匙の如き形をな

し、只其の大きさが増したに過ぎない。VIに於ても同然である。是等八型の内最も多いのはIIIの形式で全數三百十二個中二十六パーセントを占めII・I・VII・Vと續く。

かく形状に種々なる分化を來す所以のものは前述の如く用途の相違に因る。如何となれば形状の相違は附柄法に相違を生じ、ひいて刃部の方向と柄の方向、刃部の柄に對する傾斜等に種々なる差別を生ずるから使用上各型自ら其効果を異にするに至り、經驗は各々の用途を選ぶに至る事必然だからである。

用途の考究に當つて形状と共に考ふべきは其大いさである。其重量と刃幅とに隨ひ大なるは荒削りの仕事に適し小なるは精緻な仕事に適するからである。茲に其型式・刃幅等を無視して長さの統計表を作つて見た。

打製石斧全長統計表

順位	%	數量	尺 度
IV	9	二八	三・〇 三・五
III	16	四五	四・〇 四・五
I	20	五七	五・〇 五・五 六・〇
II	19	五六	六・五 七・〇 七・五 八・〇 八・五 九・〇 九・五 一〇・〇 一〇・五
V	9	二六	二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇
VI	7	二一	一四 一〇 四 二 一 二 四 〇 二
	5	一四	
	3	一〇	
	1	四	

備考 本表と形式分類表に扱ひたる數量に相違あるは形態のみ明かにして尺度不明なるものと寸法のみ明白にして形式分明ならざるものあるによる。

此表が示す所に従ふと最も短いのは三寸から初まり、最も長いのは一尺五寸に達する。然して

最も數量の多いのは四寸から五寸迄の間で全數二百九十九個の内百五十八個即ち全體の五十五パーセントを占めてゐる。故に本郡に最も通有なるは長さ四寸から五寸迄の間と定める事が出来る。本郡打製石斧の一特徴として擧げ得るは、大形品の存在である。八寸から一尺五寸程の大きさを有つ打製石斧が郡内各地から屢々發見されるが、他の地方では極めて稀である。思ふに本郡は石材が豊富で容易に得られたのと、打製石斧製造が旺盛を極めたからである。夫等大形品は多くVIIの形式に屬する。(圖版第十) 七久保村北村及荒田を初め伊那町山寺カンゼン・南向村日曾利・赤穂村等から發見された。各々一尺前後の長さを有する。斯種の品は大形で、重量も重く、日用品として使用するにはいさゝか不自由を感ずるかと思はれる。加之其形態整美であるから或は石器時代人が製作技術の熟練に委せて實用品として、となくも作つたと考へられるのである。

1 打製石斧の形式分類は早く大野雲外氏に依つて全國的に試みられた。氏は三類五型に分ち、第一號としての形式を擧げ法馬形と呼び、第二號としての形式を擧げ撥形と呼べ、第三號を甲乙丙となして甲にIの形式を當て短冊形と稱へ、乙にはVIを、丙にはIIの一種を當てゝゐる。

七 磨製石斧

本郡に於て打製石斧の豊富に存在するは磨製石斧に代用せしめたからではないようである。磨製石斧(慣例に従ひ以下磨石斧と略す)も亦極めて多量に發見されるのでこの事は裏書き出来る。兩者の間に形状の類似、用途の近似はあつたとしても必ずやそこに製作の難易利鈍の懸隔等に基づく特質の相異は生じ、併用するの要が存したものと思はれる。されば打製であり磨製であるこ

とは何等製作者の所屬年代の前後、文化の相違、技術の優劣を示すものではない。従つて同一期に屬すると思惟さるゝ一遺跡から兩者共に出土するを常とするのである。

さてその多量なる本郡の磨石斧は形状も單純でなく種々なる態容を具へるのであるが、これを分類して見れば凡そ三種類となる。この三種類は吾人が『諏訪史第一卷』に於て試みた分類に合致するから其儘適用した。即ち

- I、長さは總じて細長い。形状は前後に於て左右に於て夫々均整なるを模式とする。断面は頭部から中央部までの間に於ては正圓形を呈する。従つて中央部までは棒状である。刃部は半圓形に附けられその幅は腹部より狭い。
- II、大きさは略々長さ二に對する腹幅一の如き割合を常とする。形状は前後に於て、左右に於て夫々端然たる均整を保つ。断面は所謂三味線胴、即ち各邊が丸みを帯びた長方形を呈する。刃部は銳利に所謂蛤刃となり、或ものは刃先がS字狀に輕微な曲りをなしてゐる。
- III、長さは幅に對して著しく長くはない。形状は前後に於て、左右に於て各々略均整であるがIIの如く端然としたものではない。断面は楕圓形を呈する。従つて厚さが厚い。刃部は一直線に近く、全體の態容が鈍重な感じを與へる。

勿論以上三種類の何れにも當嵌まらない形のものもある。けれども其大部分は三種類の内のどれかの變形か、さなくば二種類の中間的形式のものと考えられる。そして變形若くは中間的形式の内て多少共通した癖をもつたものもあるがこれを一括して一種類とする程の數量もないから三種類の何れにも直接隸屬させられないものを便宜IVとする。材料二百三十二個中の各型の數

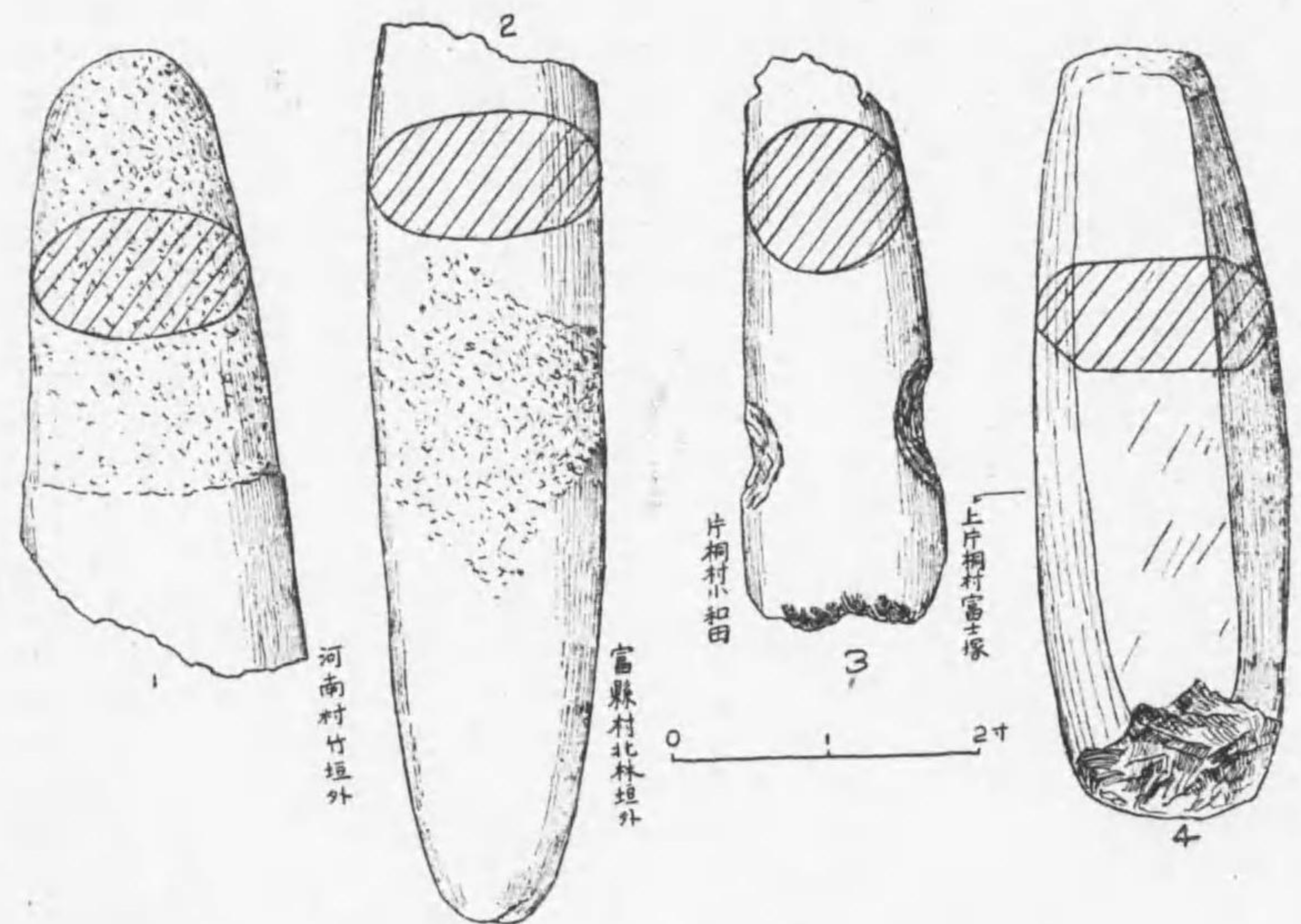
量的關係は次表に示す通りである。
磨製石斧分類統計表

順位	%	數量	型
(I)	50	一一五	I型
(II)	30	六九	II型
	6	一四	III型
	14	三四	IV(雜)

即第I型最も多く全體の五十パーセントを占め、次は第II型にて三十パーセント、第III型は遙かに少なく六パーセントに過ぎず、殘餘十四パーセントを雜となす。石質は第I型綠泥片岩、第II型は蛇紋岩、第III

型は閃綠岩と略々限定し得る。型式と石質に關して『諏訪史』に於て多少考慮する所あつて一面製作と石質と密接な關係があり、用途の複雑に基づく形式の分化も加はつて來る外、形式の地方的差異、使用者の嗜好の相違ある可きを指摘してゐいたが、茲には石の硬度による用途の相違が形式の變化を自然誘起するのに違ひないと云ふ一項を加えておく。

果して然らば本郡内に於て之等各形式は地方的差違一郡と云ふような狭い範圍であるから寧ろ遺跡的差違を示すか、この問題は引いて使用者の嗜好の相違云々をも決定すべき程主要である。資料が不足のため不幸にして今日の所この問題を解決し得るには到らない。けれども多少の遺跡的差違は認められるかのようにある。例へば等しく河南村に屬して遠からざる金井竹垣外兩遺跡に於て、前者は多く第I型を、後者は主として第II型を出して著しき對照をなすが如き、又東春近村田原は殆んど第I型に限られると云ふ如きは幾分其間の消息を物語るものではあるまいか。是等諸形式の磨石斧の間に多少なり石質分布の相異を認め得るが次に大いさは如何なる關係



第十四圖 磨石斧 (二分の一)

のが存するから之に就いていさゝか述べる
 こととする。本郡發見の有孔磨石斧は早く
 唐澤貞治郎氏に依て、東京人類學雜誌第九卷
 百一號に手良村丸山塚及殿村發見品を報ぜ
 られた。殿村出土品の形式はII型に屬し、長
 さ三寸二分、刃幅一寸五分、厚さ三分五厘あり
 口徑約五分の兩扶孔が上方に通つてゐる。
 (第十五圖)これと略々同形同大の有孔磨石斧が
 箕輪村福與、南箕輪村南殿宮ノ上兩遺跡から
 發見されてゐる。同じくII型に屬せしむ可
 き細長き磨石斧で、切斷縁に擦截溝の遺存す
 る例が東箕輪村長岡から出てゐる。第十五
 圖2に示すものが即ちそれである。蛇紋岩
 様の堅緻な石で作られ、全長三寸三分、上方に約
 二分五厘の口徑を有する兩扶孔を通じてあ
 る。この外唐澤氏が上記の報告に併せ報ぜ
 られた手良村丸山塚發見品は長さ九分の小
 石斧で孔が明けられてゐる。同じく孔はあ

を有するか。之は次表によつて略明確に知ることが出来る。この表は全長を具へた資料のみに
 據つた。刃部と全長との關係も考慮すべきではあるが、徒らに紛糾を招くばかりであるから單に
 全長表のみを掲げることとした。表の右側は寸を單位とする尺度、左側は數量である。

磨製石斧全長表

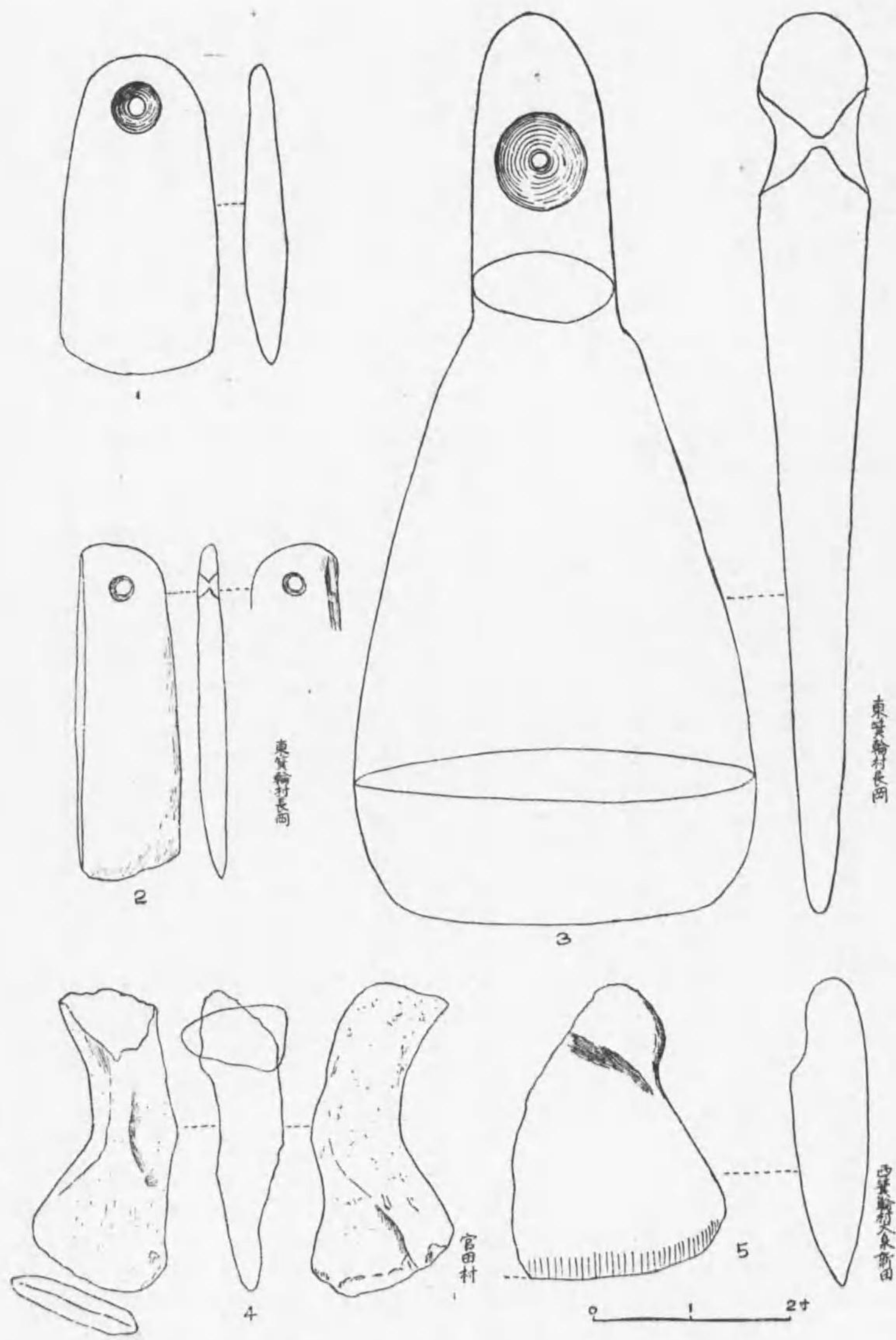
計	雜 (IV)	型 III	型 II	型 I	
1					1.3
1					1.5
1		2.0
1		2.5
1		3.0
1		3.5
1		4.0
1	4.5
1	5.0
1	5.5
1		6.0
1		6.5
1		7.0
1		7.5
1		8.0
1		8.5
1		9.0
1		9.5
1		10.0

此表に據つて見るとI型は三寸五分から一尺
 迄、II型は一寸三分から六寸五分まで、III型は三寸
 から六寸まで、IVは二寸から九寸までの間に存す
 る。即ちI型は比較的長き方に偏し、II型は之と
 反對に短き方に偏し、III型はその中位に存し、IVは
 散布的である。殊にI型の磨石斧は折れ易い石
 質でしか、全體が細長い爲め大形のものほど破
 損してゐるので、あらから事實は表に示された傾
 向に確實性を與へるものゝようである。されば
 少數例によるIII型及種々のものを含むIVは暫ら
 く之を措きI型とIIとの著しい對照は注意すべ
 きものである。美鷲村南割澤ノ田發見の石斧は
 多く、I型で大形である。遺跡の性質考定上注意
 すべき事柄である。

次にIVに集めた諸種の磨石斧中二三特殊のも

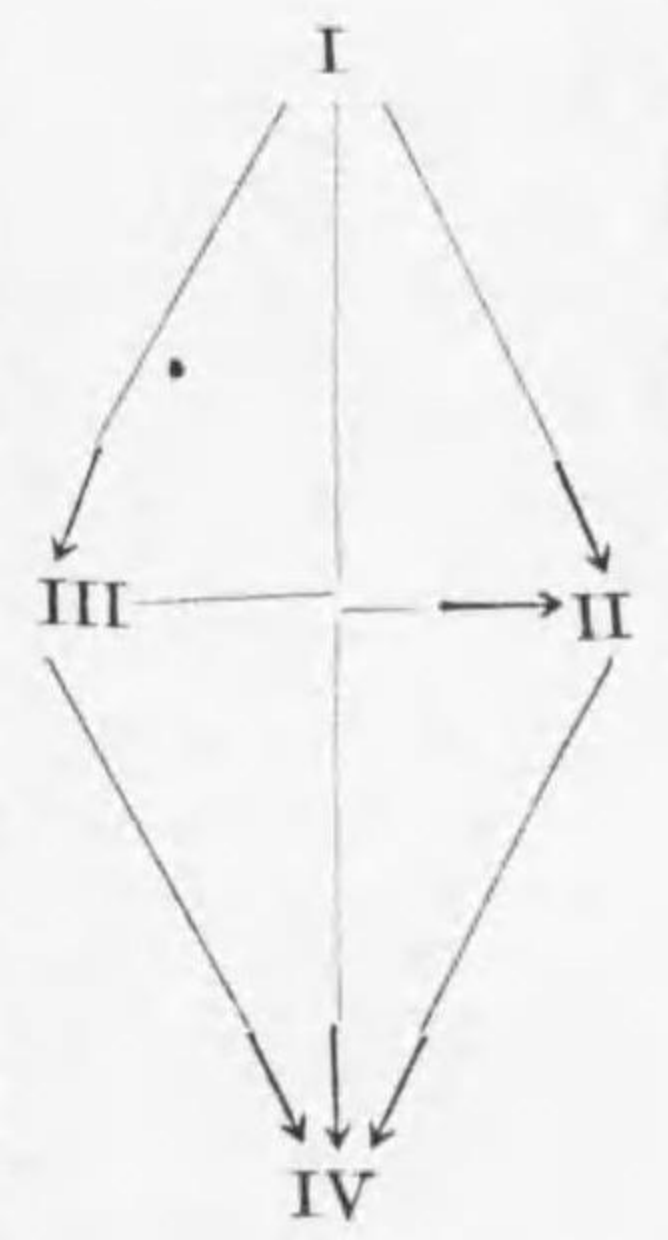
るが形状の特異な一例がある。それは圖版第十三及第十五圖³に出した物で全形飯杓子に似長さ九寸一分と云ふ大きな石器である。頭部は横断面が楕圓形で前後に各口徑約一寸、内徑約一分五厘の兩抉りの孔が通つてゐる。刃部に近づくに隨つて扁平になり其兩側縁は薄く刃状を呈する。然るに刃部に當る所は厚さ約一分の平面となりいさゝかも截斷の用をなさない。加之形其ものが石斧中に類例を見ない。故に嚴密に云へば石斧ではないかも知れない。そして發見地が東箕輪村長岡新田熊倉なる一ノ澤川上流河底であり、單獨出土であつたと云ふことなどが、この石器の特殊のものであることを想像せしむる。

前述せる長岡發見の有孔石斧の外に擦截溝のある磨石斧が手良村野口から出てゐる。II型の類型的型式に屬する石斧の既製品の片面に何の必要あつてか幅約一分五厘の溝を中央に縦につけてゐる。而も此磨石斧は刃部を態々磨つて平にしてある。其外特殊な磨石斧として第十五圖4・5の如きものがある。4は上端を缺くが現存の部分だけ見ると恰も今日の斧の如き形を呈してゐるから、恐らく今日の物と同一附柄法に依て使用したと思はれる。5も亦同前であらう。圖版第十三に示すは断面が略四角形で刃は鑿狀を呈してゐる所謂整形石斧である。I型磨石斧の内に全面に渡つて敲痕の遺存するのがある。曾て醫學博士中山平次郎氏が筑前國糸島郡今山發見の玄武岩製石斧の製作順序を考察して工程を四段に別ち、粗割・打裂・敲打・琢磨を経て完成するものならんとして第三工程に當る敲打の段階にて使用の可能なるを考へ、裂製・打製石斧と磨製石斧の外に敲製石斧とも呼ぶ可き一類ある可きを指摘された。¹⁾蓋し傾聽すべき説である。恐らく本郡發見の綠泥片岩製I型の石斧に敲痕を見るは製作の途次にあるものゝみではなく、所謂敲製石



第 五 十 圖 磨 製 石 斧 (二 分 一 大)

斧に該當するならんとも考へる。然るにかゝる敲痕が全面に互らず、局部的に認められる事が往々ある。第十四圖1の如く頭部に残るのと、2の如く腹部に残るのとがある。殊に前の例が多い。之は多分その個所に柄を附した爲め常に激衝、摩擦を蒙つたからである。と解釋される。同じく柄を附ける必要上の第二次的加工を施した二通の例がある。一は同上圖3の如くI型磨石斧の腹部の下方兩側を故意に打缺いたもので、之は恐らく柄を直接せしめる動機からでなく、柄ははるか上方の頭部に嵌まり、其部を固定せしめる爲めにこの缺部に索繩類を結び、それを柄の中途に緊繩する必要から生じたものならんかと思ふ。一は同上圖4の如く稍扁平なI型石斧の前後面(石の面を竝行せる面)を平たく擦減らしたもので、等しく附柄の必要に依る第二次的加工である。余未だ其理由に關しては的確な考察を有たない。本郡に此種の加工を施したるもの割合に多く、吾人の注意に上つたものだけでも尙他に七例ある。單に工作上から考へると左表の如き經過が磨製石斧製作に存し能ふ。



勿論之は考古學的比較土俗學的見地によるものでないから極めて根據薄弱であるが、かゝる徑路を経るが最も自然であると思惟される。さすればIVの如きは時間觀念を控除して考ふる時I→IIなる工作進化の道程を示す例ともなり得るのである。

今本郡の磨石斧を天龍川流域の他地方と比較するに多少事情を異にするものがあるようである。上流なる諏訪盆地々方では形式によつて其分量を見るとI II IIIの順序をとりIII型は本郡に

比し多量、略々本郡と合致するが、其各型式大いさに稍異なる所がある。即ち諏訪ではI型は「大體」大さが一定してゐて、長さ五六寸が普通である。(3)この點は本郡と大差ない。然るにII型は諏訪では「大いさ不定で、大形のもの七寸から八寸に及ぶものがあり、四寸五寸のものが最も多く小さなものになると一寸から七八分に至る。今日迄知られたる最大なもの上ノ段發見品の長さ一尺七寸、刃幅二寸七分、小なるものは長さ七分で小形のものも相當にある。」(4)のであつて本郡が一定してゐるのと趣きを異にする。III型の大いさは明かにしてあかなかつたが、本郡のものとは伯仲してゐる。更に下伊那郡に就ては近く發表する豫定なるも、略々本郡と相似たる狀況を示すものゝ様である。既刊せる「下伊那の先史及原史時代の圖版」に於ては採録に多少人爲を加へたから同郡全般の縮圖と見ることは不可能である。更に川を降つて遠江國に入るとこゝは全く第I型の濃厚分布地帯となる。

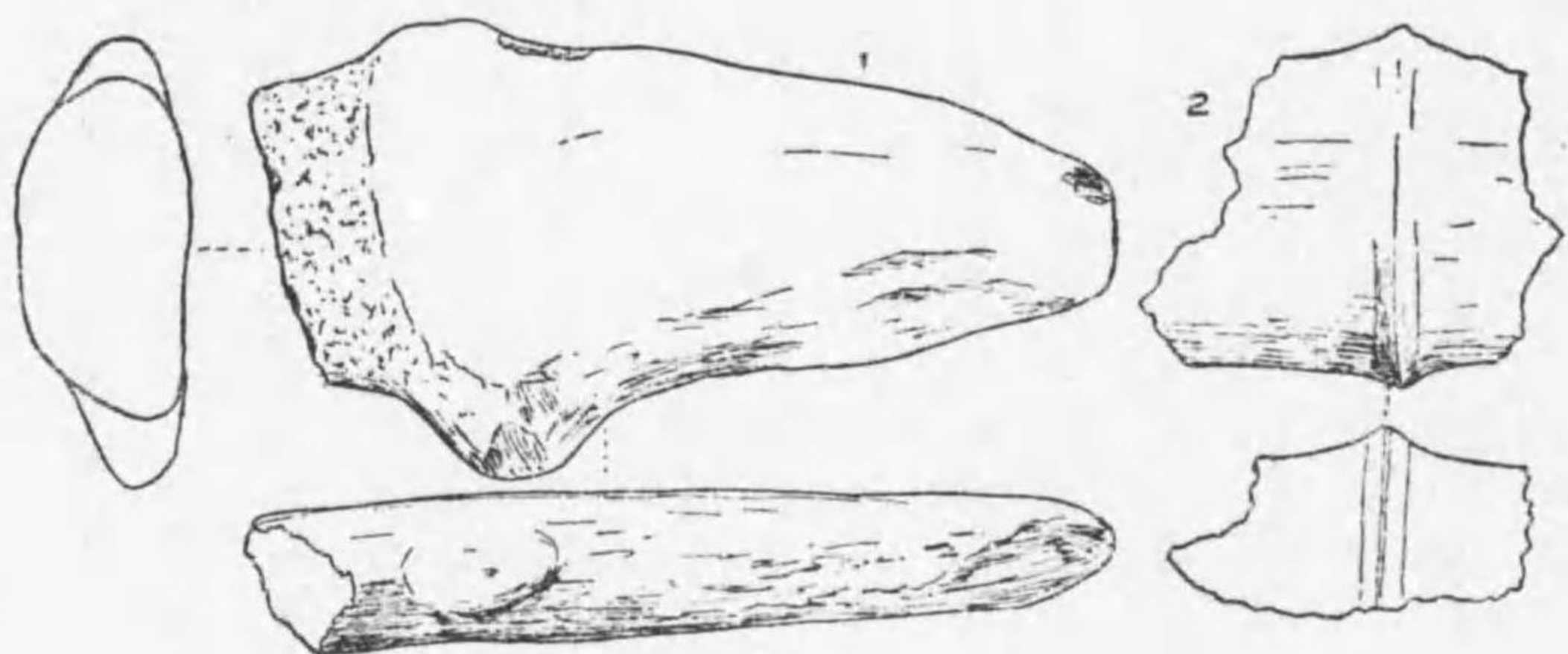
1 醫學博士中山平次郎「糸島郡今山に於ける石斧製造所址」考古學雜誌第十四卷第十四號及第十五卷第一號。
 2 吾人が『諏訪史第一卷』一四一頁に記した諏訪郡米澤村北大鹽駒形發見のI型石斧腹部の敲痕は片桐村小和田の夫より上方に位し、柄を附ける部位ならんと思はれる。磨製石斧を柄に固定させる一装置として索繩類を以て繋ぐ方法は現今未開人の間に屢々用ひられてゐる。
 3 前註書一三七頁

八 獨 鈞 石(兩頭石斧) 附兩頭石鈞

獨鈷石(兩頭石斧)及びそれに類する石器が六個発見せられたが、其内三個丈は普通の獨鈷石の形を具へてゐる。

完全に保存されたのは僅かに圖版第十四一だけである。此獨鈷石は朝日村上平出北原舊八幡社附近出土品。全長四寸八分、最大幅一寸九分、縊部の幅一寸四分あり、横断面は楕圓である。兩端彈丸狀に尖り、中央に縊はあるが縊に接して節の隆起を見ないのである。此獨鈷石は其兩端が刃の代りに嘴尖となつてゐる點に於て兩頭石斧とは云へない。是と同時に稍扁平なる獨鈷石及厚手の土器片が出たと云ふ。第十六圖一は東春近村白山神社の東方約三丁なる日向畑と稱する所から大正十一年五月六日に発見した獨鈷石の半截品である。石質は綠泥片岩らしい。未だ製作の途中にあつたものと覺しく縊部には敲痕が歴然と看取され、半面は荒割のまゝで研磨を加へてない。けれども刃部は定められ、縊部に接して上下へ隆起部を作出し、略々形は整つてゐる。蓋し全形は弧形を呈してゐたものなるべく、上縁は下縁よりカーヴが強い。現在長四寸三分、全長は蓋しこの丁度倍八寸五六分あつたであらう。隆起部に於ける上下の幅二寸二分、厚さ約七分。同圖二は河南村竹垣外出土の零細な破片に過ぎないが縊部と之に接する節狀隆起の一部の遺存によつて獨鈷石の破片なる事を知る。然も節狀隆起が顯著なのはよく獨鈷石の特徴を具備するものとして破片ながら貴重な資料たるを失はない。

圖版第十六二は異形ではあり且つ横断面が著しい三角形を呈するなどの點から今俄かに獨鈷石と同系列に入れ難いが、大體の形狀から推して或は獨鈷石と同性質のものでないかと考へられる。伊那富村下辰野北畑の發見品で、獨鈷石に於ける縊部は逆に鈔狀の隆起帯となつて環つてゐる。



第六十圖 獨鈷石 (二分の一)

る。全形三日月形を呈し、兩端は鈍き尖となつてゐる。全長約七寸、最大幅二寸七分、隆起帯の幅約一寸五分。約二十年前に同地三輪神社境内の地下約一尺のところから石棒石斧と共に發見したものであると云ふ。此外東春近村内發見打製石器の殘片の内には其形狀幾分獨鈷石に似て、兩側に角狀の突起が挺出してゐる物がある。石質は硬砂岩である。只獨鈷石らしからぬところは、突起から先端までの距離に比して幅が著しく廣いことである。即ち現在長三寸七分、最大幅三寸七分を示す。姑く擧げて後考を俟つ。この外朝日村上平出櫻垣外地下三尺の處に土器と共に發見されたと云ふ長さ約一尺一寸に及ぶ大石器は横断面が歪んだ圓形を呈するが中央部に縊目があると云ふから或は同種目的の爲めに使用されたものならんかと思ふ。

朝日村北原出土品の類例には諏訪郡下諏訪町土田發見のものがある。⁽¹⁾只土田のは縊部の幅が北原のより狭い點が異ふ。下伊那郡座光寺村大門原發見の獨鈷石も略々同類に加へられる。⁽²⁾東春近村日向畑發見品は適例に乏しいが吾人が『諏訪史』に掲げた茨城縣にて發見せるもの、⁽³⁾如き同系列に置くべきか。河南村竹垣外所出獨鈷石の類例に至つては數ふるに遑まないであらう。諏訪郡四賀村普門寺同郡上馬

場⁽¹⁾下伊那郡喬木村阿島北反田⁽²⁾西筑摩郡木曾村⁽³⁾の諸地方發見品の如き隣接地に於ける著しい例である。

かく本郡及其隣接地が各々獨鈷石を出し互ひに類似してゐるが天龍川下流地方には發見例が乏しく對照するに困難を感ずる。支流振草川流域なる三河國下川村⁽⁴⁾天龍川口なる磐田郡西貝村⁽⁵⁾西貝塚⁽⁶⁾及び天龍流域からは稍遠隔の地であるが三河國寶飯郡一宮村大字東上字炭焼⁽⁷⁾から發見ある由が學界に紹介されてゐるに過ぎない。

1 鳥居 『諏訪史第一卷』一四六—一四八頁獨鈷石の項參照。

2 同 『下伊那の先史及原史時代』(圖版)第二十二圖版。

3 夏目窪田兩氏前掲報文。

4 『日本石器時代人民遺物發見地名表』(第四版)

5 清野謙次『日本原人の研究』一一一頁

圖版第十四の3は片桐村小和田より發見し、矢張獨鈷石に類似した用法を有つ石器である。兩端は圓味を帯び、中央に縊部の設ありて、その兩側には各二條の節狀隆起線が環る。長さ三寸六分最大幅二寸最大厚一寸七分ある。即ち幅と厚さ相近く斷面は橢圓形を呈する。石質は綠泥片岩かと思はれる。類品が諏訪郡上諏訪町角間町⁽¹⁾から出てゐる。これは小和田發見品より簡單な形式で中央に縊が環るだけでその縁に節狀隆起を形成してゐない。角間町發見品の用途に關しては、マンロー氏の所説を擧げて錘の類かとも想像し資料の尠いのを慮かつて考察を避けたが、今小和田出土の石器に等しきを知つて獨鈷石と共通した使用法を執るものなることを推察し得た。

即ち小和田所出石器に於ける節狀隆起の存在は角間町の石器と純粹の獨鈷石とを形式的に連繫せしめ、同時に中央の縊部が共に必要の共通柄を中央に緊縛するに基づくものなることを明かにし得た。⁽²⁾ 只用途に於て小和田角間のものは主として撞撃に、普通の獨鈷石は截斷などに選ばれたであらうといふ點が異なる。それでこの石器は後述の石鎚と關係あるものと思惟されるから假に兩頭石鎚と名づける。此形式の石器は日本海沿岸地方に比較的多く例へば越前國坂井郡棗村⁽³⁾越後國中頸城郡潟町村等より發見されたが、系統を考察する上に注意を要する。

1 鳥居 『諏訪史第一卷』一六六—一六七頁參照。

2 この考方は早く甲野勇氏より聞いたことがあつた。なほ便宜上外國の例に求めると、W. H. Holmes 『Hand book of Aboriginal American Antiquities』1919に載せられた北アメリカ合衆國ミネソタ州なるパイプスト

ーン石切場から發見した Grooved sledge 或は Kidder & Guensay 『Archaeological explorations northeastern Arizona』1919に見える同國アリゾナ州東北部なる Kayenta 發見 hand の如きはよく類似してゐる。この二例は共に石工術に密接な關係が認められるから我兩頭石鎚の用途も或は其邊にあつたものかも知れない。

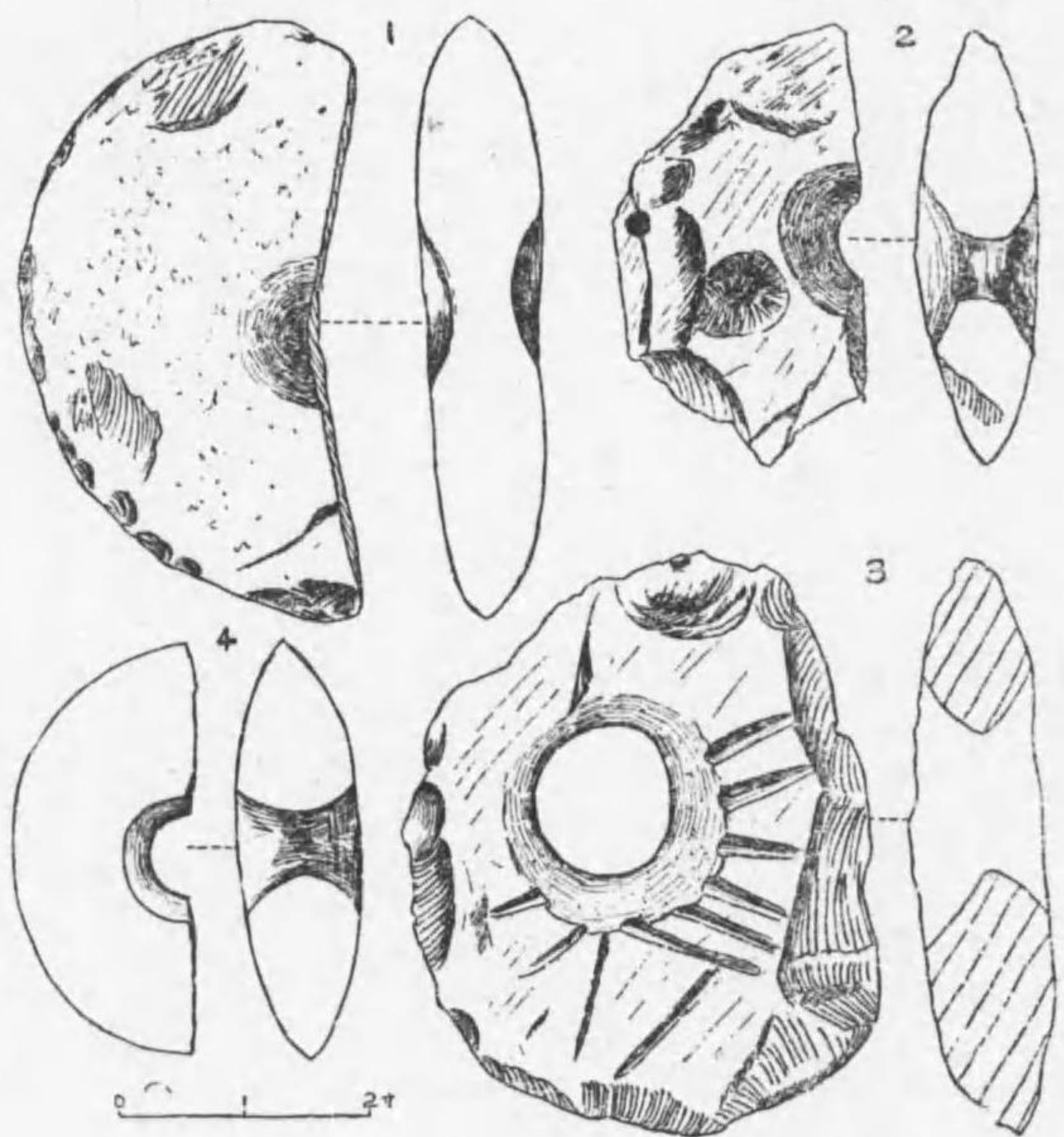
3 福井縣報告書

九 環 石

本郡内からは數個の環石が發見されてゐる。環石には閃綠岩の如く堅緻な石を用ひてその周縁を研磨して銳利な刃を附けた精巧なものと、硬砂岩の如く比較的剝裂し易き石を用ひて單に打裂を施したゞけの極く粗造なものと二通りある。それは恰も石斧に磨製品と打製品とがあるのと同様である。

磨製品は宮田村駒ヶ原(圖版第152)及び手良村下手良(同圖版1)から出土した二個がある。駒ヶ原の環石は歪んだ圓形長徑三寸五分短徑三寸を呈し略中央には徑九分の正圓孔が貫通してゐる。下手良發見の環石は半ば缺損してゐるが、研磨普く、周縁の刃は銳利であつて、極く精製品である。破損面にて直徑は三寸二分、孔の外徑一寸、内徑五分厚さ九分と計測される。断面は恰も破損面に該當する。第十七圖4に示す如くレンズ形を呈してゐる。中央孔は兩面から穿ち、中央に於て逼まつてゐる。

打製品は東箕輪村長岡、手良村下手良、富縣村河南村引持(圖版第153)、同山田竹垣外片桐村牧ヶ原、同横前の諸地方から出てゐる。長岡のものは小形で徑は短徑二寸長徑二寸四分に過ぎない。下手良のものは断面梯形を呈する分厚な造りで下面の直徑三寸内外、上面直徑二寸内外高さ一寸ある極めて蕪雜な作り方であるが、口徑約七分の中央孔は巧みに貫通してある。同種品は朝日村上平出櫻垣外から發見されてゐる。富縣村内發見品は形が大きく、従つて重量も相當にある。無細工な作方の爲めに全形が不整であるが、最も長い所で徑四寸五分あり、厚みは約一寸ある。兩面より穿つた中央孔は大きく開き外徑約二寸、内徑一寸二三分ある。而して孔の内壁には敲痕が點々として存在し穿孔法の推察を助ける。この環石に就いて注意すべきは片面に數條の溝が縱横に深く陰刻されてあることである。人為的の溝であることは明白であるが其目的に至つては全く知る由がない。竹垣外出土品は富縣村出土品と略同大であるが中央から半ばを失ふ。片桐村横前及牧ヶ原より出たのは硬砂岩製で直徑四寸五分、中央孔の口徑約一寸二分程にて共に中央から缺損してゐる。(第17圖參照)



石 環 圖七十第 (大-の分三)

次に打製石環の未製品と思はれる石片が河南村下山田竹垣外と東春近村榛原から發見された。即第十七圖1に示す様に兩面から敲進んだ孔が相合しない内に中央から割れた爲めに放棄せられたものと察せられる。他の竹垣外の二例も同様中央から割れてゐる。是等未製品は環石製作の方法を知るよい手懸りである。周縁は略々圓形を呈するが刃部は未だ作り出されてゐない。

今上圖の如く1、2、3、4と排列すれば精製品製作の順序は視ふ事が出来る。先づ扁平な圓石を採つてその中央に兩面から乳棒の様な敲石を以つて氣長に敲いて徐々に穴を深くして相通じさせる。しかして周縁を荒く打缺いて刃を付け、一步進めて全面を研磨し刃部を調べて愈々銳利にすると同時に中央孔を修正して端然とした形とする。此の最後の楷梯まで到達させるのは勞力と時間とを相當に要するから、途中中央孔と刃とが出来あがれば打裂したまゝのもの、即ち上記打製品としても

使用したものと考へられる。而して下手良発見の磨製品を初めとして、中央にて半截した例が多いのは製作の途次又は使用中孔がある爲比較的耐力のない直徑線に沿うて破摧する場合が多かつたからである。

倭て他地方との比較を試みんに、諏訪郡に於ては既に「諏訪史第一卷」に記した通り、米澤村北大鹽以下諸遺跡から発見してゐるが、多く破片や粗製品である。併し本郡のと大差がないのである。

然るに下伊那郡に於ては稍趣きを異にするかと思はれる。即ち本郡に近き市田村出¹⁾原の出土品は何等相異がないが、上郷村下黒田見城垣外及下川路正清寺附近の兩地²⁾発見品は中央孔極めて小さく且其穿孔法にも幾分の相異が認められるのである。天龍川を下つて三河遠江に入つては、未だ石環の発見された事を聞かない。

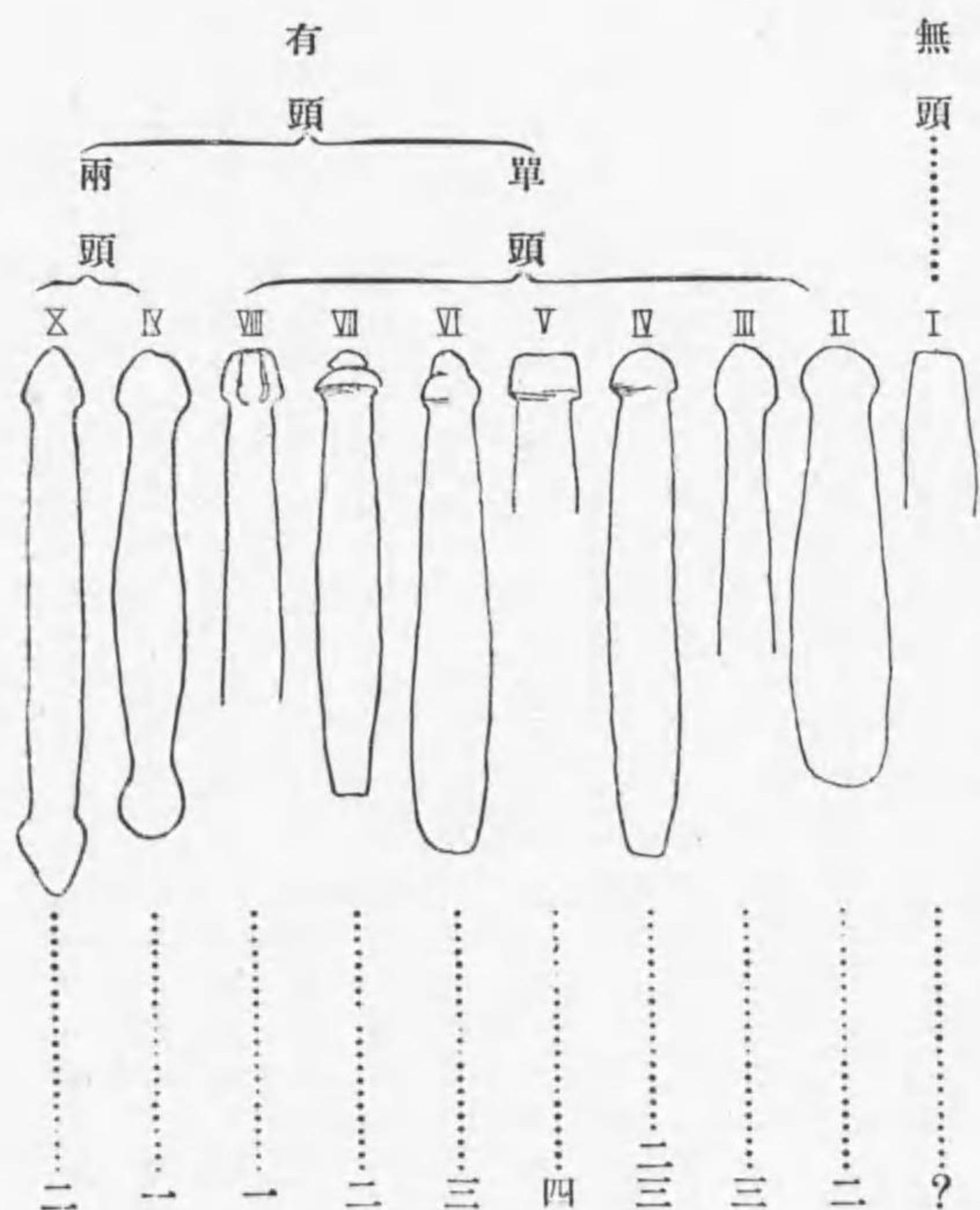
1 保科虎三郎氏の探集品あり。
2 鳥居『下伊那の先史及原史時代』圖版

一〇 石 棒

石棒を廣義に解すると狹義に解するとで範圍に廣狹あることは『諏訪史』に於て述べた通りである。即ち大形で比較的粗造の棒狀石器と小形で華奢作の刀狀石器等を總括して石棒と云ふ場合は廣義の解釋で、單に前者の大形粗造品のみを指して石棒と云ふ場合は狹義の呼方である。而して狹義に前者のみを石棒と呼ぶ時には他の刀狀石器は石劔と呼んで區別してゐる。こゝては狹義の石棒のみを述べるこゝとする。

本郡からは割合に多くの石棒が発見されてゐる。石質は安山岩が主で、まゝ綠泥片岩質を交へる。

先づ第一に形式に就て述べる。吾人は諏訪の資料に於て分類表を作製しておいたが、本郡の資料によれば必ずしも之と一致しないから獨立に本郡の材料のみを基礎として新に分類表を作る



ことゝした。なほ石棒には後世道祖神尊信の流行に際し、石器時代の石棒に類する石棒を盛んに造つた形跡があり、爲めに兩者混淆して區別し難いものがある。されば材料として採用するに當り多少任意の取捨を餘儀なくされた。先づ二大別して無頭と有頭の二種類とした。無頭と云ふのは只棒で先端の膨れ即ちこゝで云ふ頭部がないものを指すのであるが、完全な無頭石棒が発見されてゐないところを見ると、或ひは單頭石棒の頭でない方の破

片かとも疑はれる。

有頭類を更に單頭と兩頭に別つ。單頭とは棒の一端のみに膨隆部のあるを指し、兩頭とはその兩端にあるを指す。單頭は兩頭より遙かに數量に富む。單頭を細別して七とする。(II)頭部僅かに舛より溢れ出たるもの(圖版第10) (III)頭部發達して舛と全く離る(圖版1) (IV)發達せる頭部の形は次第に形を整へられて宛然茸の如き形となる(V)更に進みて頭頂は平らに截られ頭部圓壩形となる(VI) IVの形に一步進めてその頭部を二段となし(VII)更に夫を整へたるものとす。VIIIは別にIVの頭部を四分して南瓜の如き形を呈させた諸形式が之である。茲に掲げた順序は型的に其經過を示すものである。即ち原始形IIより順次VII或VIIIに到達すると考へられる。その傍證として下端頭部に反對の端の形を見るに原始形に擬したるIIは圓みを帶ぶるにVI VIIの如く後期型になると端然と截斷平滑にし、且つ全形を見ても前者の技術著しく稚拙なるに後者は精巧であつて顯著な對照をなす。只後者の中に往々に道祖神として近世製作したもののが含まれることなきかを確める必要があるから、こゝには出處の確實な例のみを採つた。兩頭の例は僅少なから三個を算へる。これを圓い頭と、やゝ尖れる頭とに分つ。以上X形式の内最も多いのはIV型に屬する石棒で全數の半分以上を占めてゐる(勿論破片もあるから兩頭石棒の折れたのが混入してゐないとも限らないが)。次に大きさに就いて述べる。第一に全形を完く保存する諸例を列挙すれば、

石棒計測表一(完形)

形式	發見地名	全長	頭部長	最大周長	最大幅徑	最小周長	最小幅徑	斷面	形
VI	宮田村中越西原	四・一五尺	〇・三二尺	一・三二尺	—	—	〇・三〇尺	略々	圓

形式	發見地名	全長	頭部長	最大周長	最大幅徑	最小周長	最小幅徑	斷面	形
IX	飯島村木郷堤窪	三・六七	〇・二三	一・二四	—	—	〇・八二	—	圓
X	不詳(矢彦神社藏)	二・七五	〇・二五	—	〇・四五	—	〇・三〇	—	長楕圓、扁平
VI	伊那町伊奈部	二・一〇	〇・一五	—	〇・四四	—	〇・〇九	—	圓
X	伊那宮村北大出三ツ谷	一・八八	〇・二〇	—	〇・四五	—	〇・三〇	—	圓
VI	宮田村駒ヶ原	一・八五	—	—	〇・二五	—	〇・一二	—	圓
X	四春近村助畑	一・五〇	—	—	〇・二七	—	〇・一一	—	圓

(最大及最小各徑ハ胴部ニ於テ)

破截してゐても全體の約三分の一以上を留めるものに就いて計測を行つた結果は次の如くである。

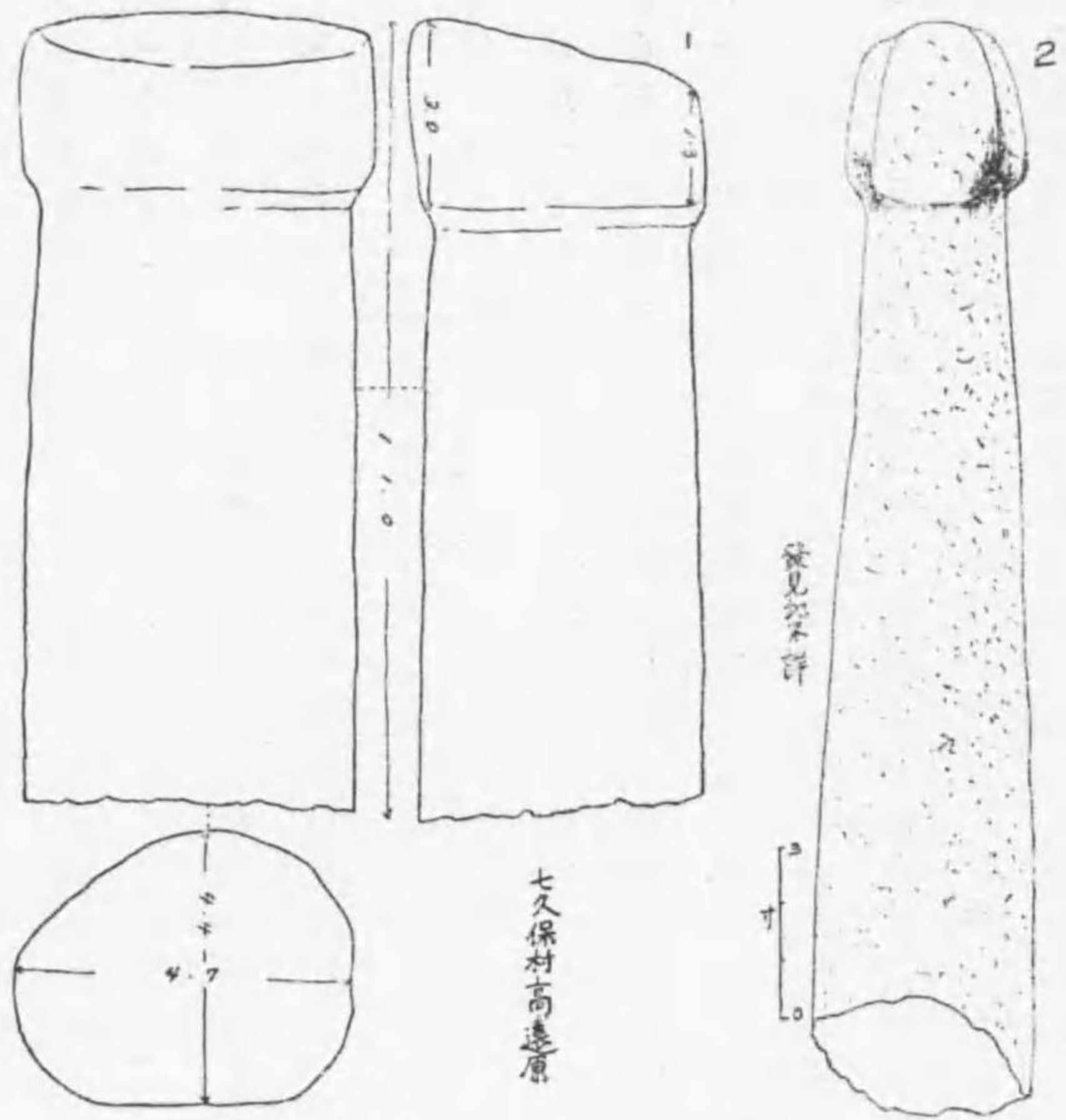
石棒計測表二(破片)

形式	發見地名	部位	現在長	頭長	現在最大幅徑	現在最小幅徑	斷面	形
IV	東箕輪村	頭	三・〇五尺	〇・三五	〇・四二	〇・二六	圓	圓
VIII	不詳(唐澤氏報文)	頭	一・九二	〇・七〇	〇・三九	—	圓	圓
I	東箕輪村	尾	一・六〇	〇・七〇	—	—	圓	圓
IV	箕輪村狐垣外	頭	一・六〇	〇・三〇	〇・六五	—	圓	圓
IV	東箕輪村	同	一・五〇	—	〇・五二	—	圓	圓
IV	伊那村伊那區木村	同	一・四八	—	〇・五二	—	圓	圓
I	三義村	尾	一・三〇	—	〇・四七	—	圓	圓
V	七久保村高遠原	頭	一・一〇	〇・〇八	〇・四七	—	圓	圓
V	西箕輪村中條	同	〇・九二	〇・三二	〇・三八	〇・二八	圓	圓

以下略

表によつて見ると最長なるは四尺一寸五分、最短なるは一尺五寸あり、最大幅徑の大なるものは七寸、最小幅徑の小なるものは九分である。唐澤貞治郎氏に據れば本郡内より長五尺徑五寸を有する石棒が発見されてゐると云ふ。發見地名、該石棒の所在等不明であるが、本郡發見石棒の最大なるものに推すことが出来る。而して東京帝國大學人類學教室の有する最大石棒武藏國西多摩郡青梅發見品の全長五尺三寸最大幅徑五寸あるのにはなほ及ばない。

石棒の形狀に就き二三注意すべき事項がある。分類表VIIIに擧げた形式の石棒は唐澤貞治郎氏が報道してゐられるものである。圖稿によつて見ると頭部を縦に區分(?)し、三つ(或は四つか)の膨隆を作つたものである(第十八圖?)。同氏は其の發見地を明示して居られぬが、此類手良宮田赤穂より出づと述べてゐる。此類の意味が明確でないが、恐らく石棒(同氏の石槌)と廣く云はれたもので必らずしも此型式のものを限定した意味ではなからうと思ふ。斯形式の石棒は武藏國作原郡下沼部からも出土してゐる。次に石棒は原則としては横斷面正圓或は楕圓形であるが、まゝ然らざるものがある。技術の未熟、製作の省略等から歪んだ形に造つたものは除き、一旦正圓又は楕圓形に仕上げたものを故意にその一面を研磨して平滑にしたものが之である。余の知つてゐるのは藤澤村北原神明神社にあるものと、七久保村高遠原から出土したものとの二例に過ぎぬが、恐らくなほ多數あるであらう。この平滑面を作る意義に關しては『諏訪史第一卷』に臆測を述べた通りである。高遠原發見の石棒は管に一面を平滑としたのみでなく第十八圖1の如く頭頂が一方に傾斜してゐる。この石棒に酷似する類品が飛騨國吉城郡國府村から發見された。石棒はその大さ形狀より推しても他の小石器例へば石鏃、石匙の如きものとは大いに趣きを異



第十圖 石棒の圖

更に深さ六尺徑四尺程の黒土の陥没があり、その底に土器と圓錐形の自然石一個と石棒の折三本が並列して立つてゐたと云ふ。黒土の陥没は人為的に穿つた穴に行はれたものと推斷される。而して其石棒折三本の内一は輝石安山岩製で長三寸五分徑三寸内外横斷面略々正圓形を呈する。他の二個は之より稍細いのと、太いのとあつたと云ふ。恐らく同一個體に屬するものであらう。

にし出土品の數量も石鏃、石斧等に比して極めて僅少であるから特殊の遺物なることは推察出来る。只遺憾なのは、發見の動機が殆んど偶然であつた爲、出土當時の状況等に就いて詳しく知ることが出来ない事である。圖版第十七1の宮田村中越西原出土石棒は大正元年頃の發見で、發見者の談を聞くと現在桑畑になつてゐる場所、地下約一尺の深さの所に南北の方向に横はり、その東方約十間の所には土器が三個集まつてゐたと云ふ。其三個土器の内の一は圖版第二十五6に示す大土器である。又飯り島村田切中原では現在の表土約五寸よ

最後に本郡發見の石棒と諏訪並びに下伊那の夫との關係に就き一瞥する。諏訪にも本郡と殆んど相等しい程度に發見されているが、完全に保存された遺品は本郡程出てゐない。今次の分類に於けるIV「諏訪史第一卷」にては笠形とすが多數を占めてゐること又本郡と同狀況である。諏訪郡下諏訪町前田發見の石棒が異形であつてその類品が日本海沿岸地方に出土する事の多いことは既に指摘してゐいたが本郡伊那宮村北大出三ツ谷出土品(圖版第十七)も亦形に於て同形式に屬するものゝ如く系統考察上の一資料とし得る。なほ同形式の石棒が河南村勝間堀なる「みしやご様」として祀られてゐるがこれは技術手法に於て後世の製作にあらざるなきかの疑ひが存する。下伊那も略々相等しき狀況にあることは既に上梓せる「下伊那の先史及原史時代」(圖版)に徴して明かである。

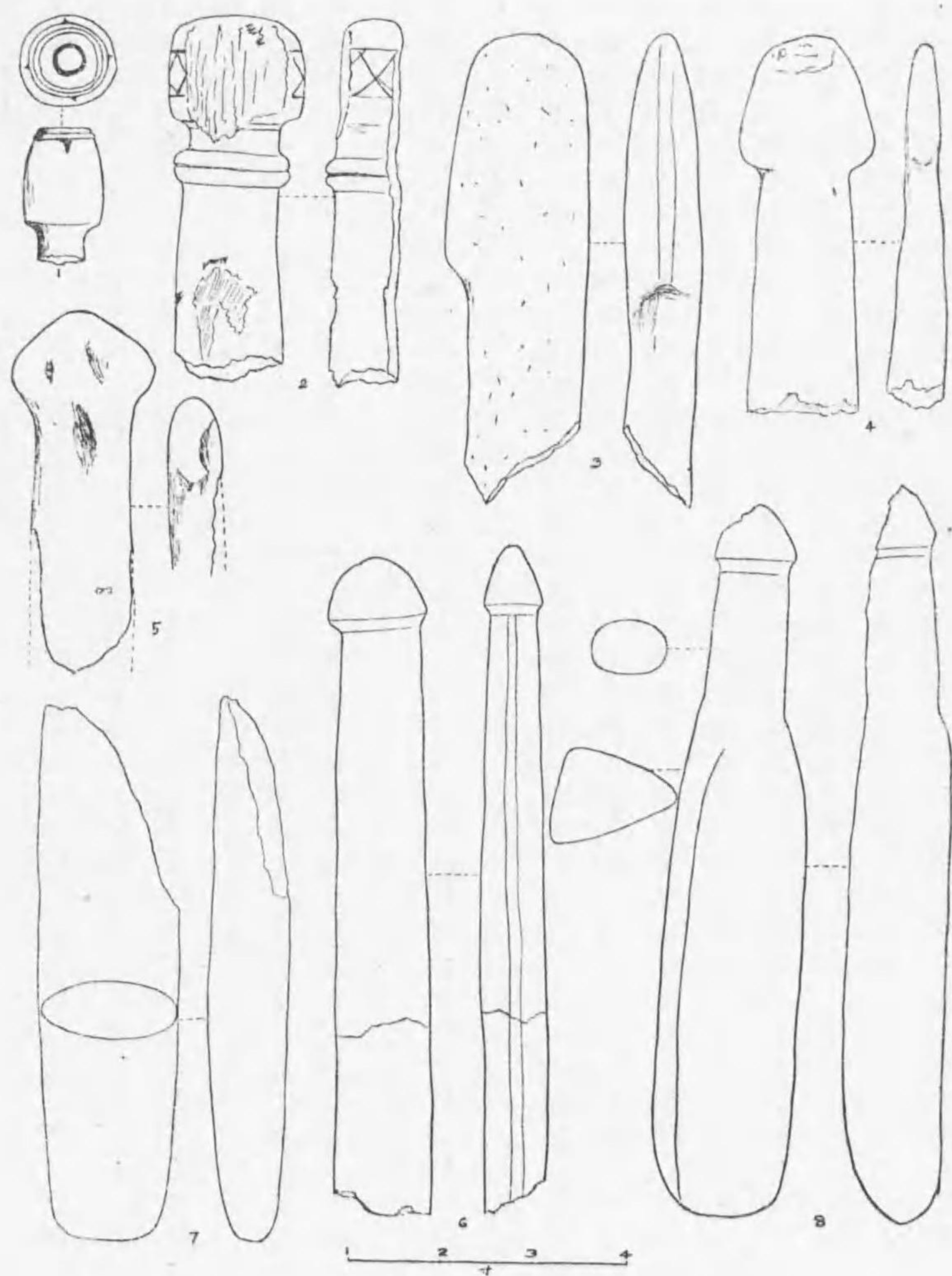
一 石 劍

本郡からは少ないながらも石劍が發見され、しかもその形式が幾種類かあつて他地方の石劍と比較研究する時興味深いものがある。由來石劍は廣義の石棒中に含ませて來た程であつて前述の石棒とは可成近接した關係を有つものである。従つて分類上截然と區分する事が困難な場合を勘しとせぬ。例へば石棒の項に記した伊那町伊奈部發見品の如き、長さこそ大なれ、著しく扁平で石劍的要素を加味せるものである。されば茲には從來の見解に基き小形で華奢造りのものを輯録することとする。

石劍に於ても無頭有頭の別がある。無頭石劍は本郡から二例出てゐる。一例は圖版第十八に示すものにして全形ほと劍形を呈するが側縁に刃などの裝置がない。長さ九寸ある。他の一例は昨夏の發掘により北大出神明神社附近堅穴から出土の状態は正確で石劍より寧ろ石刀なる稱呼に沿ふ扁平で刀狀を呈する石器は東北地方に屢々發見される所である。されば有頭石斧の分類としては石刀的石劍即著しく扁平にして刀狀を呈する類と、石棒的石劍即ち横断面圓形或は楕圓形にして棒狀を呈する類とに二大別し得る。

横断面が圓形又は楕圓形を呈する石棒的石劍は數例發見されてゐる。其二三を圖示し就て説明を加へる。第十九圖1は断面正圓に近い石劍の頭部のみ遺存したので、頭形楕に似る。上縁に沿ふて沈彫紋を環らし上面にも環狀の沈彫を加へてある。頭部一寸、最大徑一寸弱あり、綠泥片岩かと思はれる綠色の石で表面は研磨してある。同じく頭部に彫紋ある例を上圖2及び圖版第十七に掲げた。これも亦破片ではあるが全形を推すに難くない。他地方發見の類品に徴して多分兩頭であつたらうと推測する。寧ろ石棒の方に編入すべきものかも知れない。横断面に楕圓形を呈し、彫紋ある頭部の下方約三分の所に鐮狀の突起帯がある。頭部の彫刻は水平二線間に斜行の格子紋を挟んだ紋様で、頭部の根元にも微かに一線が見え、更らに突起帯には深い溝線を環らせてある。頭部の長さ一寸二分、幅一寸五分、身の最大幅徑一寸二分ある。3は何等裝飾なき頭部を有する綠泥片岩製の破片で、横断面は楕圓形である。上記三例は悉く河南村下山田竹垣外に於ける發見品で、此外本遺跡からは同種石劍破片三個出てゐる。

横断面が扁平で刃と脊があり幾分曲折した石刀的石劍と稱した物の典型的な例としては圖版第十八の2の小野村發見品がある。同上圖4以下はこの式に屬する。4は飯島村高尾發見の頭部



九六

（大一の分三約）劍石種各圖九十第

破片7は美蔦村アダシノ發見の尻部破片、5、6は共に南箕輪村鹽ノ井發見の頭部破片、8は片桐村小和田發見の完形品、多く綠泥片岩質の石を用ひてゐる。6は特に整美である。8は稍異形で頭頸身の三部に分れ、頸部の横断面は楕圓、身は三角形を呈し、三角形の最小邊は脊、その對角は刃の如き形を執つて石劍の語義に叶ふごとき形を示してゐる。全長一尺八寸。全國的にも類例に乏しい貴重な材料である。この外南箕輪村北殿、同天白等からも破片が出てゐる。

此外横断面正圓形に近い細長い型式のものが赤穂村から二個發見されてゐる。又反りがあつて刃部も生じた石刀的の石劍は小野村から破片が一個出てゐる。前述圖版第十八に示すものが即ちそれである。

こゝに注意すべきは郡内に於ける石劍の分布である。河南村竹ノ垣外よりは六點、南箕輪村鹽ノ井より二點、北殿及天白より各一點、合せて四點を出したる外、自然地理學的には當然天龍川流域に含まれ上伊那に屬すべき東筑摩郡筑摩地村荒神畑より四點を發見したる如く、比較的密集せる状態を示す點が即ち之である。

上流諏訪地方は數量に於て本郡と伯仲するが形式は本郡に比して稍複雑なりと考へられる。且完品を數個有つ。吾人は『諏訪史』に於て同郡長地村横川發見の石棒の零細なる破片を目して成興野型と呼んだが、竹垣外出土品第十九圖とは同型に屬すること更に明確であつて殆んど疑を存しない。次に下伊那に入れば同様に分布を見、完品も數個發見されてゐる。竹垣外發見石劍頭部の斜行格子紋に似た彫刻紋様は同郡根羽發見の石劍頭部に認められる。

三河遠江地方に入つても依然分布し、三河國櫻平遺跡、遠江國濱名郡積志村有玉同郡入野村峴塚

同雄踏村山崎長者平等の諸遺跡から発見されてゐる。是等天龍川下流地方の石劔は吾等の知れる限りでは多く粗製品で頭部の彫刻なども無い。この點は上流地方と趣きを異にすると云はねばならぬ。

最後に上述諸型式の石劔の何れにも屬せしめることの出来ない特殊な石器が二點ある。其形狀から察して用途は必らずしも合致しなくても石劔なる稱呼には適當なものである。其一は河南村竹垣外より出土した。圖版第十八に示す如く、廣い身と狭い基部との分界が著しく、全形恰も劔の如き形狀を呈する。比較的扁平で側面から見ると略々一直線である。他の方は昨年七月委員等が伊那富村北大出神明神社境内の堅穴を發掘して得た石器である。(同上圖版3)圖版第三左は其出土の狀態を示す。長さ三寸五分、幅八分、横断面は菱形を呈する。

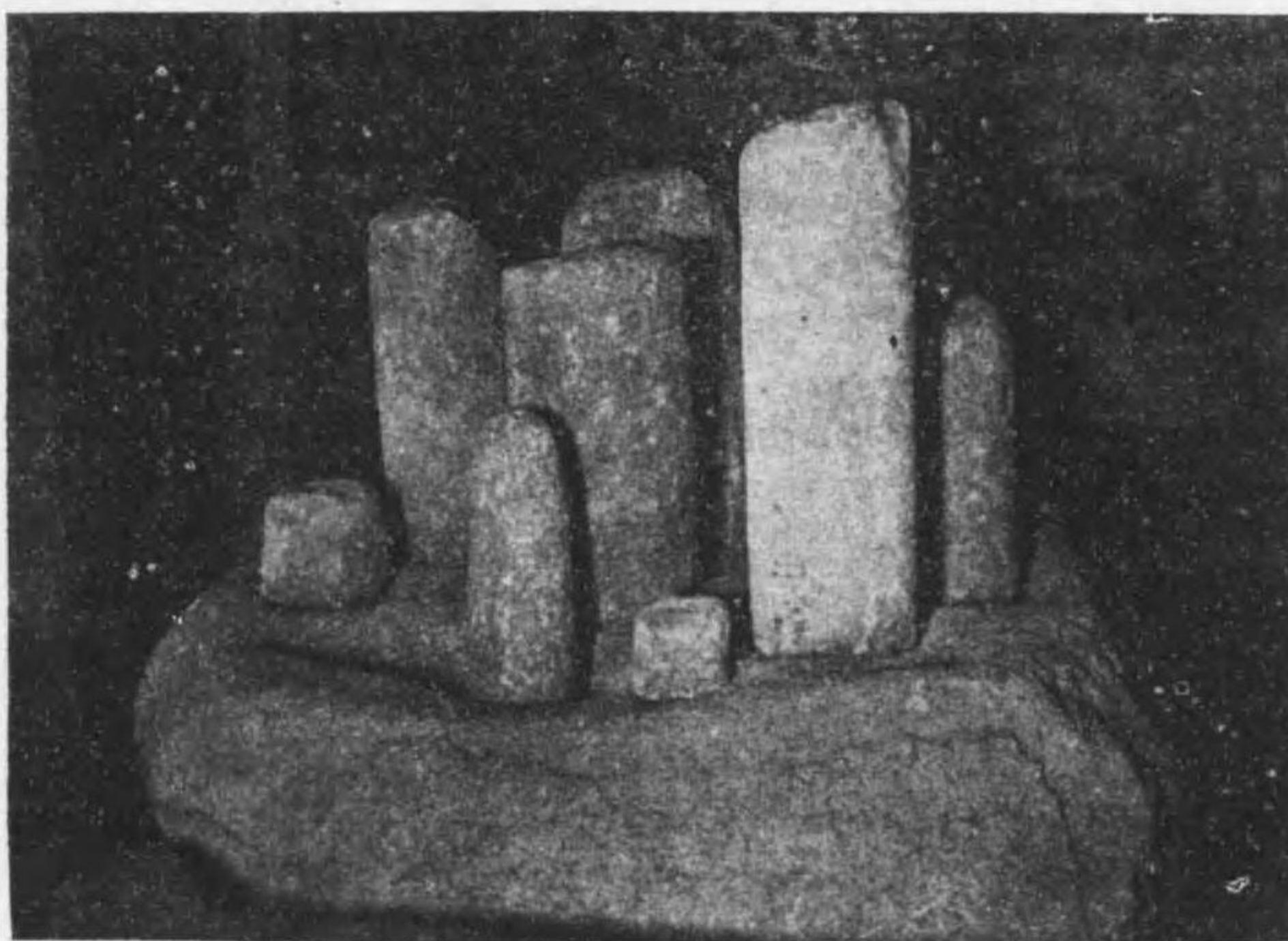
- 1 『諏訪史第一卷』二五一頁參照
- 2 鳥居下伊那の先史及原史時代『先第三十圖版に石劔完形品、破片合せて十一個を掲げた。
- 3 夏目窪田兩氏前掲報告は破片四點の發見を傳へ内一は双あるものを擧げてゐる。
- 4 余等が濱松中學校にて實見せるは断面楕圓形を呈する石棒の石劔の小造りのものであつた。
- 5 舘塚貝塚の石劔に關しては若林勝邦氏が東京人類學會雜誌七八號に小石棒として記載して居る。東京大學人類學教室には同貝塚發見品が二點ある。共に破片で綠泥片岩製一は比較的扁平で僅かに頭部を分化せしめ、身が俄かに張つてゐる、他の一は断面楕圓の細長い類である。濱松中學校に藏する同所出土品は前者の型式の形整へるものである。其外清野博士も採集してゐられる由である。
- 6 5 所出若林氏報告に見える。

一一一 石 白

本郡で發見された石白は今のところ一個だけである。其石白は中箕輪村松島なる臼杵神社本



社 神 杵 白 圖十二第



棒石と白石の社神杵白 圖一十二第

殿の下に多數の石棒と共に安置され神體として尊拜されてゐる。臼杵神社なる名稱も亦實に茲に發するものゝやうである。この石白及こ

れに伴ふ石棒の多くはその製作手法を観察するに石器時代のものなる事殆んど疑ひない。現在は臼面を水平の位置に保たしめ、その上に石棒片を林立してゐるが、勿論之は臼杵なる名稱に適合せしむべく企てたものであらう。松島一帯の地は随分大きな石器時代遺跡地であるから是等の石臼なり石棒なりが此附近に出土して近世の民間信仰の對象物とされ、後には石棒を他地方から齎したり、新造物を添へたりして盛大を致したものである。けれども各々の發見地は不明であり且つ破片であつたので是等の石棒は石棒の項を記述する時には材料としなかつた。

石臼は圖版第十八に示す如き徑二尺五寸内外高一尺五寸許の巨石の平な上面に大小八つの窪みが作られてゐる。各窪みの徑、深さは上表に示す通りである。

而して第二十一圖は石棒を樹立した状態の寫真である。左表石棒計測の各々の番號は上表同番號の窪みに置かれてゐるものを示す。各々の石棒の大きいさは即ち次の通りである。

番號	長	短	深	備考
I	一・二五	〇・五五	〇・三〇	安山岩製、破片
II	〇・五〇	〇・三七	〇・〇七	
III	〇・七〇	〇・六〇	〇・一六	安山岩製、全形
IV	一・二〇	〇・七五	〇・三〇	
V	一・二八	〇・九〇	〇・三六	安山岩製、全形
VI	〇・八〇	〇・四〇	〇・一〇	
VII	〇・六五	〇・五一	〇・〇九	安山岩製
VIII	〇・五五	〇・五〇	〇・〇八	
番號	長	上	下	備考
I	一・三〇	〇・二八	〇・三七	安山岩製、破片
II	〇・二五	〇・二八	〇・三〇	

かゝる石臼に關しては曩に諏訪郡湖南村大安寺甲斐國北巨摩郡穗坂村岩代國若松市舊會津東山附近に存す

一三三 石 皿

番號	長	短	深	備考
III	一・七一	〇・五三	〇・五五	下端磨滅
IV	一・二五	〇・六〇	〇・五五	上端同
V	一・二〇	〇・五五	〇・六〇	安山岩製、上端其儘
VI	一・四〇	〇・四八	〇・五五	花崗岩製
VII	一・三三	〇・四八	〇・五五	安山岩製、全形
VIII	〇・四〇	〇・四〇	〇・四八	安山岩製

るものに就き記した。又最近には下高井郡科野村赤岩高森に七ツ釜と稱する同種石臼の發見が報ぜられた。

本郡發見の石皿を通覧した所、曩に『諏訪史』に試みた形式分類と略合致するも、なほ本郡には追加すべき一群が比較的多く存する事を發見した。即ち『諏訪史』の分類法を多少改め、IIIをIVに移しIIIに新形式を加へて次の如くした。

- I 全形扁平にして長方形の石にて作られ、底面は平坦なるもまゝ、四脚を有し、製作巧緻、形容端麗なもの。窪みは比較的淺く且平坦である。周縁は狭く劃然と隆起してゐる。(圖版第十九)
- II 扁平に近き楕圓形の石にて作られ、底面は彎曲する。窪みの部分は深く、且つ彎曲してゐる。(同圖版2)
- III 全形不整形にして、窪みの部分は一般に深く、往々にして孔となつて底面に開口するに到るものがある。(圖版第二十四)
- IV 扁平にして不整形なる石にて作られ、平坦なる表面に微かに窪みが認められる。(第二十三圖1)

此形式分類にあらはれたる各形式の間に用途に多少の相違の存すべきは既に『諏訪史』に於て述べた如くである。

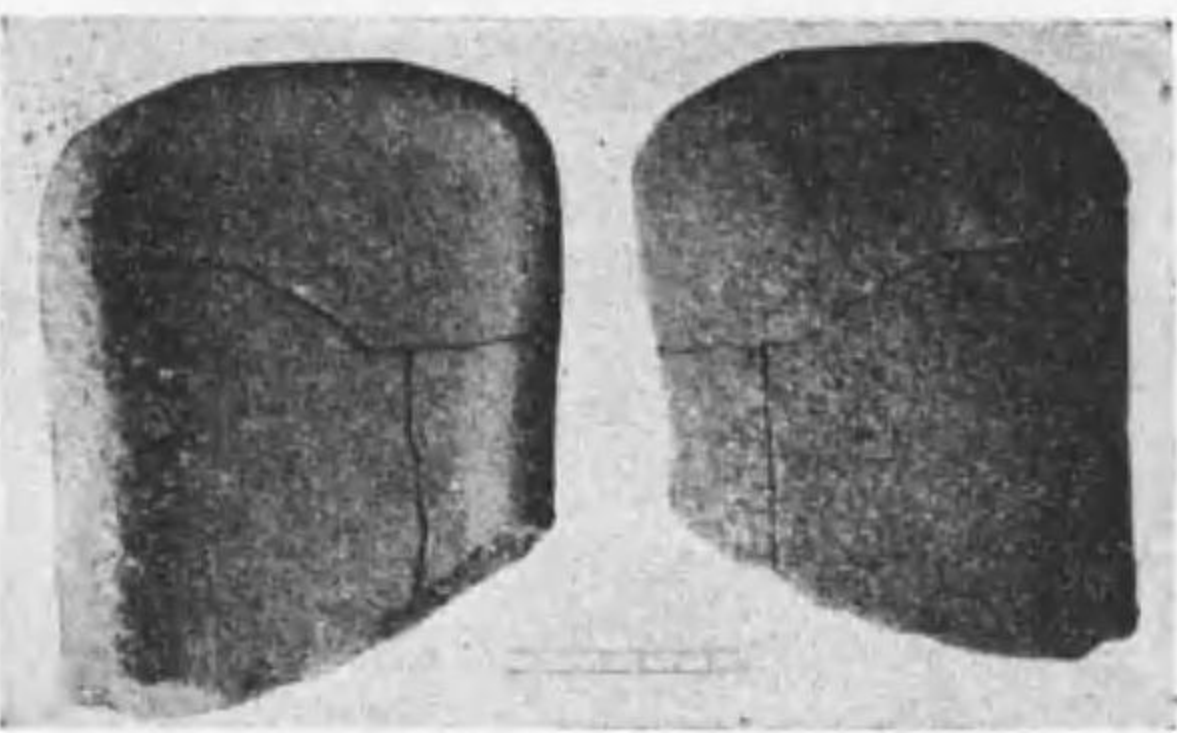
今日までの所にてI型は七面を数へ、内四に脚を認め得る。其一には底面に彫刻がある。II型は十四面にて最も多く内一の側面は彫紋が施されてゐる。IIIは七面あり、IVは一面だけである。即ちII、I及III、IVの順序である。

次に完形品に就いてその大きさを記載する。

石皿計測表

形式	發見地	長	最大幅	最大高	窪ノ深サ	備考
I	東春近村木城東畑	一・五三	〇・七三	〇・二七	尺	安山岩製
I	藤澤村御堂垣外	一・一八	〇・七〇	〇・二八	〇・二〇	底面ニ四脚ト彫紋アリ
II	伊那村伊那區上ノ原	一・四二	〇・八四	〇・二五	〇・二〇	安山岩製
II	富縣村北福地根木屋	一・三五	〇・八〇	〇・三〇	〇・二五	同上
II	箕輪村狐垣外	一・三〇	〇・八〇	〇・二〇	尺	砂岩製
II	伊那村伊那區本村	一・二七	〇・八〇	〇・二四	尺	砂岩製
II	伊那富村北大出三ツ谷	一・一七	〇・七五	〇・二〇	〇・二〇	片麻岩製
II	美郷村芦澤	一・一五	〇・八五	〇・二〇	〇・二〇	安山岩製?
II	伊那村伊那區上ノ原	一・一二	〇・七三	〇・三〇	〇・二〇	
II	伊那富村北大出神明社	〇・九五	〇・七〇	〇・三〇	〇・一五	
III	藤澤村荒町神明	二・〇〇	一・七〇	一・三〇	〇・一八	縁泥片岩製・土器ニ載リテ發見サル
III	富縣村	一・二〇	〇・八〇	〇・二四	〇・四〇	花崗岩製
III	伊那村伊那區上ノ原	一・二〇	〇・八〇	〇・三二	〇・四〇	砂岩製
III	富縣村	一・〇〇	一・〇〇	〇・三〇	〇・一三	

前表によつて最も大なる石皿はI形式に屬する東春近村木城東畑に於て發見したので長さ一尺五寸三分、最大幅七寸三分、最大高二寸七分ある。最小なるは伊那富村北大出神明社境内發見品で長さ九寸五分、最大幅七寸を算する。而して表に現はれた所を以つて見ると大きさが略一定してゐることを知る。なほ他に多い破片殘缺に就いて見ても大體前表の範圍内の大いさにあるがようである。

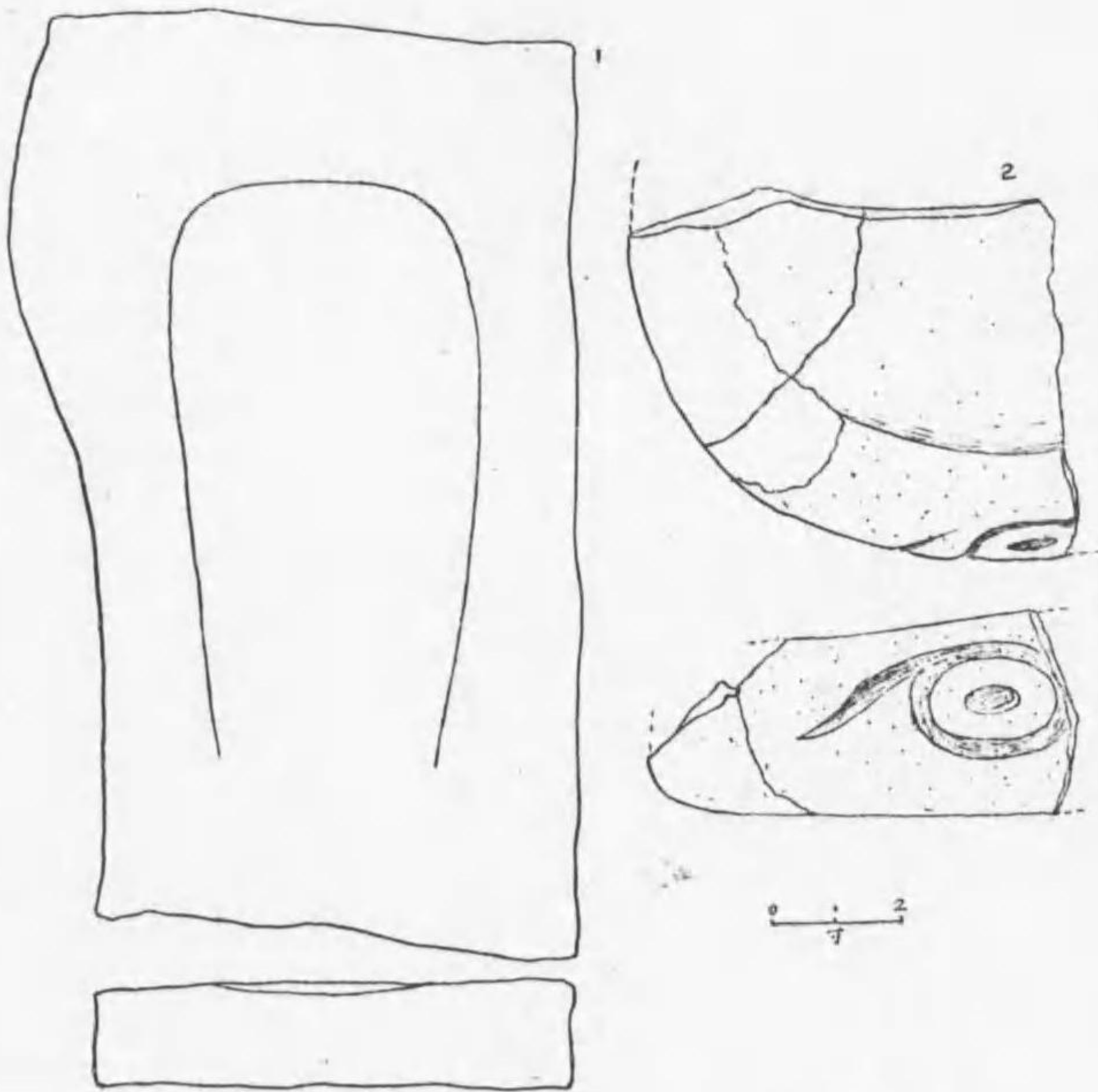


伊那富村白石原出土石皿 第二十二圖

石質は安山岩最も多く他に縁泥片岩、花崗岩、砂岩等がある。藤澤村御堂垣外出土の有脚石皿は單獨に發見されたもので他に何等の隨伴物がなかつたと云ふ。長方形と云ふよりもむしろ卵形を呈し、中央の窪部が開いてゐる方を前縁の壁に閉されてゐる方を後とするならば、彫紋帯は後側から起つて脚部を過ぎ、前方で消失してゐる。

底面には前後左右各均整の位置に圓形の脚が突出し、且二條の平行する彫紋帯が高彫で現されてゐる。脚の高さ五分平均、脚底徑は各々一寸五分内外である。脚底は多くの場合圓形であるが、圖版第十九なる富縣村發見品が長方形を呈するのは稀有の例である。I型石皿は外廓が通常長方形であるが、まゝ特殊な形態を有するものがある。本郡には其

である。同上圖の1は飯島村本郷堤ヶ窪に於て、圖版第十七の6に示す石棒と略々同一の地點から發掘したものであると云ふ。扁平にして略々長方形を呈する花崗岩の板状石の一面に浅い窪



圖三十二第 各種石皿

の適例がないが、破片としてはその特殊形石皿に屬するものである。富縣村御殿場發見のII型石皿は窪部の面に二條の擦痕が可成深く一直線に引かれてゐる。想像するにこの石皿を石斧類を研磨する砥石として使用したる際刃を調へるために刃先を當てた痕と思はれる。圖版第十九の6及第二十三圖の2は昨年七月委員等が表面採集したII型石皿の後部殘缺で側面に彫紋あるを特色とする。輕疎な安山岩を用ひてゐる。紋様は楕圓形を沈彫にし中心にあたる部分に窪を作つてその間を浮彫的に殘し、その外周から短い彫刻曲線を出したもので

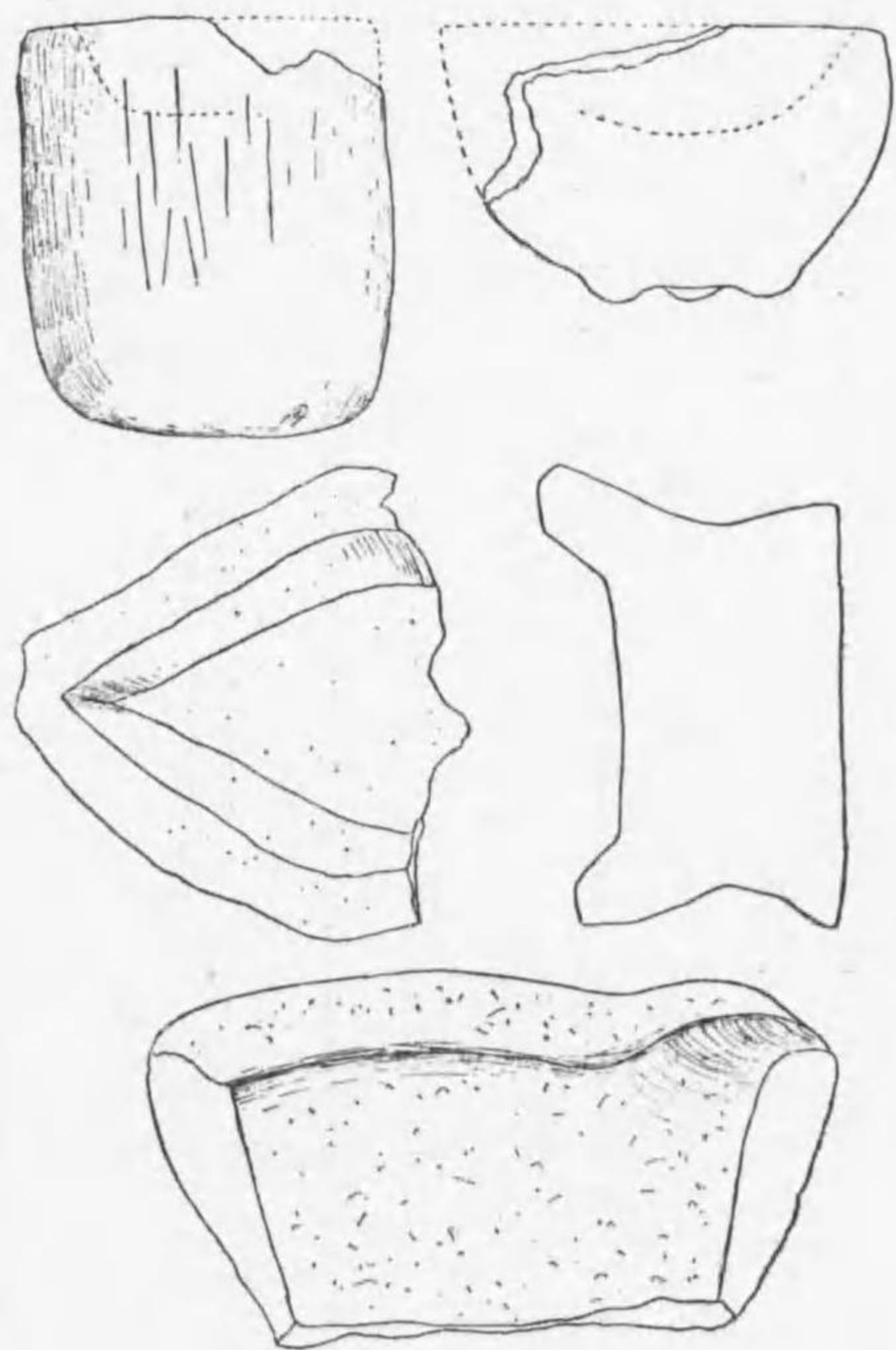
部(深さ二分)が微かに附いてゐる。

圖版第二十四2に示す大形III型石皿は窪が深くなつて行つて遂ひに底を破つて貫通してしまつてゐるが、同圖版1の土器の口を蓋ふて此の土器と共に河南村金井立小路から發見された。

以上で大體本郡の石皿の一般的記述と特殊品の記載を了へたから天龍川流域諸地方との比較を試みる。諏訪地方は殆んど同じ状態である。II型が最も多い事、I型にて底面に四脚及浮彫紋あること、II型の石皿側面に彫刻あること等は顯著な共通點である。下伊那郡と比較しても著しい相違は發見されない。下流地方から從來發見された例證を聞かないから今日の所比較は全く不可能である。

一四 石 鉢

吾人は『諏訪史』に於て從來閑却されてゐた石臼に就き詳述する所があつたが、その中に乳鉢の如き形をしたものと、巨大な石の面に多數窪みあるものと二通りを含めて置いた。用途に於て恐らく共通點を有してゐたであらうが、前者は小形で移動し得るのに、後者は巨大で固定的なものであり、且つ用途を考慮せず、外形からのみ見る時著しい相違があつて、これを一括して石臼とすることは、いさゝか考古學の名稱としては、不適當であることを認めたので、改めて前者を石鉢、後者を石臼と名付けて説明することとした。石鉢なる名稱は北亞米利加に於て發見される同種石器に對して Mortars なる名稱が廣く行はれる事、或は用法が乳鉢或は摺鉢に等しかつたものと推定し、且つ形狀も鉢と呼んで必ずしも不適當でないのて選んだ次第である。



第二十四圖 石 鉢 (分一の大)

本郡發見の石鉢は第二十四圖に聚成した通り形が種々である。即ち1(及圖版第二2)の如く綠泥片岩をとつて圓壩狀に造り、その上面に窪みを作つたもの(西春近村發見)2の如く宛然乳鉢狀に半球形に穴を穿ち、底に三つの突起を作つて安定をよくしたもの(藤澤村發見)同形の上縁の一部に注口を作つたもの(圖版第二1)、又は同形の底を3右側圖の如く臺附としたもの(伊那富村宮木發見)等である。かく注口の存

見或は4のように注口部を特に角張らせたもの(4は河南村北垣外發見)等である。かく注口の存するは流動物又は粉末物を流出す爲であらう。

なほ詳細に各個に就いて述べるならば、1は徑三寸、高三寸五分あり、上面に深さ一寸の窪があり、下底面は圓味を帯びて、しかも打痕が認められ、側面には搔痕が縦に多數認め得る。2は上縁が少しく破損してゐるが徑五寸五分あり、全高は三寸、内脚高約四分である。窪の深さは淺く一寸二分である。底面は平坦でその周縁に楕圓形の突起が鼎立してゐる。圖版第二1の例は前二者に

比して遙かに大きく、上方なる徑短かきは八寸八分、長きは一尺六分、注口の部位を過ぎる徑に及び高さ六寸に達する。穴の深さは約三寸である。花崗岩かと思れる石を用ひてゐる。3の大きさは不明であるが、窪は淺い。4は高さ約二寸七分である。窪みの深さは七分許に過ぎず、その縁壁は劃然と作り手法に於てI型石皿の縁壁に似る。窪みの底面は平坦である。器體の胴部が著しく狭まり、底に近く幾分開かせてゐる。是等の外に富縣村内から輕疎な安山岩を用ひて作つた石鉢の上縁部破片が出てゐる。

諏訪地方は同様の石鉢に富み、就中米澤村北大鹽遺跡から發見されたものには周圍に紋様を彫刻してある。⁽¹⁾ 然るに下伊那に入つては殆んどなく、遠江に於ては發見あるを聞かぬ。

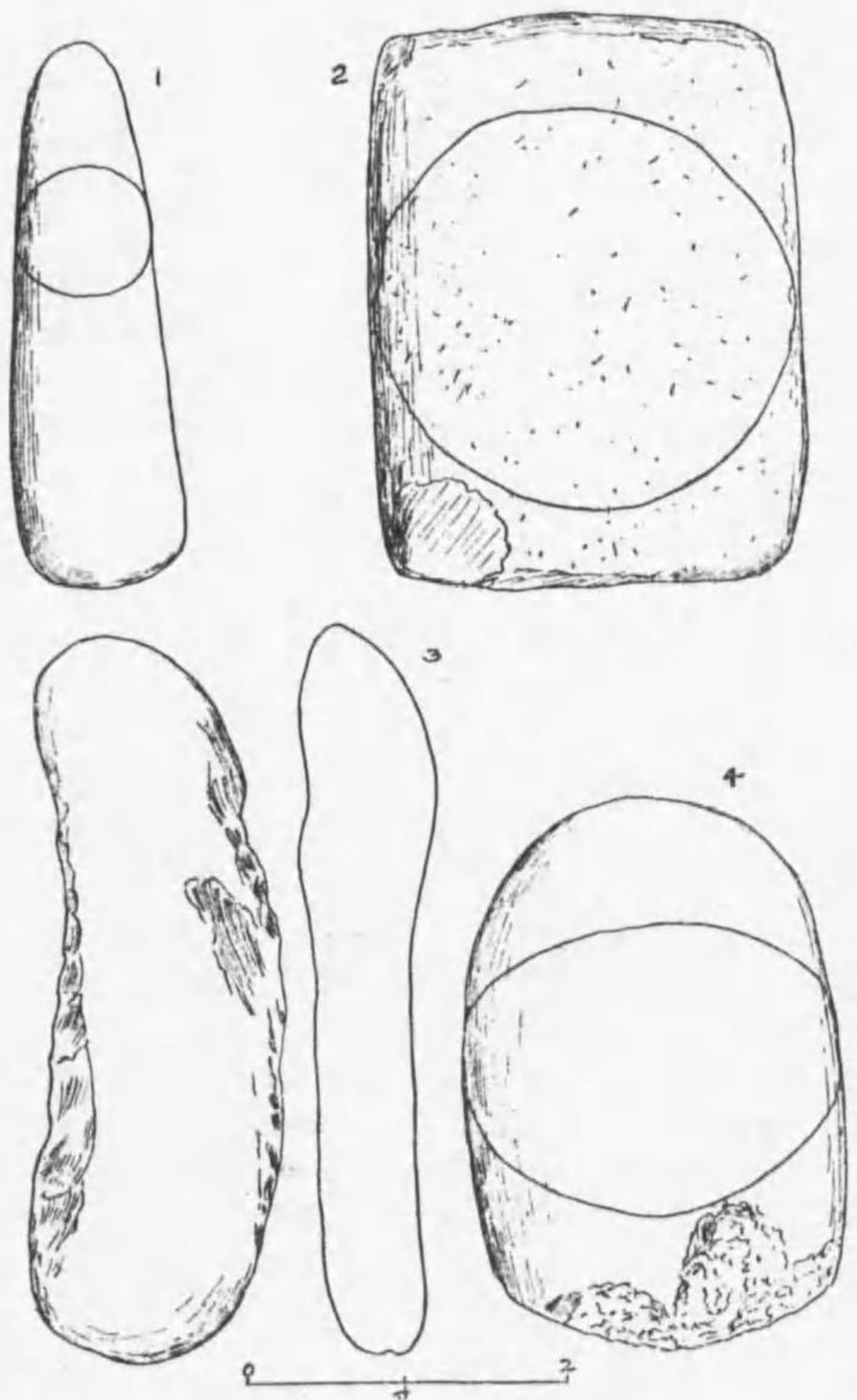
1 『諏訪史第一卷』一六八—一七二頁、石臼及乳棒狀石器の項參照。

2 Mortarに關しては Holmes, "Handbook of Aboriginal American Antiquities" 1919, Hand book of American Indians" 1907. に詳し。

一五 石 錠

既述の石皿石鉢石臼等と密接な關係ありと思惟される石器中、漠然と石錠とも呼ぶべきものが發見されてゐる。系統的に考察することが出来る程材料が豊富でない爲め、少くとも撞撃打擣に使用したと覺しい石器を一括して置くこととする。従つて石錠 stone lammer、石乳棒⁽¹⁾ stone pestle、石立翁 stone sledge 等と別けて呼ばる可きものが皆含まれてゐる。

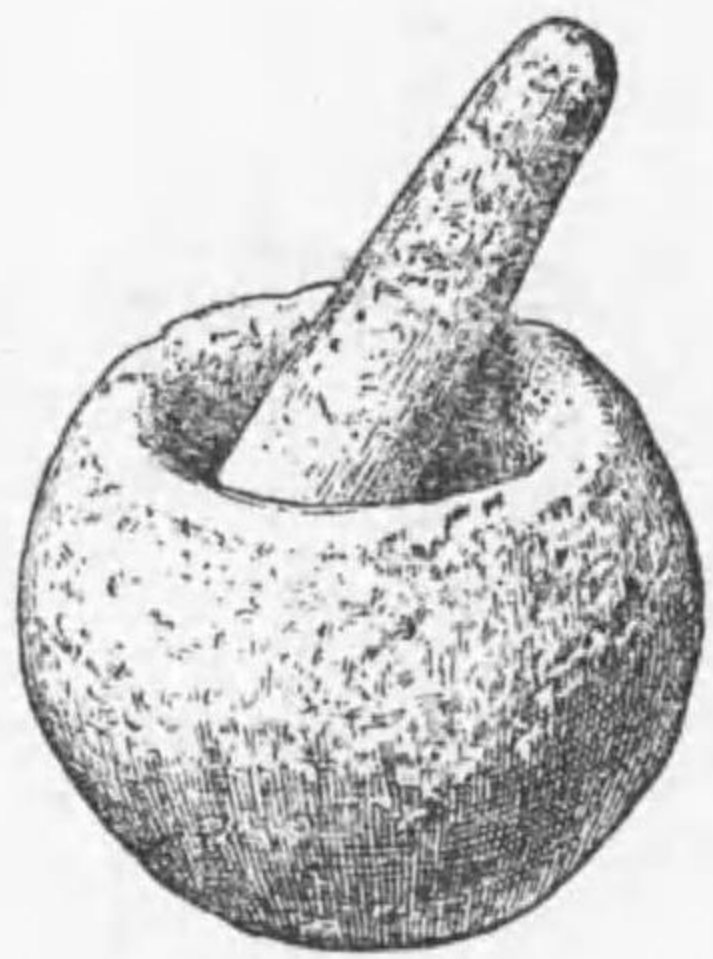
第二十五圖は其等を聚め圖したものである。1は綠泥片岩製で磨製石斧第I型の刃部を圓くしたような形のものである。第1型磨製石斧中、石斧として使用して刃部が磨滅毀損した爲に石



石 鎚 圖 五 十 二 第

一〇八
鎚に轉用した例は決して少くない。第1型以外の形式の石斧中にもその形跡あるものがある。けれども1に示すものは當初から石鎚として製作したもので、圖に於ける下端が撞面となるのである。撞面にははつきりと打痕が認められない。然るに同圖2の石鎚の撃面は著

しく打減らされ、撞撃の痕跡が歴然と看取される。同圖3は瓜形扁平の緑泥片岩質の自然石の兩側に幾分加工したものでその形状及加工部の狀況より石鎚に用ひたものならんかと想像される。但し撞面に打痕を認めない。4は圓壙の端然たる石器である。形より推して石鎚と考へられる。1の形式の石鎚中に磨石斧を轉用したものがあると同様、かゝる形式のものは石棒の折を利用した例が少くない。此事實より引いて石棒の用途考察の一端ともなる。圖版第二十3に示す長さ一尺に達する緑泥片岩製の大石器も亦石鎚なる可く、全面に互つて製作當時の打痕を止め撞面は



器石見發ヤニルホリカ 圖六十二第

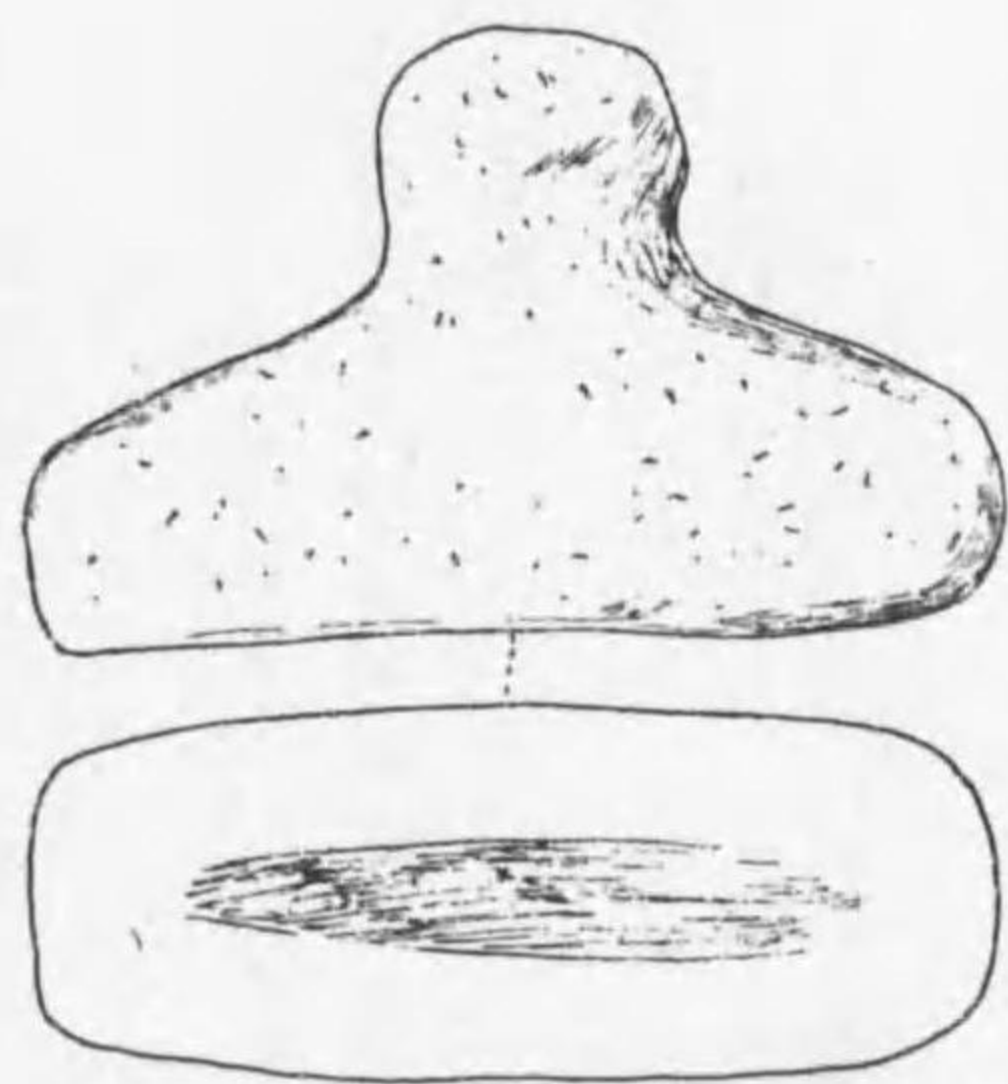
一〇九
稍破碎してゐる。獨鈷石の條下に述べた片桐村小和田發見品は又兩端に撞面を有する石鎚と見ることが出来るのである。上述の如く等しく石鎚と云ふも形状多岐に、大小差あり、決して同一の用途を有するものでないことは明かである。こゝに用途論を試みるが如きは本旨でないからこれを省き、只第二十圖にて石器と石鉢の或者とが伴用されたものなるべきを證する爲めに、他山の石として北米、加州地方に相伴つて夥多に發見する、mortarとpestleとを擧げる可く、第二十圖を添へておく。(2) 最後に隣接地に比較材料乏しきを遺憾とする。これは固より隣接地に少いからでなく、閑却されてゐたからである。

1 『諏訪史第一卷』には乳棒状石器として石鎚中乳棒の形状を呈するものあるを擧げたのである。
同書一七〇頁
2 石鉢の註と同一。

一六 石 冠

本郡に二個の石冠がある。不幸にして兩者共に發見地不詳であるが、恐らく郡内の發見品であらう。一は中箕輪村南宮神社の寶物で、第二十七圖及圖版第二十五に示す如く全形凸字形を呈するものである。頭部と體部に分てば、頭は圓く短く、且つ何等の修飾なく、體部は端然として底面長

方形を呈して平坦であり、中央に石冠通有の凹部が認められる。安山岩製で、長年月に亘つて人が弄んだ爲表面が手磨れてゐる。此石冠は最も普通な形式のものである。次にも一つの石冠は稍異形で、圖版第二十四の如く茸のような形である。即ち第一例に於ける頭部に當る部位が體部に當る所より著しく大きく、底面は圓味を帯びてゐる。



第二十七圖 石冠

第一例は既に記した通り石冠の通有型で、何等の特異な修飾を見ない。この點曩に『諏訪史第一卷』に記載した同郡北山浦發見品に近く、僅かにそれより整つてゐるだけである。なほ同書に挙げた他の數例に比べるならばこれを原始的形態を具へるものと云ひ得る。即ち諏訪郡平割畑發見品以下三例を見るならば著しい器形の形式化を見決して初原的形態でないことを知るからである。

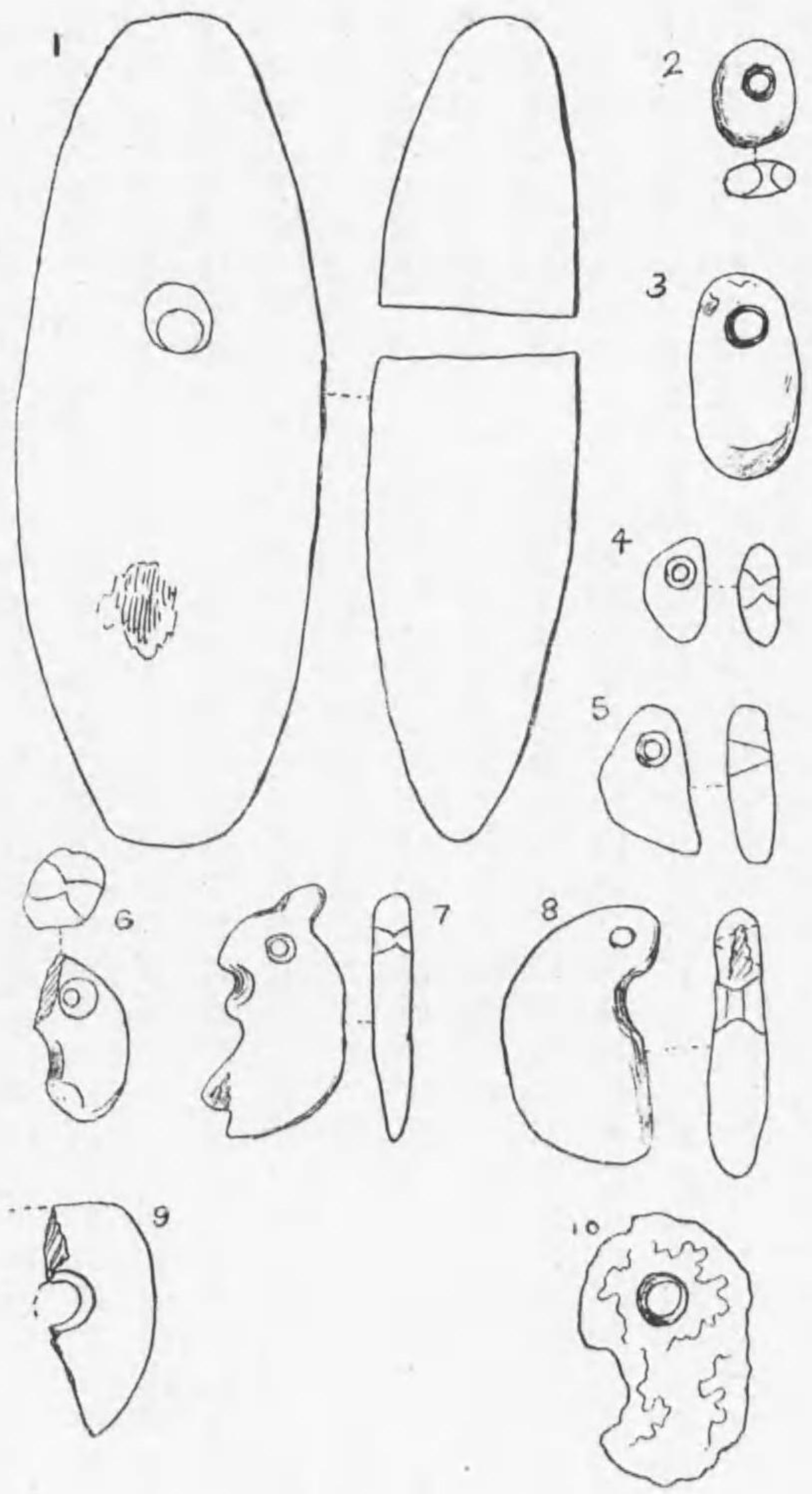
第二例の類例は諏訪に於ては見る事が出来なかつたけれども下伊那にはある。即ち同郡根羽村月瀬及び大下條村早稻田より出土した二例は多少の相異こそあれ略々これに近いものである。遠江國內に石冠の發見された例を知らない。然るに天龍川の河口を遠く西方なる三河國渥美半島地方に至ると石冠の濃厚な分布地となつてゐる。

- 1 『諏訪史第一卷』一八一—一八四頁石冠の條參照
- 2 『下伊那の先史及原史時代』圖版第三十三の七、九、

一七 珠 玉

石で曲玉其他の珠玉を作つたものが少からず發見されてゐる。

最も簡單な形式の珠は楕圓形の石に孔を開けたのである。圖版第二十一はその適例で石英岩質の石を用ゐ、その色乳白色に綠斑を點じて美麗である。長さ二寸、最大幅九分、最大厚五分あつて大珠に入る可きものである。孔は中央より稍上方に偏りて片挾にて貫通し、その口徑一方二分五厘、他方一分五厘ある。之と似て之よりはるかに大形で長三寸の珠が信州伊奈郡より發見として、東京帝國大學人類學教室所藏「石器時代遺物圖」第七冊に大野雲外氏により圖寫されてゐる。第二十八圖1が即ちそれである。單に伊奈郡とのみしかないが多分本郡であらう。現在の所在は明かでない。之の珠も孔が片挾である。楕圓形の珠でこの二つ程大きくないものもある。同上圖2(手良村野口發見)3(郡内發見)が其例である。2の方は蠟石製で極めて扁平である。3も1と同じく「石器時代遺物圖」中に圖録されて居り、之には明かに上伊那郡としてある。楕圓形の下方が開いたような形の珠がある。圖版第二十一2に示した。蠟石製で扁平であり、厚さ一分五厘、兩挾孔が上方に貫通してゐる。次に楕圓形を半截して圓縁を幾分角張らせた如き小珠が二個ある。同上圖4、5がそれで、4の方は綠斑ある石英岩に片挾孔を作り、5は兩挾孔を作つてある。共に唐澤貞治郎氏の藏品で上伊那郡内ではあるが精細な發見地は不詳である。これを一步進めた曲玉形の珠としては圖版第二十一5の如き簡單なものから、同じく3、又は第二十八圖6(七久保村北村天



第 二 十 八 圖 珠 玉 (大 實)

白發見の如き通有形、或は同上圖版4若くは同上圖7(宮田村中越中原發見)の如き異形のもの等がある。第一例は綠斑ある石英岩製にて横斷面方形である。第二例は蠟石製、扁平で孔は兩挾法による。第三例は綠斑ある石英岩製にて横斷面は角ばつた圓形兩挾孔。第四例は石質不明頭部に複雑なる彫刻ある點にて出色あり、兩挾孔を穿つ。第五例は扁平にて蠟石製、穿孔は兩挾、頭部に

突起を出し異形である。第二十八圖10は手良村丸山より發見され、石英類を裂製にて作り、孔を兩面より穿つた曲玉で、唐澤氏が早く報告したものである。圖版第二十一及第二十八圖8は玦状耳飾の半折したもので、後者はハコダ、ミと稱する所から發見したものである。同上圖9は一見田原發見品に似るが一端に片挾孔を有し、且破摧面に該當する所が磨かれてゐる。(宮田村中越中原發見)最後に圖版第二十一の7に示すのは富縣村北福地根木屋發見の曲玉でその形は第二十八圖の4に似て居るがずつと大きい。孔は中央に大きく開かれてゐる。かゝる形の珠は製作に簡單で比較的容易に造られたものと思はれる。

以上數例を大別して、(1)橢圓形大珠(2)曲玉(橢圓形小珠を含む)(3)玦様耳飾の三類となる。この分類は形を主とし用途を多少考慮に容れて試みたものである。こゝに用途論を述べるは本旨でないが説明の爲略記すると次の通りである。第一類の橢圓形大珠は恐らく之を獨立に佩用したものと想像されるが、人骨に隨伴する等の學術的根據は有たない。第二類の曲玉類は一般土俗に徴して多數を紐類に綴り連ねて用ひた垂飾にと思はれるがこれも何等考古學的證憑を有さない。第三類の玦様石器は耳飾として耳朶に垂下したものであることは既に明白な事實である。但し所謂玦様耳飾の破片と稱する物にて孔あるは之亦曲玉として重ねて使用したものである。

石質は蠟石、石英岩、必ず綠斑ありが主なるが如く、爾餘の石質は研究不充分である。概して蠟石製珠玉は扁平性、石英岩製珠玉は肥厚性を有つてゐる。

諏訪は石器時代の珠玉に富んでゐる。數量が多いばかりでなく種類も幾通りかある。上記第一類に屬するものは同郡下諏訪町高木瀧口から出土してゐる。第二類は十數點を算し且つ形狀

の變化に富んでゐる。瑛様耳飾乃至類似品も亦発見されてゐる外、蠟石製の原始的管玉さへ発見されてゐる。この外、諏訪に多い滑車形土製耳飾が本郡に発見されて居らない事は注目し得る。⁽³⁾ 下伊那地方は本郡と伯仲してゐるが併し第一類を缺く。⁽⁴⁾ 更に下つて三河國北設楽郡なる櫻平遺跡からは蠟石製白玉二個同じく鞍舟遺跡からは蠟石製瑛様耳飾二個其他が報ぜられてゐる。⁽⁵⁾ 遠江國では蜆塚から曲玉の破片一個の発見を傳へてゐるに過ぎない。⁽⁶⁾

- 1 この曲玉は唐澤貞治郎氏が東京人類學會雜誌第九卷第一〇一號の「信濃國上伊那郡石器時代取調書」中に發表して居る。恐らくこの玉は本註6の土屋氏報告中に見える信州伊奈郡小澤月見松発見品と稱するものと同一であらう。なほ唐澤氏が掲げられた野口鳥の宮古墳より石器と共に発見されたといふ曲玉は形式に於て原史時代のものなること明かであり且碧玉及瑤瑠製なりと云ふことはこの事を裏書きするものである。たゞ孔が兩挾なりと云ふことは注意すべきである。けれども丸山発見の石英製の曲玉は石器時代のものらしく思はれる。
- 2 河内國國府発見人骨の頭部の耳邊にかゝる形式の石製品が存し、備中國津雲貝塚に角製類似品が存した事は學界周知の事實であつてこの種石製品が耳飾なることは疑ひないところとなつた。
- 3 『諏訪史第一卷』の裝飾品の條、二三〇—二四五頁參照
- 4 『下伊那の先史及原史時代』圖版第三十六
- 5 夏目窪田兩氏前掲報告
- 6 土屋彦六、遠江國敷知郡入野村蜆塚より発見したる古代の遺物（東京人類學會雜誌第八卷第八十四號）

一八 其他の石器

以下本郡発見の石器數種に就き略述する。

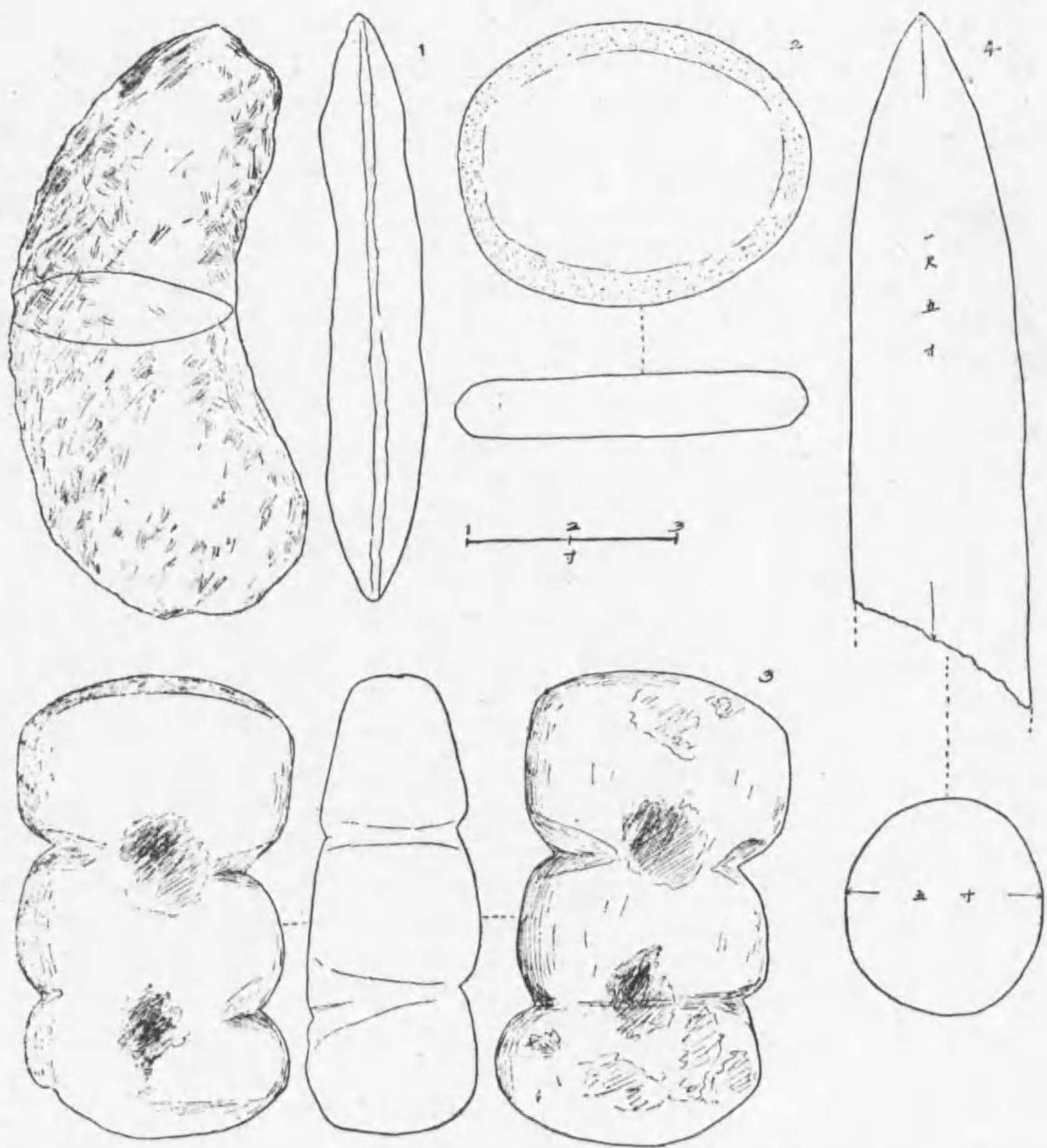
硬砂岩質の石に打製石斧に見る如き打裂を加へた跡歴然たる扁平圓形の石器がまゝ発見される。直徑は二寸から四寸位の間。多く一面は石の原面で、他面に打裂を加へ、周縁を圓形に整へる爲め更に多少の修正を加へ、且つ縁を薄くして刃としたらしく見える。扁平圓形で周縁に刃のある事から一種の擲石(Sling)として之を擲ち鳥獸の捕獲などに用ひたとも想像される。^(圖版第 十五 五)

圖版第十一、下圖上段最右に示す石器は用途の上からは石斧と共通したものと考へられるがその形が特殊であつて他の普通の石斧とは區別される。全面に渡つて丹念に打撃を加へてある。石質は判然しないが、胡麻色に金色の斑ある堅緻な美しい石である。側面圖は第二十九圖1の如くである。全長約五寸六分。中央部の幅約二寸七分、同じく厚さ七分である。

圖版第二十一、11に示す石器の破片は打痕を留めて未だ研磨するに至らないが、形態調ひ上方一側面に突起が出てゐる。恐らくこの突起に相對する他側面の缺つた部位にも同様の突起が存在したであらう。現在長さ四寸三分、下方の幅一寸六分を算する。この石器と著しく類似するものが會つて諏訪郡本郷村なるドルメン類似遺跡から発見された。それによると主體は突起部から更に延長しその先端は尖つてゐる。大きさも兩者相似してゐる。

次に圖版第二十一、9^(第二十圖)は直徑三寸三分に二寸七分の楕圓形の石の兩面を端然と平坦に磨つた石器で、其厚さ僅かに六分しかない。恐らくその平坦面は磨石器製作の際研磨するためにつたものなるべく、一種の手持砥として用ひるのには石の大きさ、形が適してゐる。

圖版第二十一、8^(第二十圖)は全く類品のない特殊の石器である。綠泥片岩を扁平な俵形に磨き、其兩側縁に各々二つの切目を作り、各相對する切目の間には兩面ともに一つの凹みを作り、石の兩端



（大一分三約）類器石種各圖九十二第

一一六
は何物かを研磨したと見え滑面をなしてゐる。用途に就いては類品を見ない今日思議することを避ける。
次に第二十九圖4に示す石器の破片は箕輪村田畑から発見され、横断面が正圓に近く、石棒の如く見えるが先端が砲弾狀に尖つてゐる。現在長さ一尺五寸、徑五寸に及ぶ。
本郡から只一箇ではあるが多頭石

斧が発見された。即ち圖版第十四4に示す如く三頭の石斧である。各刃線は略圓を描き、其圓の直徑四寸内外である。刃の幅は比較的廣い。中央孔は打撃によつて兩面から通じ外徑一寸三分内外である。本郡附近では東筑摩郡鹽尻村北佐久郡川邊村下伊那郡市田村下市田の諸地方から四頭の石斧が発見されてゐる。

最後に圖版第十五6に掲げた所謂蜂ノ巢石に就て一言する。此の石器は長さ九寸、下幅五寸五分程の三角形の石の片面に二十餘の凹を恰も蜂の巢様に穿つたもので、凹の大きいさ一定せず、且つ其配置にも別に順序があるとも思はれない。斯る遺品は此外河南村竹垣外伊那村伊那上ノ原等の遺跡からも発見されてゐる。此種の凹みは往々石臼石皿の側壁面又は底面に見出される。手良村野口辻垣外発見のIII型石皿は兩面に窪みあり其側壁面上に窩が略直線をなして整列してゐる。他面にも略これと同様の窩列が認められる。是等の石器の用途は恐らく歐米に発見される同種遺品の Cupstones と稱するものと相似のものと想像するが具體的には説明出來ない。只同じく窩を有つてはゐても凹石類と同一用途に當つたものでない事は想像されるであらう。

第二 土 器

我邦の石器時代の研究の中最も興味あり且最も重要な對象は蓋し土器である。晩近先史考古學の興隆に伴ひ土器研究に科學的方法を用ふるの趨勢を生じ、今や其過渡期にある。従つて今日

の所本郡發見の土器を直ちに我邦全般の夫れと對應し得るの時機には到達してゐないと思ふ。故に本編に於ては主として本郡の土器の性質を究める事とする。

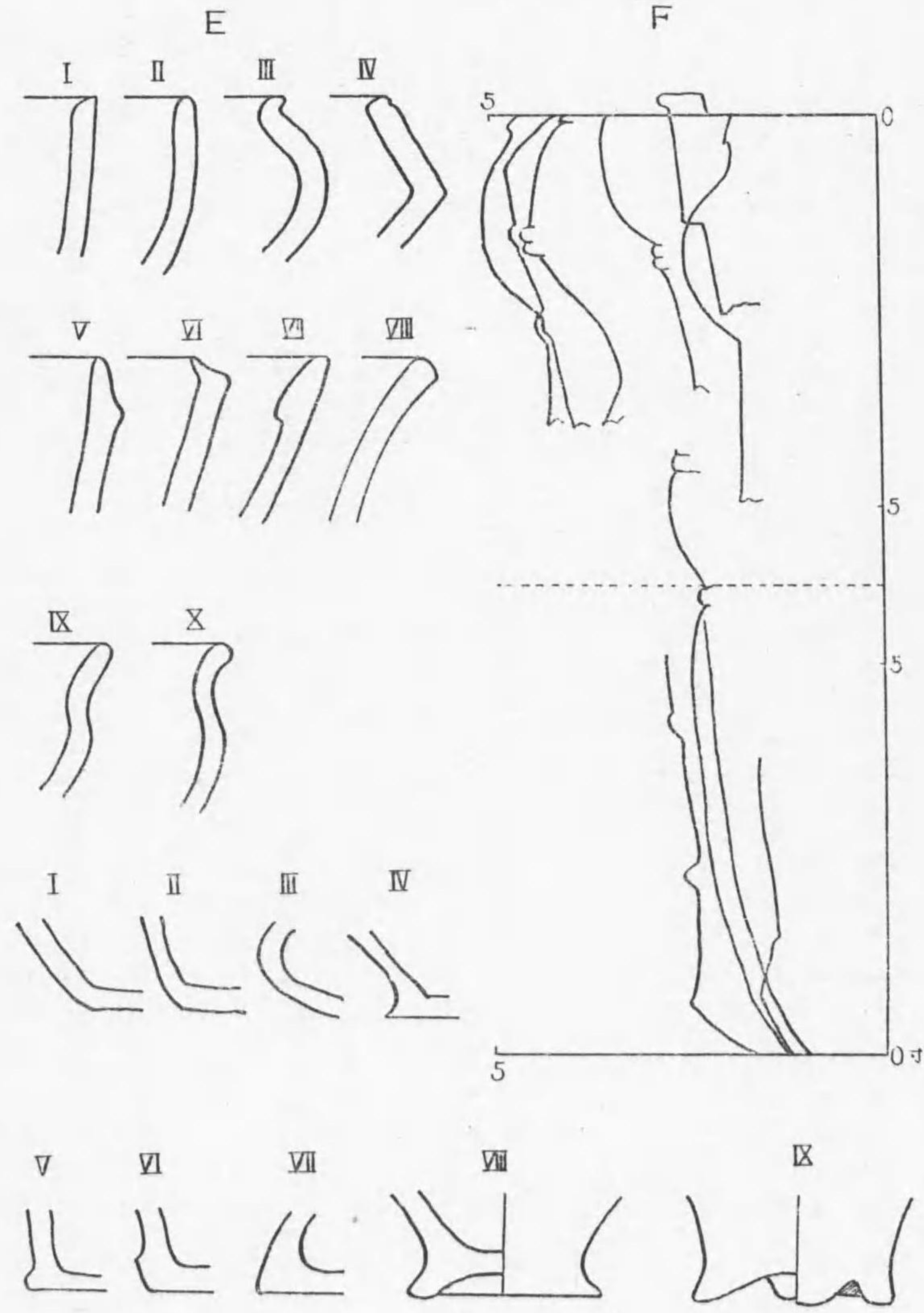
一 形 態

土器の形態とは主として土器外表面の輪廓を指し、把手、耳、紋様の如きは副體として之を除外する。土器は人工品なるが故に作爲を通ず作者の心理的經過乃至經驗才能による技巧的經過が自づと印される。この點では柔軟な粘土を意のままに塑ねるのであるから、堅硬な石材を用ひる石器に較べて遙かに顯著である。土器研究の重要なのは一にこゝに懸る。土器發達の經過は最初必要に應じた形をとつて裝飾等も現はれないが、やがては形態の整調美化が行はれ、紋様附加物等の裝飾の盛行を見、漸次傳統を生じてすべてが固定的形式的になり、遂ひには次第に萎縮退嬰して再び實用向に復歸して裝飾的要素は消滅する。換言すれば簡單より複雑に移り再び簡單化される。この理論は或程度まで實際的にも成立し得るやうである。而して本郡土器の一般的狀勢より推す時は此經過に於ける第二段乃至第三段以下にあたる。従つて形態も様々である。

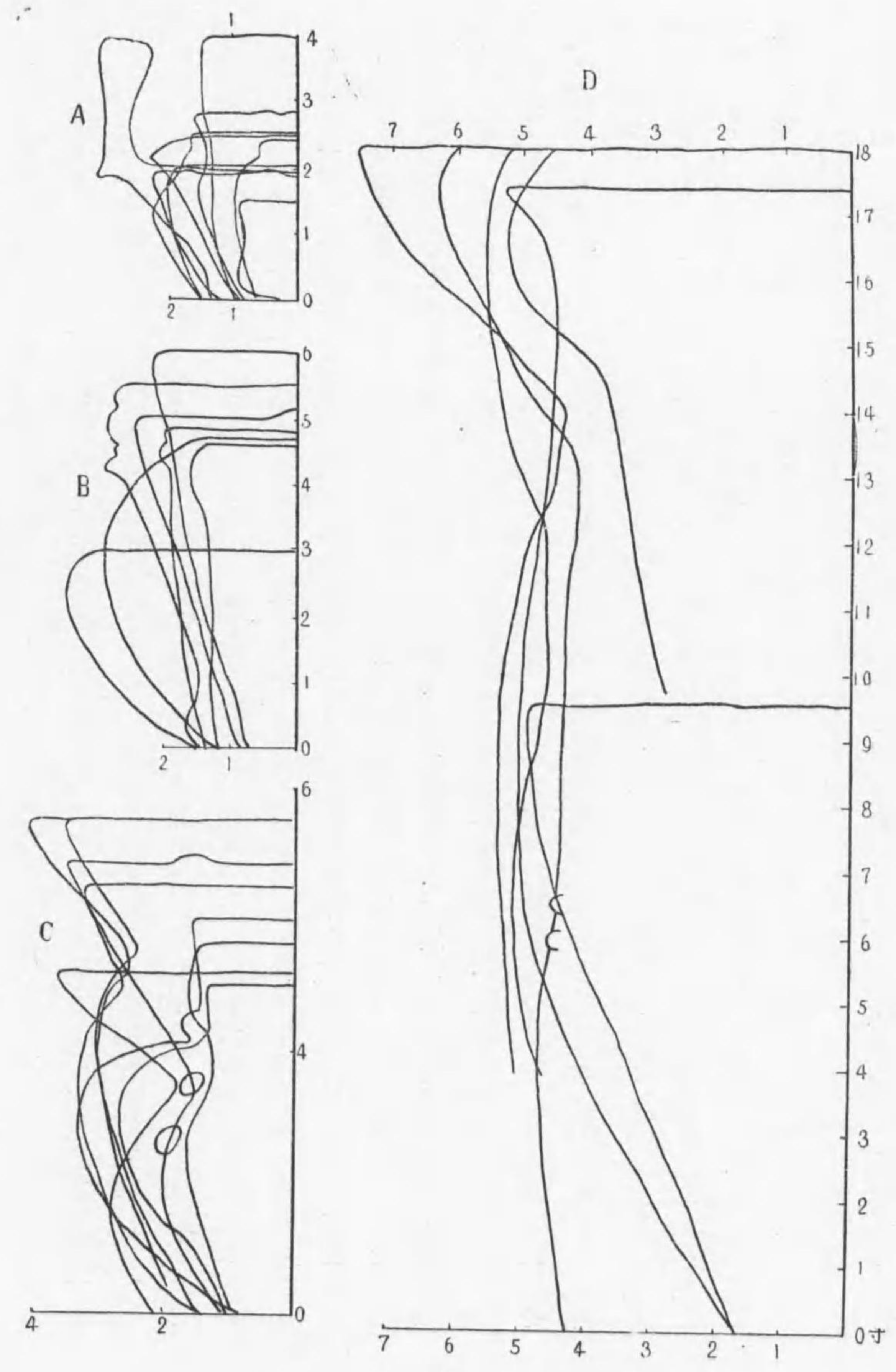
偕、土器形態の研究に際して注意すべきは、土器が破摧し易いものであり、且多年地中にあつて土壓を被る爲、完全に遺存する可能性が形狀によつて多少差が存し、或形態のものは特に多く完全に發見されるのに、或形態のものは殆んどすべて破摧して發見される事がある事である。例へば土壘形の如き球狀を呈する器形の土器は比較的外壓に堪へ得て保存される。されば形態の研究は完全に發掘された土器のみに頼る事が出来ない爲、零碎な破片に就ても一應調べる必要がある。

吾人は先づ郡内から發見された土器の内、完全なるものと、完全に近いもの或は全形を推し得るものを能ふ限り聚め、次に圖式を作る便宜上高さの長短によつて區分する必要を生じ、高さ四寸迄のものを第一群、同じく四寸から八寸迄のものを第二群、同じく八寸以上のものを第三群とした。而して本郡土器の形態は殆んどすべて左右均齊なるにより土器の左側半分だけをとり、高さ及口徑、底徑の長さに應じて作つた各群のダイヤグラムは一〇頁及一一頁に示す通りである。

第一群土器の高さは一寸五分より四寸迄の間にあり、二寸から三寸迄の間特に多く、底の半徑は五分より一寸五分の間に密集するが、口の半徑は之に反して擴がり、七分から二寸五分の間にある。底面と側面とのなす角は略々一定し、百三十五度に充たざる鈍角をなし、僅に直角を持つるものもある。形狀は一定せず各種を含む。次に第二群は混雜を避ける爲め簡單な形と、複雑な形とに分つた。前者は高さ四寸六分から六寸迄の間に局限され、底の半徑は七分から一寸五分の間に聚り、口の半徑は高さに比して短く、一寸四分から二寸七分の間にあつて第一群の如く散在せぬ。底面と外表面とのなす角度は概して第一群よりは直角に近くなり、只二例の鏡の如き形の土器(内一個は高さ三寸に過ぎぬ)が最大徑が大なる爲便宜こゝに入れた)の角度が大である。形狀は概して上方に開き一般に變化に乏しい。後者は高さ五寸より七寸五分の間に擴がり、底の半徑は八分より二寸一分の間にあり、口の半徑は一寸三分より四寸の間に擴がる。底面と側面とのなす角は前者の如く簡單ならず百三十五度を超えるものもあり一般に大である。形は頸と胴との分化顯著で、胴部は概して球形に張つてゐる。第三群は完全なるものが乏しい。大形で壞れ易いからである。深鉢形の高さ九寸五分、甕形の高さ一尺七寸四分を有する二個の外、現在高さ一尺を超



1111



1110

える數例があつて孰れも胴と頸との分界明かて、多くはキャリパー状に内曲してゐる。次に全形の三分の一以上を有する大破片數例を舉示した。上方に内曲する例が多い。以上は完形乃至是に準ずる諸例であるが、以下に全形を推す事の難い破片に就き口縁(及び頸)・胴底の諸部の觀察を試みる。

口縁 土器に於て形態上最も複雑を極むるは口縁部である。今現存部の高さ一寸以上を存する口縁破片を十型に分類して前頁ダイヤグラフEに示す。次表は破片百七十二個に就て作つた統計表である。

土器口縁形態分類統計表

順位	%	數量	型式
(I)	34	五九	I
(III)	22	三七	II
(II)	24	四二	III
V	4	七	IV
VI	2	四	V
IV	5	九	VI
IV	5	九	VII
	1	一	VIII
	1	二	IX
	1	一	X

表に據つて見るとI最も多く三十四パーセントを占めIII II之に次ぐ。IX Xの如き寔に寡いが是等は後述の彌生式土器口縁に於て最も多く見る所で、著しい對照を示してゐる。之を要するに完形及び破片によつて口縁を見るに直線的なるか内曲乃至内屈せるかに限られ、外曲或は外屈すものは極めて僅少である。

胴部 遺跡に散布する土器破片中、胴部に屬する部分が最も多い。これは土器に於て胴部の占める面積が大なるに因るが、又皿の如き淺き器形の乏しい事をも暗示する。而してその多くの破片は大破片でない限り、縦断面の示すカーブが直線的である。特に厚さの大なるもの程其傾向が強い。之は土器が筒の如く屈曲に乏しい器形の多かつたのにも起因し、更に一方土器が大形であつた爲めカーブも大となり、延いて其弧の一部なる破片に於てカーブが緩かなるは當然である。器が小形で薄手のものは之に反してカーブ強く彎曲性が強い。大破片で多少なり屈曲のある諸例を通じて見るに全器體の約三分の一(上方より)程の所で急に内折して頸を作る傾向が著しく見受けられる。

底部 三十九個に就き一二一頁ダイヤグラフFの如き形式分類を行ひ、九型とした。次に各別の數量と各底の徑を示す。

底部形態の數量 (但破片)

數量	型式
一五	I
三	II
一	III
一〇	IV
一	V
一	VI
二	VII
五	VIII
一	IX

底徑 (但破片)

數量	底徑
二	一・五—二・〇
三	二・〇—二・五
五	二・五—三・〇
二	三・〇—三・五
二	三・五—四・〇
一	四・〇—四・五
〇	四・五—五・〇
一	五・〇—五・五

即I型最も多くIV VIIIと相次ぐ。低い台脚を附けたVIIIの多いのは材料採擇の關係もあるが注目
 に價する。底徑は二五—三〇寸の間が最も多い。完全の土器に於て認め得た事實と略合致する。
 形態は上述の如き數理的關係のみによつて論ず可き性質のものでなく、寧ろ曲線の示す緩急に
 就き、又各部位の配合に就いて美學的觀察を行ひ、製作法原型的物等を考慮して工藝的觀察を行ふが
 最も重要である。けれども我邦石器時代土器の聚成圖の據る可きものなく、製作法原型的の考察
 に當つては本郡内と限る如き地域狹少の地のみより歸納する事が極めて困難であつて、不用意に
 之を行へば徒らに抽象的に流れる嫌ひがあるからこゝには省く。約言すれば本郡土器の形態は
 副體を脱すれば其輪廓は變化に乏しく、鉢、甕、壺の如きが多く、壺、德利、土瓶、香爐の如き複雑なるは僅
 少である。之は土器製作の技術能力が複雑形を作り得るに到らなかつたからでなく、製作者の嗜
 好乃至製作焼成が此種器形土器に不適當であつたによると想像される。形態が變化に乏しいと
 云ふても其輪廓が一律で幾何學的なのではなく、後述彌生式土器に見る様な統一整理された曲線
 美を示さないまでも、一種諧調のある曲線美が原始的に表現されてゐる。その描く曲線の最も多
 いのはキャリパー狀に上方に開いて口縁で内曲又は内屈する類である。

近時杉山壽榮氏は石器時代土器の有する一つの約束を發見した。それは畸形的形態土器を
 除く多くの土器は高さと同最大徑とが相等しいと云ふ事である。勿論皿とか筒形とか云ふものは
 駄目である。この約束は本郡土器にどの程度まで適用されるかを完全土器に就いて調べると次
 の通りである。

高サ > 最大徑	高サ = 最大徑	高サ < 最大徑
1.9 : 4.6	1.5 : 1.8	4.6 : 3.2
1.9 : 4.9	2.4 : 2.0	4.8 : 4.2
2.0 : 4.5	2.8 : 3.1	6.0 : 4.1
2.5 : 4.0	5.0 : 5.0	5.0 : 3.2
2.5 : 4.5	5.5 : 5.8	14.1(+): 11.0
7.7 : 6.0	6.0 : 6.4	18.0(+): 12.5
5.2 : 7.2	6.5 : 6.5	6 例
10.6 : 17.4	6.8 : 6.8	
8.4 (+): 10.4	7.5 : 7.0	
14.1 (+): 15.0	7.5 : 8.0	
10 例	9.5 : 9.8	11 例

ノモキ離り知高全キカラ部底ハルナ字太中表
 係關の徑大最とさ高の器土

二 厚さ

高さと同最大徑の同長例は三個に過ぎない
 が、五分内外の相違は計測及測點の誤差と見
 做して等長とすれば十一例を得、二十七例中
 最も多い。高さが最大徑より小なるが其次
 で、最大徑より大なるは少ない。即杉山氏發
 見事項の例證となし得るに足る。かゝる約
 束は蓋し石器時代人が豫め企畫して製作し
 たのでなく、安定に對する觀念が不知不識か
 らる形態を生む經驗に導いたのでもあらう。

厚さは製作と密接な關係を有し、形態も亦厚さ如何に依て支配されてゐる場合が尠くない。土
 器の厚さは本郡發見品の大部分の如く隆起する紋様を有する時は可成紋様なき部分を選ぶ必要
 がある。従て器體事實の厚さは紋様を附する事によつて著しく増し倍加する事さもある。次に
 隆起せる紋様(浮紋)を有する土器と然らざる土器(沈紋及無紋等)とを分ち、厚さの計測結果を擧げる。
 厚さは一個體に於ても部位によつて多少の相違ある爲、口縁部、胴部、底部、底面部にあらずと分つて、
 これを測り、従つて完形品は各部に表記される事となるから繁冗を避ける爲に便宜上破片のみを

擇つた。口縁部と胴部、胴部と底部を兼有する破片は胴部のみに依る。

土器厚度計測表

計	沈紋土器片			浮紋土器片			土器厚サ
	計	底部	胴部	計	底部	胴部	
二九	二六	—	一二	三	—	二	一分
一一四	六七	四	四三	四七	—	二四	二・〇
二〇四	八七	六	六三	一一七	二	七三	二・五
二二二	七九	三	六〇	一五三	二	一一一	三・〇
一一七	三三	七	二〇	八四	三	六三	三・五
六四	一九	—	一二	四五	—	三二	四・〇
一二	五	—	三	七	—	六	四・五
一〇	二	—	一	八	—	五	五・〇
—	—	—	—	—	—	—	五・五
—	—	—	—	—	—	—	六・〇
七八三	—	—	二一四	—	—	三一六	計
			八三			九	一三九

土器厚度の千分率表

浮紋土器片	土器厚サ
4	一・五分
57	二・〇
147	二・五
195	三・〇
107	三・五
57	四・〇
9	四・五
10	五・〇
—	五・五
—	六・〇

表に據れば、二分より三分五厘の間が最も多く、最薄は一分五厘内外、最厚は六分内外である。又千分率表に據れば、沈紋土器は浮紋土器に比して薄い傾向がある。最薄一分五厘に於て後者では最下位であるのに、前者では第四位にある如きよく其間の消息を傳へる。然も沈紋土器としたもの、中には浮紋土器中全然無紋部、又は沈紋部が破片となつて混入してゐる形跡があるから之を控除すれば益々如上の傾向を強からしめる。

三色調(及土質)

土器全面の色調も製作と不可離の關係にある。即ち土質・焼成熱度・器體の大小・厚薄・燃料等に從ひ夫々一定の色調を帯びる。色調の研究は充分に行はなかつた。色表カラテーブルの考案、記載方法の創定が行はれたならば研究の統一を便り得るが今日の所望み難い。一個體土器に於ても部位により、厚薄により、内外により變化がある。概述すれば大形若くは厚手の土器は一般に褐・黄褐・赤褐・黒褐の諸色を帯び、まゝ内面が火力不均衡の爲黒色を呈する。然るに小形若くは薄手の土器は概して内外面灰・黒色を帯び、然もその表面は滑澤なるを常とする。兩者の中位にあるは上述諸色の外、灰白・淡黄褐等を帯ぶるもある。土質は前者は脆く、石英雲母片其他の細粒を夾雜し殊に雲母片は變質して金色を帯び褐色の土器面に點々散布してゐる。後者は土質密に夾雜物を含む事比較的少である。かゝる著しい對照は土器製作法の推移に依て生じたと推察される。

一沈紋土器片	計
—	33
—	86
—	111
—	101
—	42
—	21
—	6
—	3
—	—
—	1

四 紋様の研究

紋様の研究 我邦石器時代土器は簡素又は繁冗な形態美と共に種々なる裝飾美を持つてゐる。紋様把手器臺其他の附加物が發達して其役目をなしてゐるのである。就中紋様の發達は驚嘆に値する。従て紋様研究は色々な立場から最も重要視されてゐる。

紋様と模様との語彙上の使別けに就ては『諏訪史』に於て述べた。我邦石器時代の紋様は寫實的乃至繪畫的要素を含むもの殆んど絶無で、多少寫實的或は器形的要素があつても便化が充分行はれて圖案的に發達してゐるのである。故に模様とするより紋様とする方が適當してゐる。

紋様の研究は畢竟するに其成立發達性質並に圖案上の意義を究めるにある。是を科學的に處理するには多數土器の配列分類を必要とする。

紋様野 Decorative field 紋様野とは土器面に於ける紋様配置の領域を指す。紋様野は土器内面及底面を除いた特殊例はあるが場所に擴がつてゐる。本郡土器の紋様野は外面全體に互るのが最も多い。特に厚手大形で浮紋を有する土器は大抵さうである。その中には部分的に多少の無紋帶(例へば口縁部に)を有するものもある。次には口縁部若くは頸部以上を紋様野とするものが多い。是に比すると胴部のみ或は胴部以下のみを紋様野とする土器は少い。口唇上或は口唇に沿ふ内面に細帶狀の紋様野を有する例も相當あるが、之等は厚さ薄く、紋様は沈紋を主とする。紋様の表現法 本郡の土器は大體次の如き四通りの表現法による紋様を以て裝はれてゐる。

第一 土器面に粘土の紐を貼付ける。

第二 土器面を刻み、残された原面を紋様のポジティブとする。

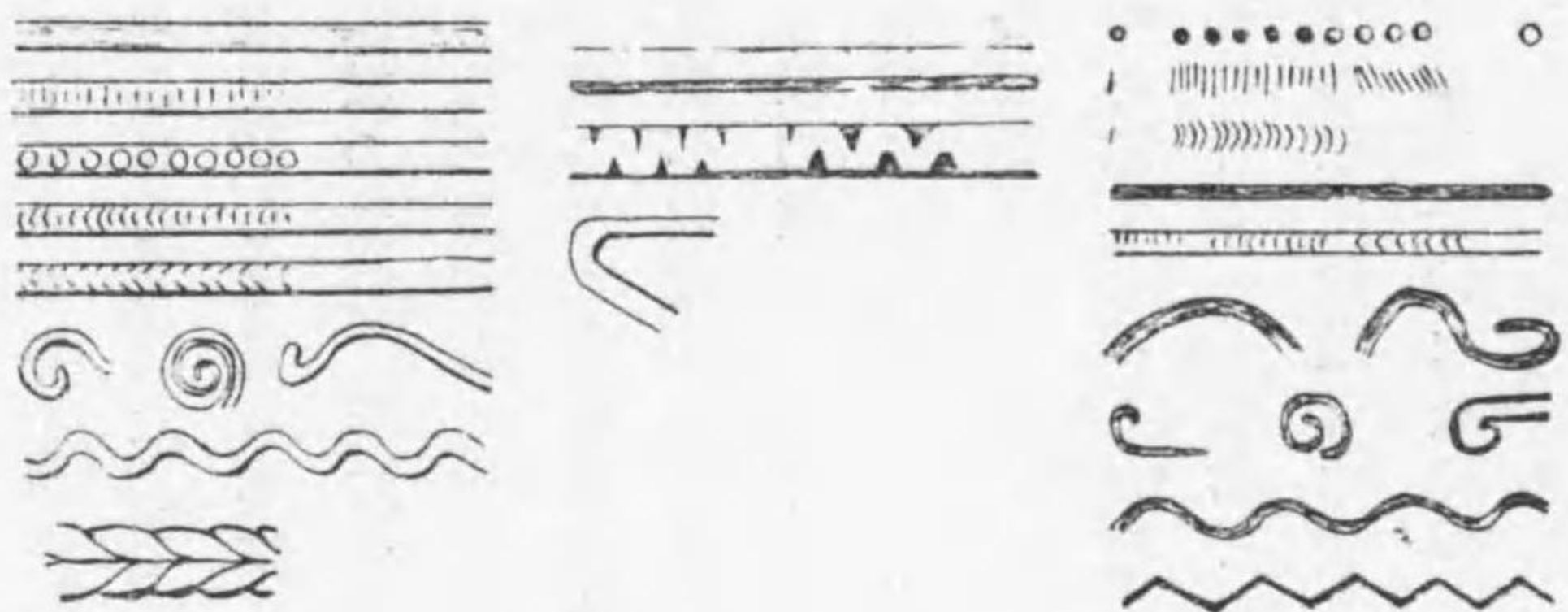
第三 土器面を刻み、その刻部を紋様のポジティブとする。

第四 土器面に何物かを押捺しその捺痕を紋様とする。

彩色象嵌或は狹義のスタンブ法等による紋様表現は見當らない。

第一法には粘土紐を貼付けた儘のものと、一旦貼付けた紐を補修してあたかも器體から隆起したかのやうに表はすものとの二種がある。殊に後者が多い。事實器體面の粘土を隆起させた例も稀にはある。第二法にも先端鋭利な器具で今日の篆刻のやうに鐫刻する法と、櫛目の如く先端が揃つた幾本かの器物で土器面を掻き相隣る器間に隆起線を生ぜしめる法と二種ある。第一第二は紋様が器面から浮上つてゐるので浮紋と呼ぶ。是に反して第三は器面に沈刻されるのであるから沈紋と呼ぶ。第四は結果から見れば沈紋であるが、性質上捺紋と呼ぶ。以上四表現法は或は單獨に或は併用される。併用される事が普通である。

紋様の成立 上述表現法によつて一つの紋様が成立するには三つの段階を要すると考へた。素材分子單位と假稱したのが夫れてである。素材とは線點弧渦卷の如く紋様の骨子となるものを指し、分子とは幾つかの素材の集合であり、單位とは夫れ等素材の結果によつ



第三十圖 紋様の素材

て初めて紋様としての完全な態容を具へたものを指す。固より此紋様分解は便宜上の考案で、必ずしも本邦全般の土器紋様研究には適用し得ない。或種紋様は素材のみにて、又或種紋様は分子のみにても成立してゐるのである。けれども本郡の主要土器にあつては紋様複雑にして斯る組立を介して見るが便利である。

紋様の素材 第三十圖は本郡土器紋様に通有なる素材を抽出したもので、これ以外にも存するとは勿論である。左列は表現法第一、中央は同第二、右列は同第三による場合の素材である。是等の組合せは千姿萬態の紋様を構成するが、素材の組合には一定の約束が存するもの、如く、素材の採擇が紋様々式と關係あることも明かである。

紋様の様式 素材分子單位が組成せられ、紋様は成立する。成立した紋様全體の態形を様式と云ふ。本郡土器の大部分は吾人が曩に『諏訪史』に於て「器形が概して筒形である關係上、紋様に中心點を有つてゐない。従つて中心點から出る放射狀紋様は殆んどない」と發表した所と一致する。中心點を有つてゐないにも拘らず、素材分子單位がバラバラに層序なく置かれる所謂散布紋様は極めて寡い。僅かに羽廣發見土器(圖版第二)に見得るに過ぎぬ。と同時に同一單位を横に連續させる連續紋様も亦殆んど無い。多くは同一單位を單に横に並列させた並列紋様に屬し、相隣る單位は部分的には結合するが、各々獨立してゐて連續とはならない。

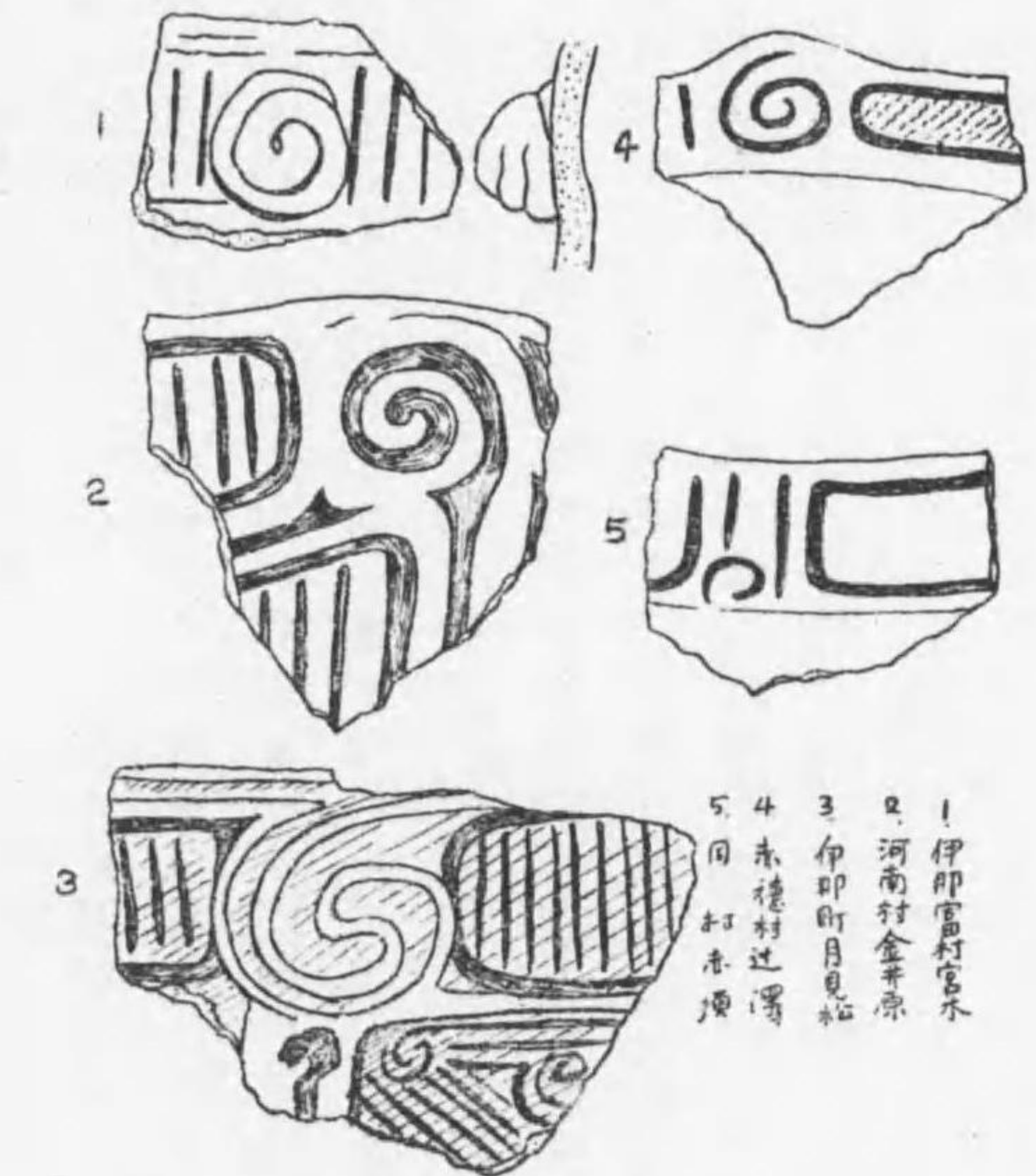
五 土器の進化

一言にして石器時代と云ふも、或限定した時ときを指すのではない。時代じだいを指すのである。即紀元

前何千何百何十何年の歴史的事實ではなくして、今より約何千年前を下限とし、之とても漠然たるものであるが、夫より何百或は何千の星霜を測る永い永い時代の文化史的事實である。其永さは今にして推測する事は全く不可能である。只永い事だけは考へられる。随つて其永い時代じだいに文化的交替の行はれた事は考慮すべきで、殊に變化し易い土器の如き其初源より終末迄同一軌にあつたとは考へられない。必ずやそこに改變ある可きである。然も土器は時間を超えた人為的改變最も容易であつて、例へば同時に同地方に於て作られた土器にても型式的に前後關係を生ずる。而して此土器改變は斷絶的のものでなく、必ず不明の法則の許に行はれて行く一つの連鎖である。是を土器の進化(及退化)以下單に進化と云ふと名付ける。土器の進化は恰も生物に進化あるが如く、漸々徐々に行はれて行く。土器進化の研究は層位學的方法Stratigraphical methodと型式學的方法Typological methodによる外はない。前者は遺跡の發掘を必要とするから本郡今回の調査に於て此方法による事は不可能である。されば型式學的方法により進化の形迹を追ふて見る。

形態の變遷進化の過程に就いては形態論の所て理論的見解を述べたから略する。厚さは型式學的に古式のもの程厚く、新式のもの程薄くなる傾向がある。これにつれて土質は前者が粗鬆で後者が精緻であり、色調は前者が褐色強く後者が黒味を呈する。紋様は浮紋の顯著なるもの程古式で、沈紋のもの程新式である。従つて浮紋を沈紋に移したに過ぎないと思はれる共通の様式を具へるものにあつては後者程紋様が崩壞して行く。この道程は理學博士松本彦七郎氏が早く、凸線模様(浮紋)より凹線模様(沈紋)への推移を考へたのと一致する。且つ同氏は紋様野が上昇して遂には消失する事實を各地貝塚の分層的發掘に基いて提唱されたが、今此考察を藉り來つて紋様野

の進化は説明される。即ち全面を紋様野とするは初次の階梯次に紋様野は次第に上方へ移り、胴部頸部と漸進し遂には口縁更に内面へと縮少され、やがて理論上消失する。上述各種の進化中最も顯著で且つ興趣を含むは紋様である。傳統のある紋様には過程があり、歴史がある。其過程歴史は生物に進化ある如く停止する事のない流動である。ハッドン氏は其著『美術の進化』に於て美術主として裝飾紋様に就てを研究するに二途あり、一は美學的方法他は科學的方法である。前者は美術の理法『Canons of Art』を究めるにあるが、後者には物理學的分野と生物學的分野とあり、



第三十一圖 土器進化の例

美術をして生物學的研究の對象となし得べしとなし、遂には美術は原形質の一作用に過ぎずとまで極言してゐる。其生物學的研究とは實に紋様の進化過程の追従であつた。紋様進化の一例として表現法の遷移を示めず。(第三十圖) (1) 初め粘土紐を渦巻に巻いて貼付けた儘のが、(2) やがて修正が加へられて土器面から隆起したかの如く表されるに至り、(3) 續いて渦巻は幅を擴張して二重となり、(4) 遂には其ネガティブの部分ボジティブとなつて沈紋に落ち、(5) 旋轉數も減ずる、『諏訪史』に掲げた進化經

路例の如き材料も揃つて本郡から發見されてゐる。以上の各種進化は必ずしも並行し又時に従ふと限らない。又繼起的のものでもない。けれども今本郡より發見する無数の土器を採擇配合すればかくの如き結論に導かれ、しかも他地方に於ける事實と、本郡に於ける諸種の事實との相關關係により察するに之等進化は又多少時の隔たりを示現するかと思はるゝ節もある。

六 土器型の分類

上述の如き土器の諸性質を通して本郡發見の土器の全體を觀察すればそこに幾つかの型或は群の存する事に氣附く。茲に土器型の分類の必要を生ずる。由來分類 Classification とは經驗せる對象を其類似に従つて一つの類概念の下に纏める事であるが故に其内包をなす徵表中に普遍的性質と變化的特質との存するは必定である。されば動物學、植物學、礦物學、化學等の如き自然科學に於ける分類にも變化的特質の處理如何によつて相違を生じ、分類法は人によつて異なる場合を尠しとせぬ。況や土器は人工物であつて自然界に於ける如き嚴密なる法則下にあるのではないから分類の困難なる事上記諸科學の比ではない。けれども土器を科學的に研究せんとすれば多少の人爲的不自然さは忍んでも之を行はねばならぬ。次にその分類結果を記す。記述に多少の前後があるが、之は材料の關係に因る。

第一型

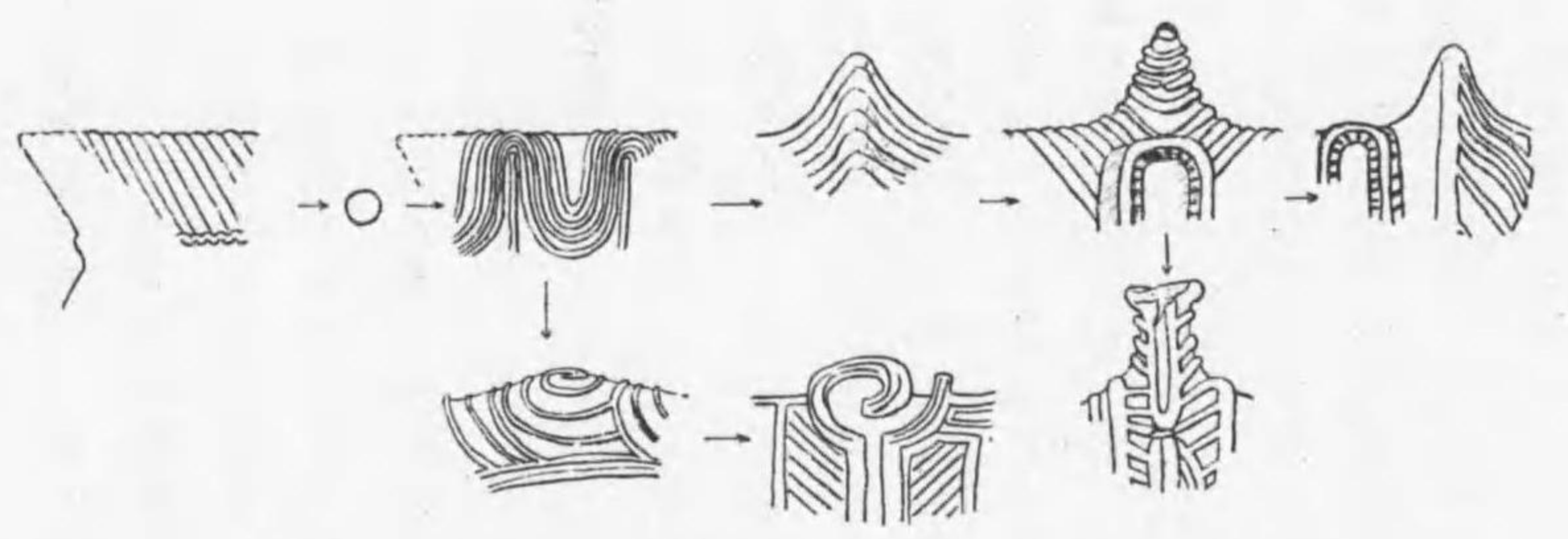
其基本的土器は圖版第二十二の 3・4 に掲げた。器形は開く口縁、縮れた頸部著しく膨らんだ胴部を有する。高さは大抵其の最大徑常に口徑と一致する。又口徑は常に底徑の二・五倍である。

厚さ概して厚く、色は赤褐又は黒褐色を呈し、口唇は幅廣く平なるか(三津木及御園例三重になつてゐる。(所洞澤岡例等紋様は表現法第二により、その好典型とする事が出来る。寫真に見る如く相接して並行する條線が恰も籠目の如く表はれてゐる。就中3の三津木出土土器は口縁上より底に到る迄此種の紋様を以て充たされてゐる。伊豆大島及諏訪郡玉川村荒神より發見した本型土器は態容紋様に於て理想的である。4は胴部以下布目となり、5は並行沈紋と化してゐる。頸部には必ず籠狀の浮紋を環し、そこから紐を垂れた様な波状或は曲線の浮紋が置かれ、兩者の會合點には多く縛目を模したかと思はれる留がある。本型土器は形紋様より推して、篠竹柳枝の如き植物性の原料によつて編んだ籠の類を模して作つたものと考へる。頸部の浮紋の如きはその縊繩の便化された物であらう。是等標式的の物を第一類とする。

同圖版6及圖版第二十三13の三例は本型に屬せしめ、第一類と異なる點あるを以て第二類となした。而して第二類は形態紋様より見て、第一類の傍系に外ならず、且第一類より後出的のものである。其形大體に於て第一類と共通し、紋様も條線並列を中心とする事第一類に等しい。形態が第一類に於ては口縁より頸部迄は直線的であつたが、第二類では彎曲し初め、頸部は縮約せずして直ちに胴部に移行し、胴部は筒形となる。紋様には他型の要素を混入する。是等諸點は第一類に比して理論上後出的なることを證する。又同上圖版4の破片は其形態紋様が非常に相違するが、第二類の變化したものと思はれる。第一、第二類に於ては把手絶無である。兩類を發見した遺跡を擧げる。

第一類 南箕輪村宮ノ上伊那町宮ノ前富縣村三津木手良村所洞

第二類 南箕輪村七久保村富縣村北福地御殿場同村新山宮原河南村金井手良村澤岡



第三十二圖 第二型土器口縁推移假想圖

第二型

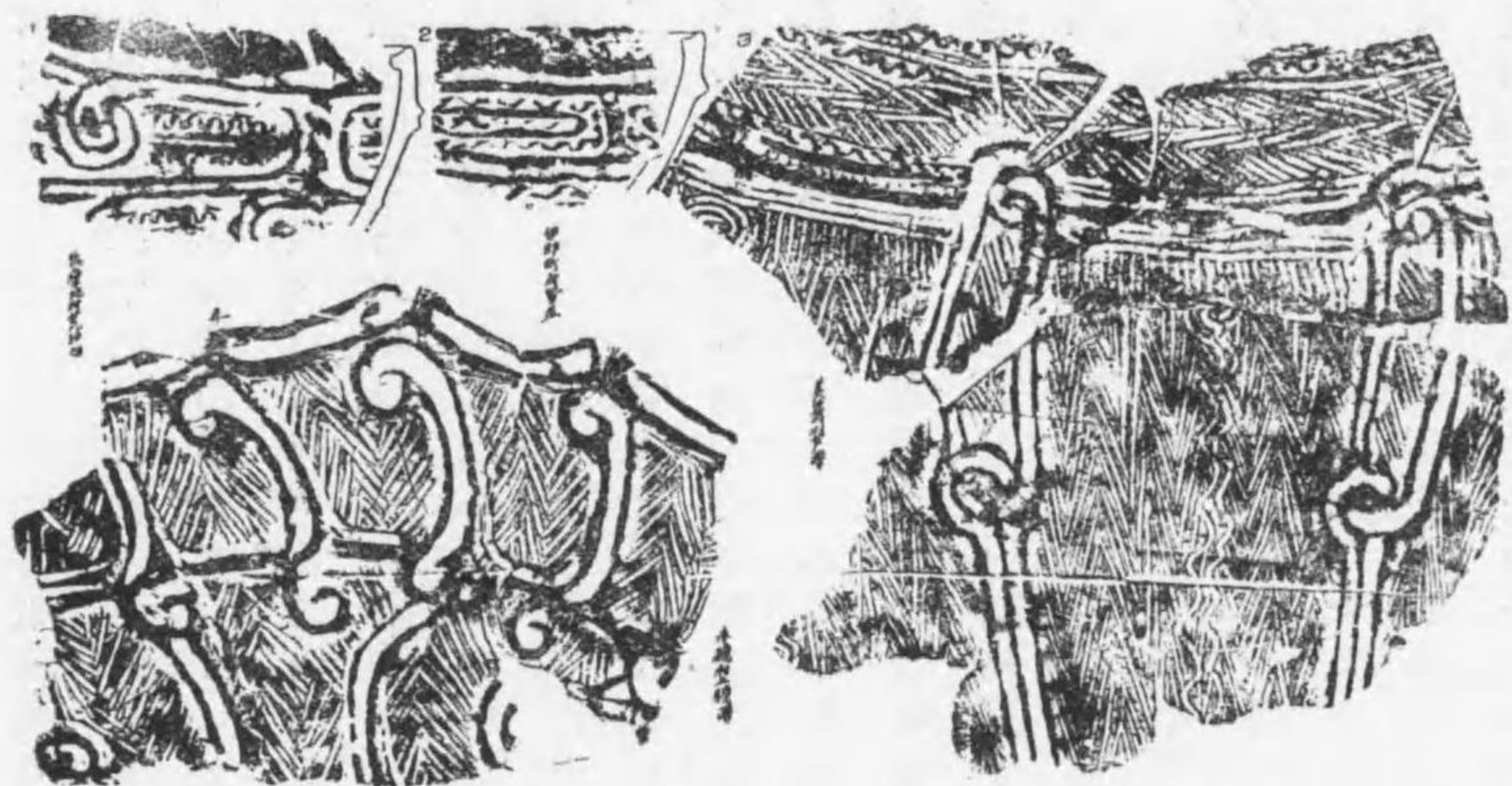
圖版第二十三2に示す土器は底部を少々缺損してゐるが、現在高一尺八寸、口徑一尺二寸に達する大形を具へ、地下二尺の深さより發見されたと云ふ。この土器も亦第一型第一類の傍系と看做し得るが、顯著な特質を派生してゐる爲、第二型とした。第一型の第一及第二類は中間物を介して連絡させ得る。稍著しい頸部の溢れ、口縁の内轉、胴の膨れ等形態に於ては明瞭に第一類と連なる。頸部には縊繩様浮紋に代ふるに幅廣き無紋帶を環らす。頸部上方の紋様は第三十二圖の進化過程假想圖に因て追跡し得る。頸部以下は並行條線沈紋に重ぬるに複雑な絡繩様浮紋を連ねる。之は他型土器の紋様要素が這入つたのであるが、大體に於ては第一型第一類の波状又は曲線の浮紋を複雑にし、且整理したものと思はれる。頸部無紋帶と絡繩様浮紋との會點には留に該當する渦卷を配する。只此土器の特異なる點は、口縁の角狀突起と、體側(圖版に於ける右側)に縦に纏絡する繩様附加物とである。前者は蓋し上圖の左端より右端迄の經路を経て出現したものであらう。後者

は種々なる點より本土器製作者の技術優秀なるを認められるが故に、紋様をして器物より立體的に浮上がらせる事に成功したと解し得る。本型土器の發見地は次の如くである。

中箕輪村王墓・南箕輪村宮上西箕輪村小花岡伊那町宮ノ前同町原垣外西春近村木裏ヶ原赤穂村上穂澤同村丸山南上片桐村有平南同村日曾利伊那村上ノ原富縣村御殿場同村高岱美篤村ゴウジラ垣外同村笠原垣外長藤村板山朝日村山寺

第三型

本型の典型的例として圖版第二十五に掲げた土器を用ひる。全形概ね屈曲に乏しい上方に開く深鉢形で、口縁に近く多少内屈する。口徑は底徑の二倍位である。紋様野は全面に渡るも底部には及ばない。紋様は必ず上下二區に分ち、上區には三個乃至四個の渦卷を等距離に置き、各々其間に長方形を挟む、長方形内は種々なる紋様分子を含む。特に水平なる直線的波狀線紋が多い。又或物には渦卷の代りに絢繩文を附してゐる。先に第三十一圖に掲げた諸例は皆本型土器の上區紋様に屬する。下區には上區渦卷の下位に渦卷の結合よりなる分子を浮紋を以て表し、浮紋以外の場所は放射線又は並行線羽狀線よりなる沈紋の地紋様紋様に於て第一義的要素とならず、純粹の地紋様は又背景紋様とも呼ぶ事が出来て主紋様の背景となつて主紋様を浮彫的に見せるに役立ち、又填充的性質をも具へる詳しくは諏訪史第一卷二七九—二八〇頁參照を以て填充する。同上圖版は本型に屬し、紋様は稍簡單に墮したが、なほよく全容を示してゐる。本型土器の破片が多數發見されるにも拘らず完形に乏しいのは器形の然らしめる所らしい。然して破片に表は



第三十三圖 第三型土器紋様拓影

れた紋様より察すれば、本型土器の紋様は變化性に富んでゐてバリエイティが多い。第三十三圖は大破片の紋様の拓影である。本型土器には把手の類が發生しない。僅かに新山發見例に於て口縁に山形の小隆起を見るに過ぎない。而してこの小隆起は必ず上區渦卷の上に存する。分布は次の如くである。

筑摩地村荒神畑川島村門前西箕輪村吹上伊那町月見松同町伊勢並赤穂村富士山同村赤須同村上穂澤飯島村堤窪七久保村北村片桐村牧ヶ原富縣村新山河南村金井同村下山田小學校敷地伊那里村中尾美篤村芦澤手良村宮原手良村所洞

最後に本型土器の器形紋様の示す劃一性より樹皮の如きもので作つたまげ物類をモデルとしたのではないかと憶測する。上區はその縁紋様、下區の渦卷は今日黒龍江沿岸のゴルド族等のなすが如き縫取紋様を移し表はしたものと見得る。而して放射線等の地紋様は樹皮類の表面の目を圖案化したものではなからうか。

第四型

圖版第二十四一に收めた河南村金井立小路發見土器を標式とする。形態は第一型第一類に等しい。或は姉妹關係を有するかも知れぬ。底部を缺く現在高一尺五寸、口徑一尺五寸、頸周三尺五寸、胴周三尺九寸に達する大形土器である。頸部より上は無紋、頸部は幅廣く等距離に環狀把手三箇を附け、各把手を連ねて數條の浮紋列帯がある。頸部以下即ち胴部は全面を布目紋を以て被ひ、その上に兩端を渦卷とする半圓形の浮紋とその半圓の中心を通りて縦に下る波狀線浮紋を配す。而して各々の渦卷は環狀把手の下位にて相隣るものと頭を對する。故に本土器の紋様は三單位である。頸部の環狀把手は恐らく下位の渦卷から遊離したもので本來は渦卷である可きものと思ふ。この考へを確め得る破片が同じく金井より發見されてゐる。今吾人の手許には是以外に本郡の他地方より出た本型の資料を有たぬ。がこの形式の土器は諫訪郡平野村海戸東筑摩郡中山村申斐國北巨摩郡穂坂村其他各地の遺跡から殆ど符節を合せる様に酷似した土器が發見されてゐるところを見ると一型を作り得ると思ふ。最後に既記の如く金井發見の土器は地下三尺の所に石皿を蓋として直立してゐた事を附記する。

第五型

形態に於ては圖版第二十八紋様に於ては圖版第二十五下段に示す土器を夫々標式とする。共に全形でないのを遺憾とする。前者は石棒の條に述べた如く宮田村中越に於て大石棒と共に發見され、今は江見水蔭氏の收藏に歸してゐるが、今日世に知らるゝ顔面把手附着土器の唯一例とし

て貴重なものである。後者も亦殆んど同一個所より出で紋様の優秀なる點に於て屈指のものである。本型土器の全形を推すに足る資料はないが種々綜合して考ふるに、少くとも胴部より上は圖版第二十八の如く器形が屈折に富む。口縁は直線的のもの、第一類多少内曲するもの(第二類)とある。土器の厚さは非常に厚く特に口縁は甚しく、従つて口唇は幅廣く平滑である。紋様は幅を有する帯の連續で、施紋法は表現第二により、技術は正に絶頂に達してゐる。布目紋は第一類には殆ど絶無であるが、第二類には局部的に存する。但し主紋様に表はれぬ。紋様の態容表現法は或點に於て英領ニューギニア、又は北亞米利加西北岸地方に盛行するものと類似してゐる。本型土器の分布は次の通りである。

川島村門前、中箕輪村、王墓、西箕輪村、大泉、新田、南箕輪村、宮ノ上、伊那町、月見松、西春、近村、柳澤、堤宮田、村中越、赤穂村、丸山、南飯島村、堤窪、富縣村、中新山、今泉、河南村、金井、原同村、八幡原

本型土器で特筆に價するは顔面若くは夫に類する大把手が口縁に存する事である。中越發見土器を見るに顔面把手の顔面を相對して附着(片側は脱落せしめてある。其起源は未だ考察し得るに至らない。思ふに本型土器は製作技術の最も圓熟せる時期の所産であつて、形態、紋様の特異の發達は把手をも刺戟してかゝる異常なる發展をうながしたのである。即ち紋様が幅を有する爲めその感じが立體的になり、遂ひに一步進められて器體から浮上り一種の把手様のものを形成するに到つて、その上に移り來つゝ紋様中偶々顔面に共通するものがあり、技術の卓越と土偶製作の觀念はこれに結合して最後に顔面把手となつたものであらう。その分布を見るに

中箕輪村大出(圖版第二十九)、宮田村中越(圖版第二十八)、飯島村高尾(圖版第三十)、片桐村竹ノ上(圖版第三十一)、富縣村南福地



手把面顔村坂穂 圖四十三第

(圖版第三)

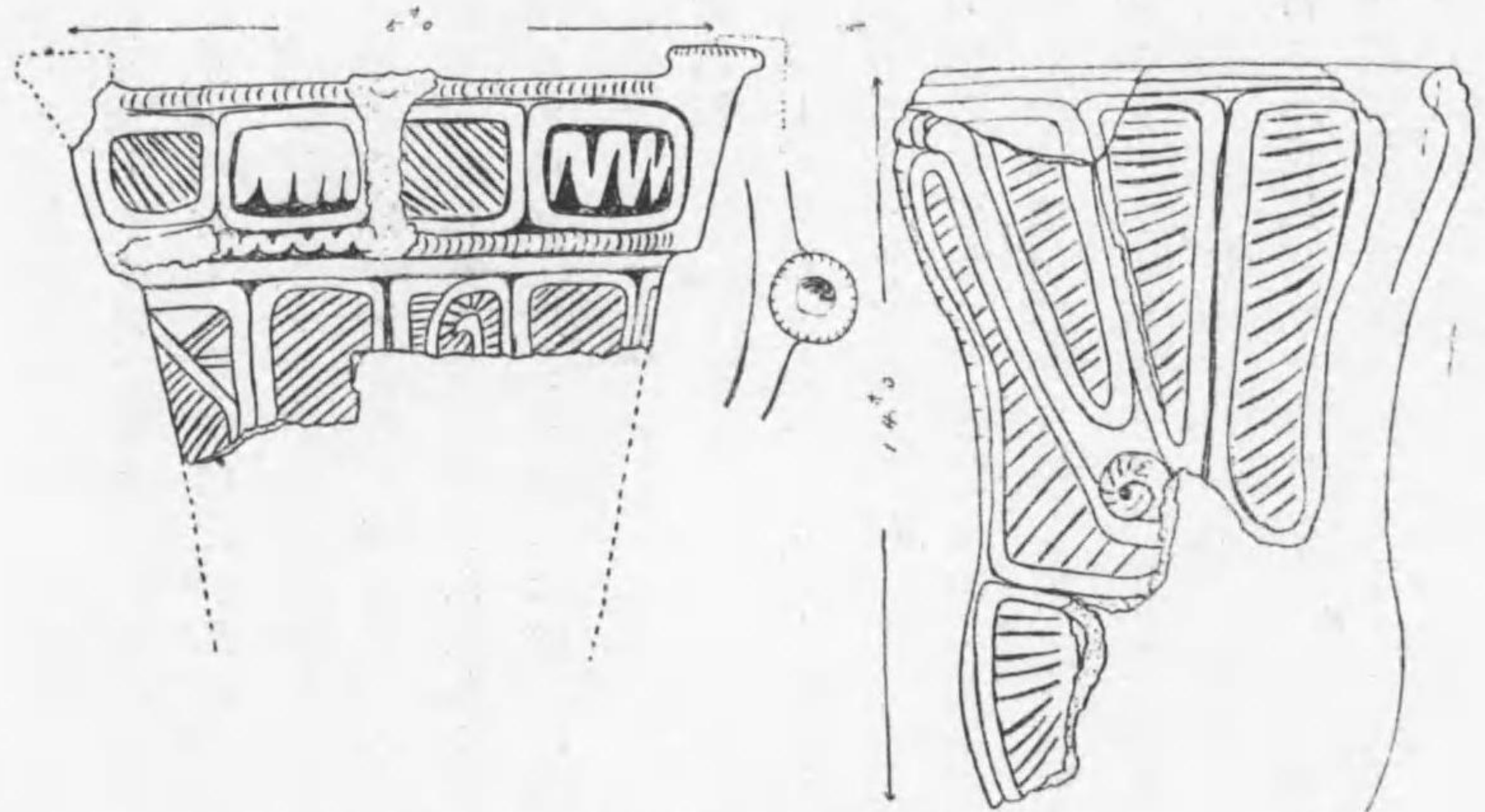
顔面把手に類似の把手の分布は、川島村門前宮田村中越南向村日曾利河南村金井美和村非持中垣外

飯島村高尾出土顔面把手は上肢或は下肢までも表現ある點は甲斐國北巨摩郡穂坂村出土品(四圖第三十)と共に稀有例なるを附記する。

第六型

完全品が乏しい爲形態に依らず主として紋様を基礎とする。類型的例として圖版第二十五1、2をとる。共に伊那富村北大出神明神社境内竪穴跡から發見された。形態は之等の土器及紋様の性質上殆んど屈曲のない筒形であると考へられる。但し口縁は概ね内曲する底部は2に於て特殊な角張りを認めるが、同様な底部は本型に屬する長藤村板山出土品にもある。把手は殆んど發達しない。僅に口縁上に小隆起がある事が多いあるに過ぎない。この型に屬する土器にして諏訪郡川岸村廣畑發見品は第一型の形態を呈してゐる。紋様の特徴は上下を劃られて帶狀に横へ擴つてゐる事、布目紋が絶無なる事、紋様の骨子は縦に平行する條線紋である事、多く一紋様帶内には楕圓形楕圓形等が數單位並んでゐる事等である。條線紋は屢々單調を破る爲め切込みを作つて凸凹紋としてゐる。本型土器の分布は次の通りである。

川島村門前伊那富村北大出神明神社境内竪穴中箕輪村王墓西箕輪村羽廣南箕輪村宮ノ上伊那



器土型七第 圖五十三第

町山寺福澤洞西春近村柳澤堤片桐村上片桐村子地山、南向村日曾利伊那村栗林垣外河南村勝間堀伊那里村、中尾長藤村板山三義村山室久保美簗村芦澤ゴウジラ、垣外東箕輪村

第七型

模式的例として完全に保存されたものがない。破片としては第三十五圖に示す二土器はよくその特徴を具へてゐる。郡外では諏訪郡米澤村鹽澤發見の土器に標式となし得るものがある。形態は概して筒形であるが、伊那富村北大出内城發見の本型土器(圖版第三)は鏡の如き形をしてゐる。一般には比較的薄手である。把手類の發達を見ない。紋様は吾人が補綴紋様と名けたもの、即ち紋様野を隆起せる條紋にて方形長方形三角等に區劃し、その中を布目紋、平行線紋、必ず斜交するか水平なるかであつて、垂直的なるは殆んど絶無であるを填充する。なほ區劃内に紋様を缺く少數例があるが、その場合には何等かの方法で單調に失するを避ける手段を講じ

てゐる。又更らに紋様の緊張と複雑化を講ずる爲め、區劃の隆起せる條紋を折込み截込み或は渦卷を配したりなどする。分布は

中箕輪村王墓西箕輪村上戸經塚下伊那町伊勢並び飯島村町屋飯島村高尾河南村金井同村八幡原伊那村上ノ原東箕輪村知久澤同村高谷同村上ノ平朝日村山ノ神

右の内點を附した地方發見の本型土器紋様を見るに崩壊分散して退化的傾向を示す。就中東箕輪村長岡高谷遺跡は吾人親しく踏査したが採集する大部分の土器片が退化的未期的特徴を示せるかの如く見えたるのは本遺跡の位置を暗示するものと考へられる。

第八型

概して大形であるのと、形が曲折して保存に難い爲めに全形を存する例がない。把手及口縁部より胴部へかけての状況により分類する事が出来る。圖版第二十四の4は略々全狀を推すに足る大破片である。形態は殆んどすべて第一型の如くキャリパー形を具ふるものゝようである。本型の特徴は把手の發達してゐる點であつて、顔面把手を有する第三型と敢て遜色ない。此把手は口縁部の浮紋渦卷の上騰離體したものである。多數渦卷が相纏絡しては立體的となる而して第三型の把手は多く圓錐形或は山形に發達するに、之は立方體に發達し、それに透孔が配されるのである。紋様組成は概して第三型に等しく上下二區を縮約せる頸部で分ち上區には方形と渦卷を交互に配し、下區は屢々布目紋を以つて被ふ事がある。圖版第二十四の4に於ては下區紋様は上區の半ばを傾し、爲に上區は上退して縲狀に環る其の渦卷の下端から頸へ弧形の遊離部が架して



第九型土器拓影 圖六十三第

ある。分布は
川島村門前伊那町中段宮田村三ツ塚西
赤穂村丸山南同村鹽木上飯島村高尾同
村堤窪同村町屋七久保村北村上片桐村
大栢？東春近村河南村勝間瀧澤同村金
井伊那里村中尾美篤村ゴウジラ垣外東
箕輪村南小河内福澤

第九型

材料寡少なる爲め其綜合的性質は決定し難い。圖版第二十六に示す伊那町小澤出土土器は本型の形狀を見得る唯一の例である。底部を缺く。現在高七寸五分、口徑七寸五分、最大徑九寸あつて、全形朝顔の花の如き形狀を呈し、其輪廓は優美なる曲線を描き口縁は二段になつてゐる。然るに之以外の本型に屬する破片に就て驗するに、口縁より胴部を有する物にあつては、屈曲に乏しく、且殆んど底面に直角的である。紋様は浮紋の幅が廣くなると共に殆んど器體と水平にまで其高さを減じて平滑となる。且連續せる浮紋間には布目紋を配し、或はその布目紋を二列並行する網糸紋に依てくぎり、其外側或は内側を擦消した物がある(第三十圖)。紋様大體の傾向は第七型に類似する。かく浮紋が高さを減じて器體水平面に歸して消滅し浮紋兩側の淺溝が之に代つて紋様の母體となり遂ひに純然たる沈紋にまで移つて行く(第三十圖)過程が認められるから、斯種土器が紋様

の進化上後出の型式なる事は想像される。小澤發見土器の形態が洗練されたる曲線美を示す所
以も亦ここに存するのではあるまいか。左に發見地名を録する。

西箕輪村羽廣古屋敷伊那町伊勢並び同町小澤西春近村安岡城宮田村駒ヶ原同村中越赤穂村赤
須片桐村西ヶ原上片桐村新田森南向村日曾利伊那村上ノ原東春近村長藤村板山

第十型

第九型土器に於て浮紋が沈紋化する過渡期の存するを知つた。本型は全く沈紋化した紋様を
有する土器中の一群である。圖版第二十二の手良村所洞出土土器を標式とする。形態は著し
い屈折を缺きなだらかに豊かなる曲線美を現じてゐる。土器の厚さは薄い。微かな布目紋刷毛
目紋の地紋に直線的な沈紋を配し、その所々を萎縮した渦巻として僅かに紋様の傳統を墨守して
ゐる。紋様としては第三型の流れを汲むものゝ様である。分布は

南箕輪天白西箕輪村羽廣伊那町福澤洞西春近村柳澤堤赤穂村上穂澤赤穂村赤須御射山原同村
赤須石メウガ飯島村町屋七久保村北村上片桐村東春近村河南村金井美篤村ゴウジラ垣外手良
村野口矢塚附近手良村所洞

第十一型

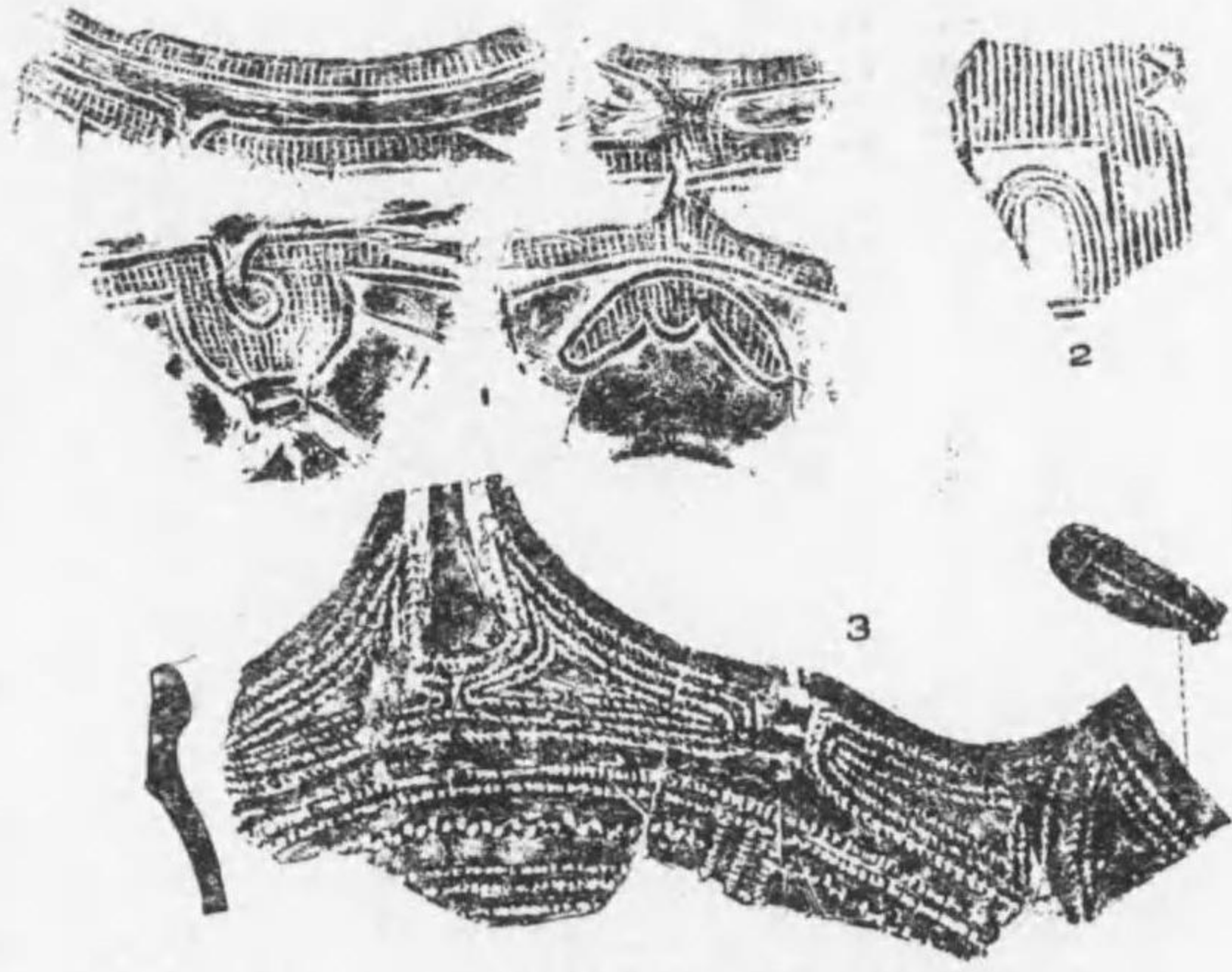
圖版第二十二に掲げた様な筒形の土器の發見は尠くない。高さは五寸内外に過ぎない小形
なもので安定がよい。厚さは大きに比較して厚い。特に底部が厚い。質は粗く、色は褐色を呈す

る。多く全面を布目紋を以て被ひ縁には浮紋にて繩様紋を一條乃至二條環らす。極く原始的な
型式である。手許にある資料により分布を見ると、

上片桐村有平東春近村河南村小原同村金井富縣村北福地御殿場

以上で本郡より最も多量に發見する土器、即ち本郡土器を代表し得る諸型に就て概述した。是
等諸型は孰れも吾人が『諏訪史』に於て厚手派土器として述べたものに屬して各型相互の間に
は必ずや或點に於て密接なる脈絡を發見し得る。即ち本郡土器の大勢は此の厚手派土器と稱す
るものに包括し得る。なほ次に二三の特殊例を擧げる。圖版第二十三は全形瓶形にして、然も
胴部には先端を缺く注口さへ附いて明かに土瓶形を呈してゐる。前後兩側には橋狀の把手が附
き、それに續いて浮紋帯が連なつてゐる。無紋部は平坦で滑澤あり、黄褐色の地肌の所々に黒色の
斑點が見える。口縁と胴部の境界には鐙狀の隆起があり、把手の上位には各二つ宛の小孔が貫通
してゐる。鐙狀隆起より上部及内面には塗朱痕が顯著である。殊に内面は甚しい。土瓶形土器
は關東東北に夥しく、爾地の地には僅少である。我天龍川流域地方にては諏訪は比較的によく、下
伊那にも多少存する。が土器所屬に於て此御殿場出土品と趣きを異にするものゝ様である。尙
朱色の色料を塗彩した土器は西箕輪村羽廣から發見されてゐるの外比較的乏しい。同上圖版6
に示す土器は口徑一寸九分高さ一寸五分に過ぎない小土器で、底は平ならず、縁に沿ふて波狀浮紋
があり、其下に不規則な沈紋がある。かゝる小土器は多くはないが本邦各地の遺跡より發見され
る。圖版第二十四は其形狀、紋様に於て優秀品に推す可きである。口縁下部に廂狀の突起帯あ

り、その下の一点の隙なき紋様は手法に於て第五型に属する。底部の癖は第六型に共通する。この土器は大體に於てマンロー氏が横濱市根岸町に於て発見した土器と類似する。⁽⁵⁵⁾ 圖版第二十五は形態紋様共に簡單であるが原始形と云ふより寧ろ手を省かんとする末期形と考へられる。圖版第二十六²は角張りたる瓶形の兩側に各二つの孔を持つ半月形の扁平な把手を縦に附けた珍しい形である。把手の上下兩端の位置に於て器形は屈折し、その間が紋様帯となつてゐる。紋様は前後面相似た渦卷直線曲線を分子のまゝ層序なく配置した沈紋で、沈紋の線内には節がある。紋様組成の概況は上記圖版第二十四³の土器紋様を沈紋化したような退化的のものである。⁽⁵⁶⁾ 同圖版³は鏡の如き稀有の形態にて口縁及胴部に帶狀の紋様を表はしてゐる。



影拓器土圖七十三第

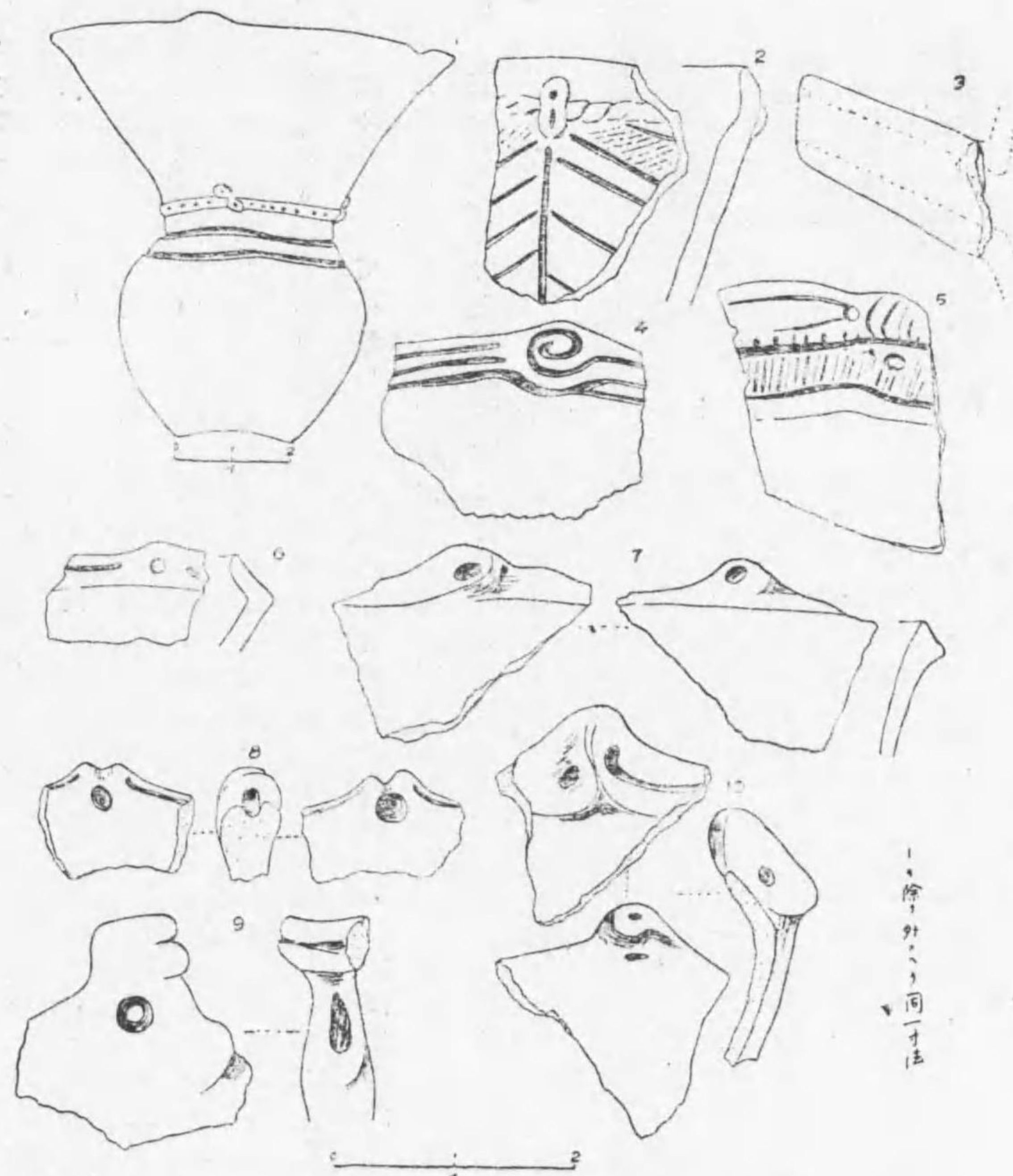
胴部紋様にては第三十七圖1の拓影に示す如き二單位よりなり。一單位は渦卷の下底部を突出せしめその先端に浮紋に紐を結びたる様を宛ら表示し、他の單位には楓葉の如き形を表はす。紋様内部は沈紋の格子目を充して居る。形態紋様共に特異であり、紋様から見れば硬化の傾があるから恐らく後次所産であらう。同⁵は上方開き、裝飾繁冗なる土器であるが恐ら

く浮紋部が強調された第七型に属するであらう。かゝる形式の土器は南箕輪村南殿宮ノ上よりも出てゐる。紋様が一步進んで沈紋化したとするならば第三十七圖³(赤穂村上穂澤發見)の如くなるに違ひない。同⁵は厚手造りの不細工な土器で色は白みがかり、末期臭ある土器で、内屈する口縁上に渦卷が一つ紋様の名残を止めてゐるの外、何等の裝飾もない。口縁上のみ紋様が存するは紋様の進化上後期に属す可きことは既記の通りである。其例は多く南箕輪村宮ノ上、七久保村北村等より出て、かつて顔面の表現なりとして發表した紋様も亦口縁直線紋の一種に外ならぬ。⁽⁵⁷⁾ 外形略々之に似て一種の釣手様の附加物ある土器^(圖版第二²)が飯島村から發見されてゐる。内屈せる口縁上には簡單なる直線沈紋が並走する。釣手は上下貫通する管状をなしてゐる。釣手の如き装置を施した土器は關東に於て往々發見されるが、吾人は「諫訪史」に於て夫と稍異なる諸例を擧げた。孰れも橋梁狀に土器口縁の兩端に架されてゐる。然るに本例は又是等とも異なるもので



手釣器土圖八十三第

ある。本郡出土の釣手の諸例を第三十八圖に擧げた。かく多數例の存するは斯種附加物を有した土器が尠からざりしを暗示し、只保存に難い爲め、完全に遺らなかつたと解される。第三十七圖²拓影に示す紋様(東箕輪村南小河)は上述の土器中に未見のものであるが、諫訪郡豊平村及び甲斐國東八代郡一ノ宮村發見土器の紋様に酷似するものがある。次には從來厚手派土器と呼ばれし土器と稍趣きを異にする土器群に就き記述する。



第三十九圖 第十二型土器

二四八
第十二型類
型と云ふより寧ろ類と云ふ可きかも知れぬ。斯の型選定に當つて從來唱へ來つた薄手派土器を此處に一括したのであるから、内容の價値は必ずしも前述諸型と等しくない。本型に包括した土器の類は本郡から餘り發見されず、従つて其間に必存すべき變種を分類し得るに至らない。本型土器の最も濃厚に分

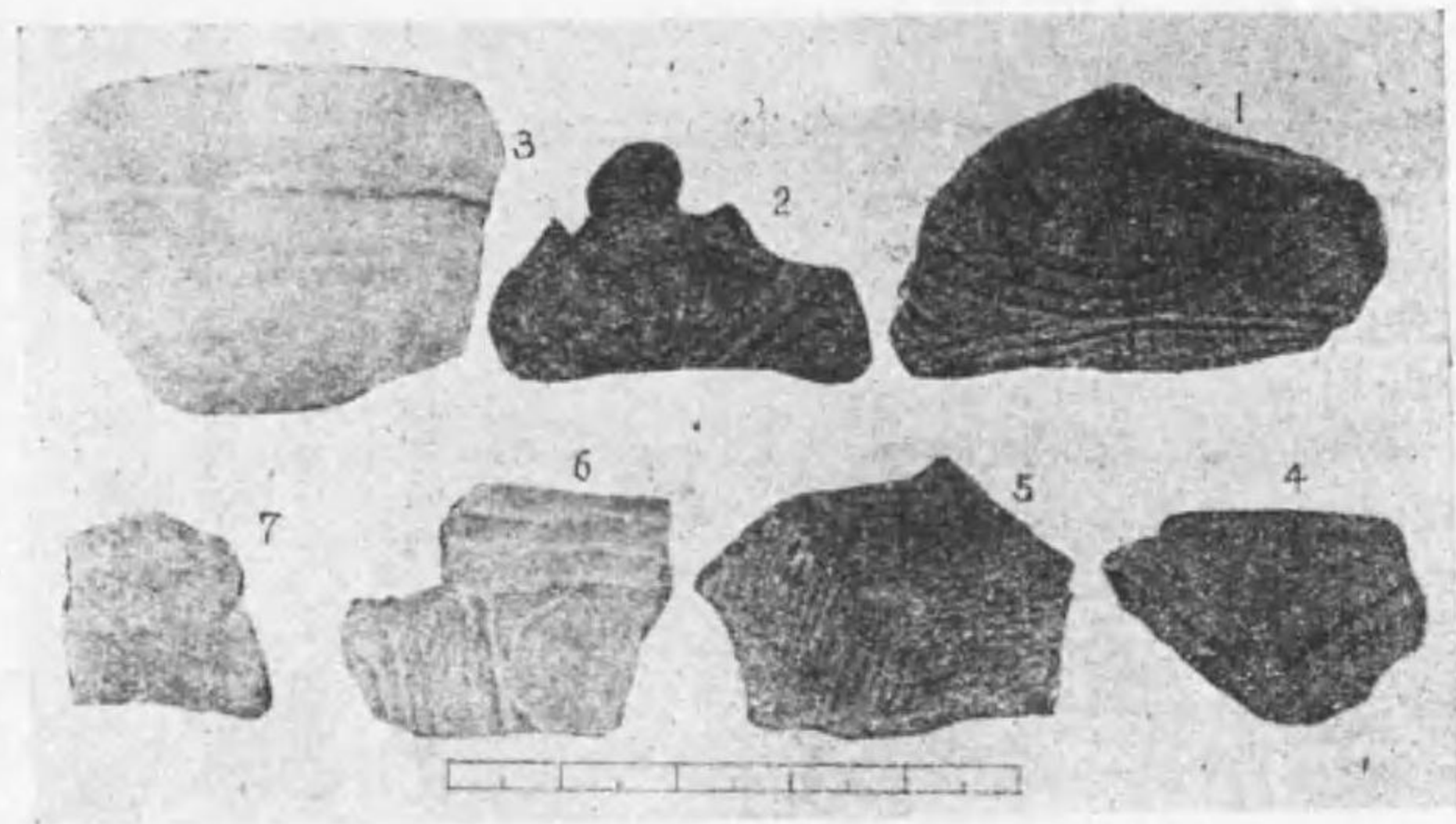
布するのは關東地方の海岸一帯の地域であるが、本郡に多少なり發見されるは彼此の間に文化的交渉の存せしを暗示する。けれども本郡から發見された量は極く微量で且著しい特徴もなく、この點に於ては諏訪郡より遙かに劣つてゐる。完全形として發見されたのは唐澤氏が早く中央學界に紹介した⁽¹⁶⁾下手良出土の壺形土器のみである。概形第三十九圖1に示す如く口は廣く開き、頸は縮約して胴部は圓い。口唇に小突起あり、頸部に8字形の留を有する細條浮紋と、その下に二條の沈線紋とありて環る。口唇の小突起は故坪井博士が綠瘤と呼びしもの、或は小把手の類の遺存したものである。8の字の留は同上圖2・3等にも認められ孰れも脊に刻みある細條浮紋に伴ふことは本型の故地とも考ふべき關東地方土器と軌を同ふし、縊繩様の器形紋様なりと想像される。形態上注意すべき二項がある。其一是土瓶形土器があつたこと、注口片が筑摩地村上ノ原及中澤村吉瀬第三十九圖5から發見された。其二是皿形土器があつたこと、同圖6の如き内面紋様ある破片が發見された。把手若くはそれに類するものは同上圖6—11に集めた。6より9までは一系列であらう。本型の大抵の土器は口縁がくの字形に内屈する傾向あるは注意すべきであらう。厚さは概して薄く、土質は前述所謂厚手派土器に比して遙かに細密であつて焼は固く、表面黒色、灰色等を普通とし、光澤を



第十四圖 土器拓影

一四九

帯ぶるものもある。紋様は下手良発見品の如く縊縄紋様あるものの外、多くは並行直線紋様であり、且つ所謂擦消縄紋(布目紋)が廣く行はれ、まゝ渦巻紋、曲線紋があつても二線にて布目紋をかこんで出来てゐるのである。分布は



手把型三十第 圖一十四第

筑摩地上ノ原伊那宮村宮木上ノ原同村上辰野中箕輪村松島西箕輪村上戸經塚下南箕輪村宮ノ上伊那町今泉伊那町南原宮田村中越七久保村北村飯島村本郷堤ヶ窪上片桐村有平中澤村的場同村小山伊那村上ノ原中館東春近村殿島上ノ段河南村竹垣外美和村石佛東箕輪村上ノ平同村竹の花同村福澤

第十三型類

第十二型と同様、諸種の土器を一括し、一部學者が諸磯式土器と呼ぶものを第十三型群とする。諸磯式土器とは相模國三浦郡三崎町諸磯貝塚より発見された各種土器を標準とするのである。第四十圖及第四十一圖に示す如きが之に屬する。此の第十三型に屬する土器は三浦半島武藏國多摩川南岸地方其他各地から発見されるが、完全に出土したものが殆ど無い爲、形態を知る事困難である。適例ではないが本型に屬せしめた圖版第二十七の飯島村上山発見土器は略々全形を窺ひ得る。此外

のものはずべて小破片である。土質粗く表面がざらざらして居り、概して赤褐色、黒褐色を呈し、厚さは中等(二分五厘)である。小把手も存し、諸磯貝塚発見土器の獸形把手と形を等しうしてゐる。(第四十圖)紋様は浮紋、沈紋共にあるが、浮紋は第四十一圖1の土器に見るようなものに往々ある。それは第二型の變化したものと考へられ、口縁はキャリパー状を呈する。沈紋は浮紋を沈線化したもので、その外筆軸の尻で捺した様な圓形がある。分布は、



器土型四十第 圖二十四第

飯島村上山美鷲村芦澤ゴウジラ垣外東箕輪村上ノ平朝日村平出山ノ神同村赤羽字上ノ原

第十四型類

内容は第十二、十三兩型と同斷。吾人が諏訪史第一卷に於て諏訪郡小口庄ノ畑発見土器を標式として庄ノ畑式土器なる稱呼を與へた類のものを一括する。完全型がない爲、形態を窺ふ事が出来ない。只僅に第四十二圖下の二例は稍形の整つた破片である。外觀は土質が比較的密であるのに、表

面がざらざらして粗鬆に見える。色は燻つたような淡褐・淡黒・チョコレート色等を呈する。裝飾は發達せず土器口唇を凸凹させ(第四十二、第四十三圖)の如き貧弱な紋様を施したものの、外口唇に添ふて帯狀に内面紋様を表はした位に過ぎない。分布は

西箕輪村中條テンシヨウ七久保村河南村美篤村澤ノ田東箕輪村上ノ平

以上十四型が本郡石器時代の土器を網羅し得たのではない。只比較的少量に存する同型群と特徴著しい同類群とを分類したのに過ぎない。勿論各型相互間を連絡する中間型と思はれる物又所屬不明の物も尠からず存するが之を執らない。只其内特記に價する二三を挙げて土器一般論を了る。圖版第二十七に出した土器は微かに頸部の分化を生じた特殊形を有し、口縁には相



第四十三圖 土器紋樣拓影

並ぶ二つの山形突起を挺出せしめる細帯とそれに平行する二條の浮紋を以て環らし、胴部には刷毛目一帯にある上に渦卷と弧三條の沈紋が巧みに配列されてゐる。厚さは薄く、内面及頸部の無紋部は磨いて滑澤を呈してゐる。この土器の形態、頸部より上の紋様、山形隆起等が東北地方に通有なる所謂陸奥式土器と類似するは特に注意すべき事柄で、胴部の紋様は本郡に普通なる浮紋の沈紋化したものと見るならば、兩地方の姿を示すものと云はねばならぬ。第四十三圖に示す紋様ある土器は伊那町山寺今泉上片桐村原畑伊那村栗林善達等から發見されてゐる。この紋様の表現

法に關しては研究を要するが一種の網の如きものを深く捺し込んだものと考へられる。

- 1 大山柏公爵「土器形態の基礎的研究」(人類學雜誌第三十六卷第八一—一二號 大正十年)に據る。
- 2 内曲、内屈(外曲、外屈)の語は理學博士松本彦七郎氏に據る。
- 3 詳細は『諏訪史』二六一—二七〇頁參照。
- 4 此語は濱田博士『通論考古學』大正十一年に據る。
- 5 松本彦七郎「日本先史人類論」(『歴史と地理』第三卷第二號大正八年)及同博士諸論文
- 6 A. C. Haddon, "Evolution in Art", 1895, pp. 306—308. の外紋樣進化の研究をしたものには H. Balfour, "The Evolution of Decorative Art", 1893 がある。
- 7 東京帝大人類學教室所藏。
- 8 『諏訪史』圖版第二十八參照。
- 9 此土器は明治二十五年五月同地の宮下鹿治郎氏の發見に係り同氏より二條公爵家へ寄附した。今は徳川侯爵家の所有に歸した。曩に原始文藝集第八輯七八四に收められた。
- 10 本遺跡よりは多數斯型土器を發見するが、紋樣變化に富み、注意すべきものがあるようである。
- 11 本遺跡から此型土器が數個發見されてゐるが、就中『諏訪史』圖版第二十六に納めた土器は完全で、形態が整美である。此土器は紋樣に大なる變化を示してゐるが明かに木型土器である。
- 12 此類面把手に關する詳細は『諏訪史』に報じた。今江見水蔭氏の藏品となつてゐる。
- 13 『諏訪史』圖版第二十六參照。
- 14 土瓶形土器に關しては近時中谷治宇二郎氏が東京人類學會例會に於て精細な研究を發表した。近く論文として發表されるから彼此對照すれば興味がある。
- 15 形態が略々似てゐる上に、紋樣は全く沈紋であるが、可成の共通點を有つてゐる。Munro, "Prehistoric Japan", 1911, Fig. 82.
- 16 唐澤貞治郎氏が同氏前掲報文に於て發表してゐる。
- 17 『諏訪史』圖版第二十六參照。

第三 土 偶

本郡内から數箇の土偶が発見されてゐるが、全體完全なのは一例もなかつた。左の諸例に就き説明を試みる。

圖版第三十一 1 は頭部胸部を存し、上肢下肢を缺く。顔面は平坦で鼻梁高く、窪みを以つて表はされた瞳らける眼、開ける口は一種の表情を帯びてゐる。其の背面には一見顔面かと思はれる沈紋が刻まれてゐる。胸部前面の著しく下方に乳房が附着してゐる(片方脱落)の外平滑である。背面には頸部に二曲線、上肢間に一直線が横走し、其の間に渦巻紋が表はされてゐる。胸部の横断面は楕圓形を呈する。

同圖版 2 は頭部破片である。顔面に於ては頭部と頸部との分異が明確でない。半圓形の眉は高く、寫實的な眼と三角に近い圓き口とは、1 と共通した表情を示してゐるが、此の方がはるかに實感的であり、カリカチュアに富んで居る。眉毛に並行する二沈線と額の中央を縦に下る三本の沈線とは眉の會合點に於て連なる。頰から頸へかけて斜に二線が表はされてゐる。是等顔面部の諸線は瞭の表現とも解し得るが、又顔面の表情をより效果的にする爲めの特殊表現とも考へられる。背面は頭部と頸部とに劃然たる分界があつて、頭部は無紋、頸部には五條の縦の線端が見えてゐる。

同圖版 3 は中箕輪村王墓發見と傳へられる頭部のみの破片であつて、古く唐澤氏によつて東京人類學雜誌上に發表された。顔面の表現法は著しく 2 と似通ひ、又顔面把手の顔面とも似る。背面には渦巻が刻みある浮紋で表はされ、その下に三條の縦線端が認められる。

同圖版 4 は胸部のみの破片で僅かに右側の上肢の一部を残してゐる。腹部が著しく縮約する。乳房の隆起を環つて、下方に下る二條の條線がある。體の中央から下方に縦に信州地方土偶通有の正中線が點紋を挟む二線によりて表はされてゐる。横断面形は下端破摧面に於て圓形に近い。但し背面に當る部分は幾分平たくなつてゐる。背面は素紋であるが、只下方に數條の線端が見える。この線は斜に兩側に分れて腰へ進むものらしい。

圖版第三十二 1 は頭部と下肢を缺く。左右に開いた上肢の先端は嘴形に終る。腹は迫り、腰は著しく張つてゐる。體の前面には二つの乳房が近接して隆起し、其間を正中線が下る。正中線の途中、腹部に臍かと思はれる圓い突起部があつて、そこで旋轉し、再び下降する。乳房から上肢端に二條の並行線が水平にあり、更に乳房下には同様二條並行線が弧形を描き、其の向つて左側からは一種の記章の如き紋様が垂れてゐる。腹部以上は大體に於て圖版第三十一 4 の土偶と似てゐる。腰部には正中線を二等分線とする三角形が沈線で表はれてゐる。背面は臀部が特に平たく挺出してゐる。前面乳房と上肢端間の二條線の存する部位の背面には同様の線がある。挺出した臀部には二條線がハート形に添えてある。圖版第三十一 4 の背面なる線端は恐らくかゝる表現の未端かと考へられる。

同圖版 2 に示す土偶は極めて簡単な形式で、左右に開く上肢と扁平なる胸部のみを止めてゐる。

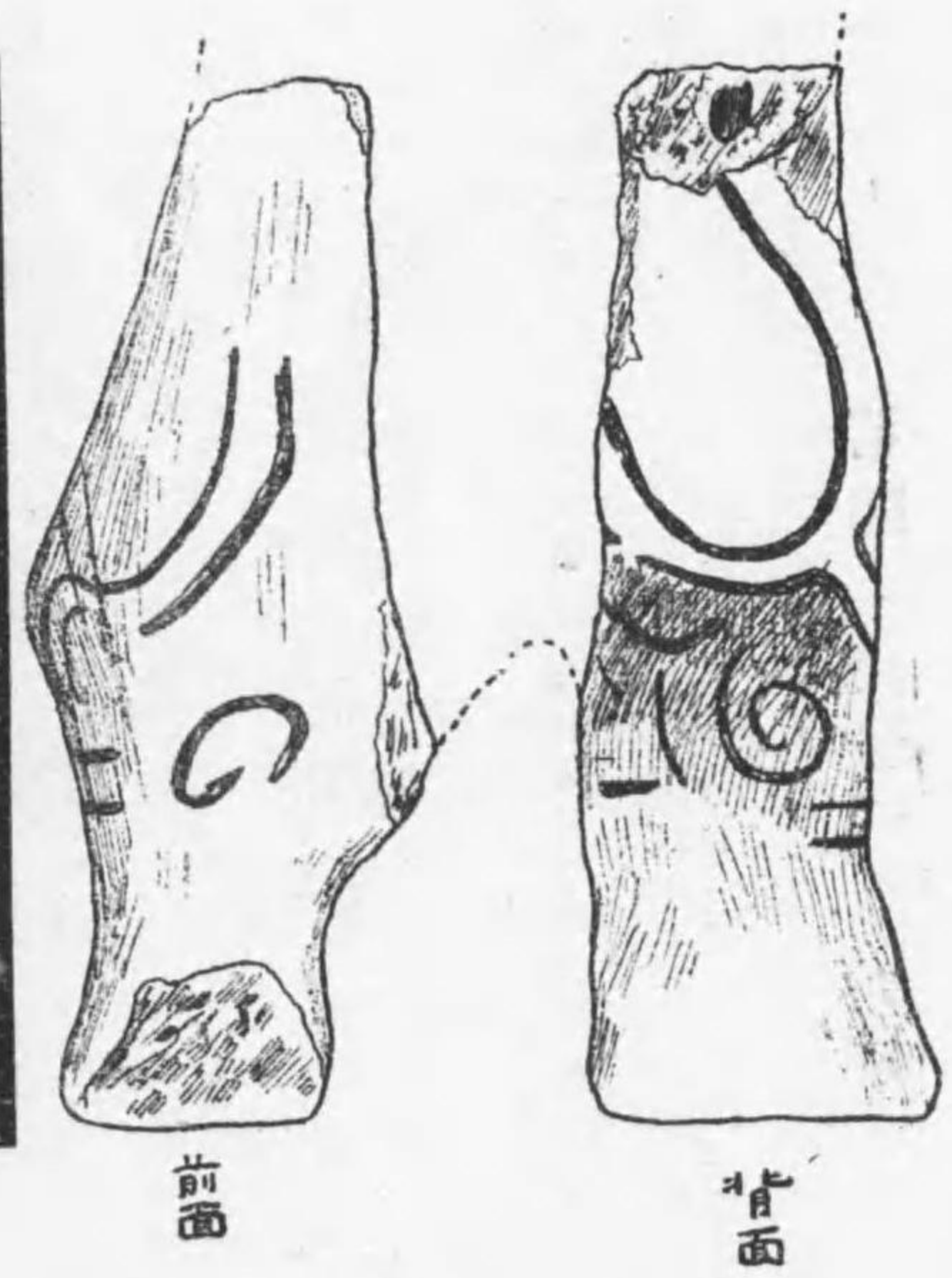
乳房と正中線との隆起以外には何等の表現もない。但し、背面の正中線に沿って多少凹み、その両側には破挫部に近く各三條の下方に開く竝行線の端が認められる。

圖版三十三-1は畸形の土偶で、注意すべきものである。頭部と下肢部を缺く。背面は平たく、前面は著しく膨隆してゐる。體の兩側は稍角張り、その角張つた點が上肢として表はされる。乳房間には幅のある正中線があり、その上端は頸部下方で左右に岐れ肩に至る。膨隆した腹部下方には三條の竝行線が半圓形を描いてゐる。體兩側にも竝行線がある。背面には下肢附着部より一段高い臀部に切込みがあつて臀部なることが適確に現はれてゐる。上方には微かな沈線が均齊に引かれてゐる。



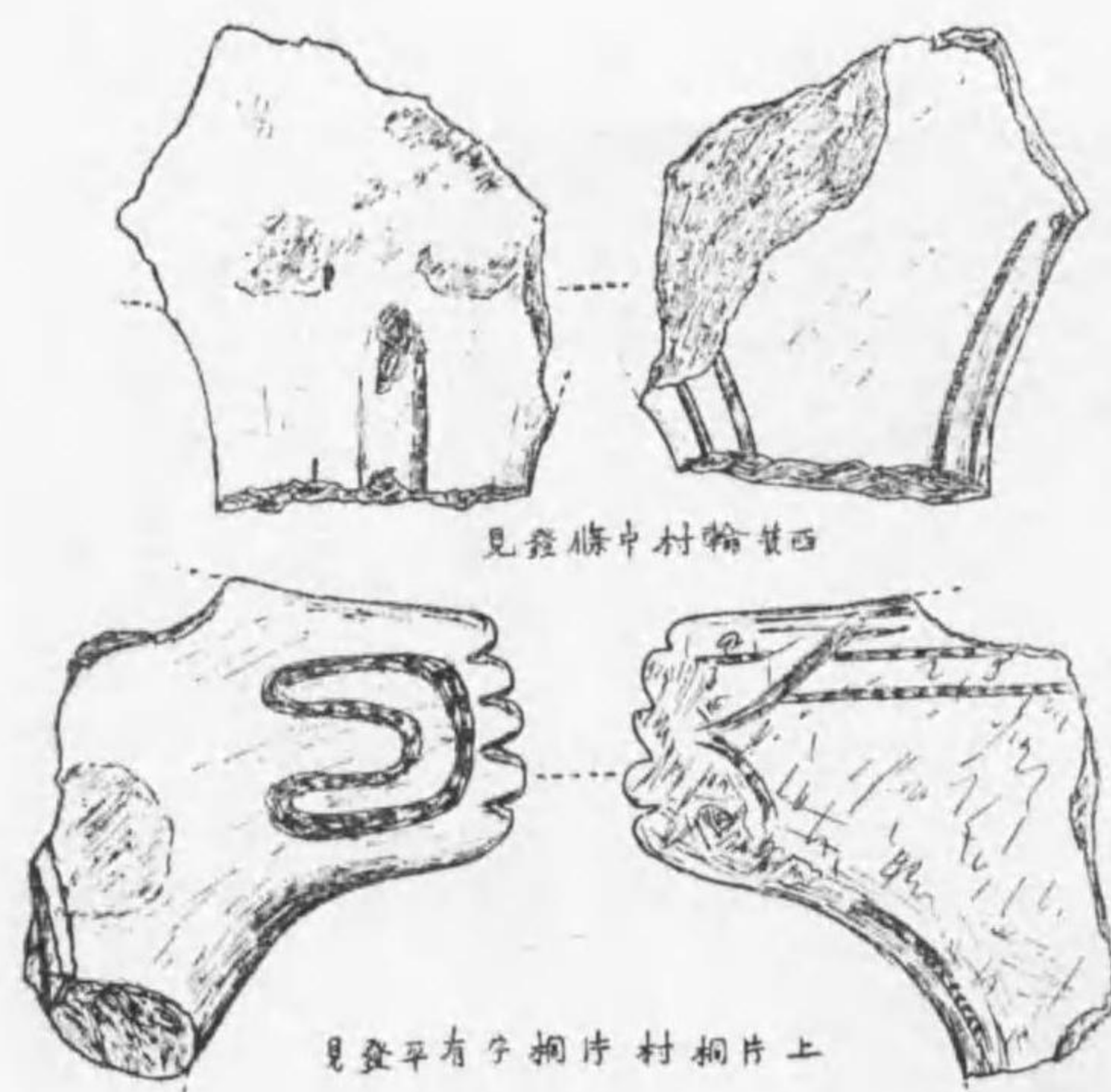
圖四十四第 堤窪發見土偶の樣紋

圖版第三十二-3の土偶下肢は破片ながら、その表現法に於て注意すべきものである。即ち細い胸部は前屈みてあつたらしく、臀部が阿弗利加のホツテントットやプツシユマンの女の様に著しく後方に突出し、その上面は殆んど水平に近い。従つて下肢は體の中心よりはるか後方に附いてゐる。太い下肢の下端は互に附着して平たく廣い底面を作つてゐる。蓋しかゝる方法によらなければ體の重心の位置の關係上、直立する事が不可能であつたのであらう。節ある沈線が或は直線に或は渦卷になつて均齊に施されてゐる。臀部上面には第四十四



圖五十四第 南箕輪村天白發見土偶(實大)

圖の様なハート形が等しく有節沈線で表はされてゐる。かく臀部を後方に突出させた例は他にもある。第四十五圖に出した例が夫である。遺憾乍ら右足のみしかない破片である。體は前例程前屈みてなく、只臀部のみを突出させてゐる。足は太く短く極めて安定がよい。紋様配置は大體に於て前例に似てゐる。以上の外に破片が二點發見されてゐる。一つは第四十六圖1に示す胸部破片で、その横断面形は稍角張つた楕圓を呈し、前面には乳房隆起の脱落した痕跡と、正中線の隆起、後面には兩側縁に沿ふ各二條の沈線が認められるに過ぎない。他の一は同圖2に示す如く、上肢(左)の破片と思はれ、その扁平にして幅廣き先端は切込みによつて五分され指を表した



第四十六圖 土偶破片 (二分の一)

ある。かく見來れば土偶分布に於ける本郡の位置は中量であつて諏訪地方の延長と見做し得るのである。

ものと考へられる。その前面には乳房の脱落したかと思れる痕を止め先端に接して沈線紋がある。背面には側縁に沿つて有節沈線紋が走る。乳房脱落部にあたつて破擁面上に縦の溝が認められるが、之は恐らく多くの大形内容充實土偶體部に往々認められる縦の孔にあたるであらう。破片より推して此原土偶は大形品であつたと想像される。

近隣地方に於ける土偶の分布を見るに、諏訪地方は甲府盆地々方に續いて非常に豊富である。然るに下伊那地方は割合に乏しい、更に天龍川下流地方に到れば寥々として晨星の如くである。木曾谷地方も亦乏しく松本平地方は稍々豊富である。

第四 其他の土製品

土器容器のみを指す)及土偶の外に二三特殊な土製品がある。

其内最も重要なのは富縣村南福地字高岱から發見された圖版第二十七に示す如き異様な遺品である。從來類品の發見された事を聞かぬ。此土製品に就ては著者は曩に『人類學雜誌』第三十九卷第二號に紹介する所あり、其後甲野勇氏はに觸れて論じた。其概形は蒲鉾を縦に薄く切斷した如くて、其前後面に二つの橢圓形の孔が貫通してゐる。一方の端が多少破損してゐる丈で一個の完全な物である。現在長四寸三分内外、高さ中央にて二寸一分、厚さは底に於て九分。底面は平坦で、兩端に近づくに隨ひ多少狭まる。縦斷面に於ては上方は底より幾分厚さを減ずる。内容充實し、色は褐色を呈する。前後面に殆んど同意匠の紋様が認められる。即ち橢圓孔を環つて隆起帯及びその外周に連點の沈紋、器の縁に沿つて同様に隆起帯と連點沈紋があつて中央にて内方に折込んでゐる。

次に圖版第二十七に示す匙形の土製品は東箕輪村上ノ平の發見品である。上端の一部が缺失してゐる。長さ約三寸二分、最大幅約一寸七分、深さ六分、厚さ一分六厘。黒味を帯びた比較的堅緻な焼である。上端缺失部に孔があつたらしい痕跡が認められる。類品は諏訪郡長地村神明原から發見されてゐる。

圖版第二十七は手良村發見品で、矩形盤の底に四脚を附したものである。盤は縦二寸六分、横二寸、厚さ三分あり、脚は角狀の突起で高さ二分程ある。石器時代遺物中には殆んど類品が認められず、製法に於ても稍異色があるから、或は石器時代の製作品でないかも知れない。若し石器時代の遺物であるとすれば有脚石皿の模造品かとも考へられる。

圖版第三十三²は大正十四年七月發掘を行つて伊那富村北大出堅穴より出した皿形の土製品である。一部分缺けてゐる。上下が孰れと決する事は出来ないが、皿面を上と考へれば、上徑六寸五分、下徑七寸五分、高さ二寸の所と一寸五分の所とあり、厚さ上縁にて六分、深さ九分ある。上方の縁の上は製作後手を加えたと思しく磨耗の痕が歴然と見える。底面は内彎してゐる。色は黒褐色を呈し、焼は厚いものにも拘らずしつかりしてゐる。皿面を上方に向けて皿の如き用に當てたものとも考へられるが、又逆にして物を据える臺として用ひたとも考へる事が出来る。

乙 先史時代（吾人祖先の先驅者—固有日本人）

緒言

吾人祖先に屬する民衆が先史時代に當つて既に本郡諸地方に到着居住して生活を營んでゐた事は、彼等の遺物—彌生式土器其他是に伴つた關係遺物が各地から發見される事に依て明かに知る事が出来る。⁽¹⁾ 是等を遺した民衆は實に吾人祖先の先驅者(Fore-runners)である。

其主要なる遺物としては先土器がある。次に磨製石鏃、石斧、石庖丁其他の石製品類が是であつて、裝飾品類を含み、何れも獨特の特徴を示し、殊に土器に於いて然るを見る。彌生式土器なる名稱は是等の土器に向つて與へられる所て、この土器の系統は次の原史時代に於いて用ひられた埴瓮土器に見る事が出来るのであつて、後者は實に前者の亞流である。けれ共、後者をも併せて漫然彌生式土器と汎稱するのは適當では無い。先史時代に於ける吾人祖先の製作使用した、石器類を伴ふものは純粹の彌生式土器であるが、既に原史時代に這入つて鐵器等と伴ひ、古墳等より出て、是と同種のもものは、聚落遺跡等より出ずる、素より其形態眞製作手法等の彌生式土器のそれらを襲套したものであつて、新しい彌生式土器である。是は埴瓮土器の名稱を以て區別したなら適當である。編者は是等を除外して古い彌生式土器のみを採つた。⁽²⁾ 讀者は本冊附載の別圖版に於いて、先史時代の純然たる眞正の彌生式土器と、原史時代の埴瓮土器とを見るであらう。後者は既に製

作手法進み、唯、焼きの上に於いて火力の差異によつて色調の上には區別を見るのみで、他は祝部土器と絶對に同じものをすら見るのである。而して先史時代のそれは、微細なる其手法焼き等の上に埴瓮土器との區別を見る事が出来るのである。

土器に伴ふ石器類亦一種の特徴を示してゐる。磨製石鏃、石庖丁は其最も著しい遺物である。是等の遺物を遺した民衆は、狩獵漁業を事とし、旁、原始農業の曙光もすでに認められ、石器時代文化の把持者であつた。

1 鳥居『諏訪史第一卷』三一七—三二一頁參照

2 東京帝國大學人類學教室に「彌生式土器」の名稱の下に其標本室に陳列された遺物の内には、尠からず、原史時代の埴瓮土器を見受ける。是等は斯學の進歩した現代に於いては正しく原史時代遺物として先史時代のそれらから區別して除かなければ不可である。是はむしろ埴瓮土器と稱す可きであつて、狭義の先史時代の彌生式土器ではない。又、京都帝國大學考古學教室出版の同教室研究報告卷末の彌生式土器の聚成圖も亦此流統を襲套してゐる様である。彌生式土器の名稱を用ひるのは可であるとしても、前者を「先史時代の彌生式土器」、後者を「原史時代の彌生式土器」等の稱呼を以て區別しなければなるまい。混雜を招く恐れがあるからである。

第一編 遺跡

第一章 遺跡の地理的分布

彌生式土器竝に關係遺物の發見地は、附載地名表及び分布地圖に於いて示せる如く、各地に於て發見される。其分布を観ると、天龍川西岸に於いて北部から先、伊那富村に發見され、西箕輪、中箕輪兩村より、伊那町に到つて漸く發見數を加へ一中心を成し、西春近村より、宮田村に到り三大遺跡地群の存在が認められ、南下しては飯島村の遺跡地と成り、片桐上片桐兩村の是等と續き、東岸に渡れば、伊那村に二大遺跡地があつて、東春近村のそれらを距て、富縣村の二大遺跡地と相對し、美篁手良兩村に互つた大群集、東箕輪村の大遺跡地を存し、朝日村に於て本郡東北端の分布を見る。天龍川筋以外に於ける分布は三峰川沿岸の富縣村及河南村のそれらから更に上流地帯の長藤、美和、伊那里に到てゐる。更に是等を外にしては南向村にも多少分布する如くである。

- I 伊那町西岸を中心とし、南西箕輪兩村に互る(伊那宮、中箕輪兩村を含む)
- II 西春近、宮田兩村に互る
- III 飯島、片桐、上片桐、七久保三村に互る(赤穂村を含む)
- IV A 伊那村(中澤、南向、伊那里三村を含む)
- B 東春近、富縣、河南三村に互る

- V
A 手良美、篤兩村に亘る(箕輪村、伊那町東岸、長藤村を含む)
B 東箕輪村、朝日村を含む

第二章 主要なる遺跡

一 伊那町・南箕輪村の遺跡群

アイヌ人のそれ等と交錯する所であつて、圖版第二に示した御園宮ノ前同第四上段に示した今泉は其例である。遺物は主として各種の土器片である。南箕輪村では磨製石鏃の發見多く、角形把手土器片等が出てゐる。

二 西春近村・諏訪形・安岡城遺跡

圖版第三十四上段に示したものがそれで、發見遺物には波狀紋を有する土器片、底部角形把手、裝飾を有する口縁部等が發見採集され、且、高坏の脚臺の周邊を缺いた一種の廢物利用的の土製品が數個出てゐる。石庖丁も出てゐる。

三 宮田村の遺跡

駒ヶ原と大久保の兩ヶ所から大形な完形に近い土器が出てゐる。中越からは波紋を描いた破片が發見されてゐる。

四 飯島・片桐兩村の遺跡

上山本郷等から遺物が發見されてゐる。主に土器であるが、又石庖丁、石斧等もある。田切町屋

からは諸種の土器(高坏裝飾ある口縁部底に孔を穿ちたる甗様の土器等)が出てゐる。片桐村では牧ヶ原から多くの土器片及び完形なものを発見された。

五 伊那村・東春近・富縣・河南四村の諸遺跡

各々中心地を成してゐる。伊那村では栗林上ノ原から何れも多く土器片を発見し、又石器類も出てゐる。打製石庖丁類が比較的多い。東春近村では主として土器片であつて、磨製石鏃も出てゐる。富縣村に於ては貝沼からは裝飾ある口縁部、其他紋様等の多く描かれた土器片各種のものが出てゐる。石器としては石庖丁、磨石鏃等も発見され、又管玉も出てゐる。河南村金井の遺跡地からは多量の破片ではあるが、土器片を発見し、完形に近いものも発見された。圖版第三十四の下段は此遺跡地を示したものである。

六 手良・美篤兩村の遺跡

手良村からは各種の遺物——主として石器類を出してゐる。磨製石鏃及石庖丁(磨打兩者を含む)其他の石製品を発見し、又美篤村からも土器片が各所で発見された。

七 東箕輪村の遺跡

圖版第七は上ノ平の遺跡地を示したものの、遺物の多數は土器片で、特に紋様のあるものが眼を引く。石庖丁、磨石鏃もある。

以上略述した遺跡地は何れも多く土器片を包含し石器類をも発見し、恐らくは堅穴を形成したものの如くに想像される。山城址としては第七のものを挙げ得る。